

鳥取県岩美郡岩美町

新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書

2001.3

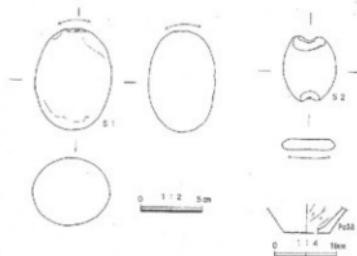
岩美町教育委員会

# 新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書

## 正誤表

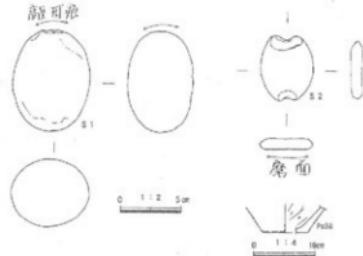
| ページ  | 行           | 誤                    | 正                    |
|------|-------------|----------------------|----------------------|
| P 6  | 3行目<br>14行目 | 海食台<br>波食面           | 海蝕台<br>波蝕面           |
| P 12 | 7行目<br>20行目 | 銀象眼太刀<br>「鬼の椀」       | 銀象嵌太刀<br>「鬼の碗」       |
| P 32 | 挿図 17       | ⑨橙色土 (7.5YR6/8) 填質盛土 | ⑨橙色土 (7.5YR6/8) 墳丘盛土 |
| P 58 | 12行目        | 叩き石                  | 敲石                   |

P 58・挿図 33 (誤)



挿図33 新井三嶋谷遺跡、遺構外出土遺物実測図(1)

P 58・挿図 33 (正)



挿図33 新井三嶋谷遺跡、遺構外出土遺物実測図(1)

|      |     |         |         |
|------|-----|---------|---------|
| P 63 | 5行目 | 1~3条施して | 1~3条施して |
| 図版46 |     |         |         |
| 図版47 |     |         |         |

## 序文

岩美町は、鳥取県の最東端にあり、兵庫県との県境に位置する人口約1万5千人の町です。風光明媚な山陰海岸国立公園を擁し、国の天然記念物に指定された浦富海岸、国指定天然記念物のカキツバタ群落とともに、原始・古代遺跡も多く、歴史豊かな風土と自然に恵まれた環境にあります。

今回の調査が行われた新井三嶋谷遺跡周辺は、遺跡の密集する地域で、弥生時代の土器片や大型蛤刃石斧・石包丁などが出土した新井遺跡をはじめ、最近調査された島根県加茂岩倉銅鐸と兄弟銅鐸であることが判明した新井銅鐸出土地（上屋敷遺跡）を擁しています。

平成11年度から岩美南小学校建設に伴い、緊急発掘を行った結果、縄文～中世にかけての遺構が発見されました。中でも新井三嶋谷1号墳丘墓は、弥生時代後期初頭に造られた貼石をもつ全国最大級の墳丘墓であることが判明し、話題となりました。

本町としては、この貴重な文化財を後世に残し伝えるとともに、歴史教育の場として活用していくこうという方針のもと、校舎建設に支障をきたさない1・2号墳丘墓および、1号墳を整備保存することとなりました。これをうけて、平成12年度には新井三嶋谷墳丘墓発掘調査検討委員会を設置し、整備保存に向けての発掘調査を行ってきました。

調査の結果、新井三嶋谷墳丘墓は、前例のない数々の貴重な資料を提供するとともに、弥生時代の墳丘墓を考えるうえでも一石を投ずる遺跡となりました。

発掘調査が完了し、ここにささやかな冊子ではありますが、一書をもってご報告します。本書が郷土研究の一助として活用され、埋蔵文化財の保護意識の高揚に役立てていただければ幸いです。

最後にこの成果を報告できましたのも、発掘調査検討委員会の先生方をはじめ、現場で調査に携わっていただいた皆様、ならびに関係機関各位の惜しみない援助とご協力をいただいた賜と存じます。ここに心より深く感謝申し上げます。

平成13年3月

岩美町教育委員会

教育長 大黒 啓之

## 例　　言

1. 本書は1999年度、新井三嶋谷墳丘墓の発掘調査結果及び、2000（平成12）年度に国庫・県費補助金を受けて岩美町教育委員会が実施した、新井三嶋谷1号墳丘墓の調査結果をまとめたものである。
2. 調査を実施した遺跡は、鳥取県岩美郡岩美町大字新井字長道路418-1、三嶋谷419-2番に所在する。
3. 平成12年度調査期間及び面積は次の通りである。

期間……………2000年6月1日～2001年2月28日  
面積……………350m<sup>2</sup>
4. 発掘調査は、中野 知照、松本 美佐子、中島 伸二が担当して行った。
5. 本書に用いた方位は、第6・7図は真北を示し、他は磁北である。附図2は、国土座標による。岩美町に於ける磁北は、真北に対し西に6度40分偏している。海拔標高はTPによる。
6. 遺構図中の遺物に付した番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。また、写真図版に於いても同様である。
7. 遺物実測図のスケールは、須恵器・土師器・弥生土器は1/4、玉製品は1/1である。
8. 本書の執筆・編集は、中野 知照、松本 美佐子、中島 伸二が共同して当たった。
9. 第2章 第1節は、元鳥取大学教授・赤木 三郎氏より玉稿を賜り、出土玉製品・貼石の石材鑑定も行っていただいた。
10. 発掘調査にあたり、新井三嶋谷墳丘墓発掘調査検討委員会委員・渡辺 貞幸、名越 勉、藤田 憲司、岸本 直文の各氏、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官・小野 健吉氏、国立歴史民族博物館館長・佐原 真氏、徳島文理大学教授・石野 博信氏、大阪府立弥生博物館館長・金闇 惣氏、関西外国语大学助教授・佐古 和枝氏、島根考古学会会長・東森 市良氏、鳥取大学教育地域科学部教授・岡田 昭明氏、元鳥取大学教育学部教授・赤木 三郎氏、兵庫県養父郡八鹿町教育委員会・谷本 進氏からご指導・ご教示を受けた。また、現地の測量調査ではアサヒコンサルタント㈱の協力を得た。
11. 現地・整理作業の全期間にわたって宮下 美江子、高垣 恵巳子氏のご協力を受けた。ここに記して深謝の意を表す。
12. 発掘調査によって作成した記録類及び出土遺物等は、岩美町教育委員会に保管している。
13. 発掘調査の体制は、次の通りである。

発掘調査主体 岩美町教育委員会 教育長 大黒 啓之  
発掘調査検討委員会委員 島根大学教授 渡辺 貞幸（委員会座長）  
委員 鳥取県文化財審議委員 名越 勉

委員 大阪府埋蔵文化財センター中部調査事務所所長 藤田 憲司  
委員 大阪市立大学助教授 岸本 直文  
関係機関 鳥取県教育委員会文化課 高田 健一  
関係機関 岩美町文化財保護委員 会長 谷村 信之  
関係機関 岩美町文化財保護委員 会長職務代理者 吉田 政博  
関係機関 株式会社 空間文化開発機構  
調査指導 鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター  
調査主任 中野 知照  
調査補助員 松本 美佐子  
事務局 岩美町教育委員会事務局生涯学習課  
作業従事者 高垣 恵巳子、田中 照江、田中 徳太郎、田中 花子、田中 秀蔵、  
田中 麟博、西村 益子、宮下 美江子、村島 節子、山本とし江

## 本文目次

|                          |         |
|--------------------------|---------|
| 第1章 調査の経過.....           | 1       |
| 第1節 発掘調査に至る経緯.....       | (中島) 1  |
| 第2節 発掘調査検討委員会協議の経過.....  | (中島) 1  |
| 第3節 発掘調査の方法.....         | (中野) 3  |
| 第2章 遺跡の立地と環境.....        | 4       |
| 第1節 遺跡周辺の地質学的・地理的環境..... | (赤木) 4  |
| 第2節 歴史的環境.....           | (中野) 9  |
| 第3章 発掘調査の概要.....         | 14      |
| 第1節 新井三鶴谷1号墳丘墓の調査.....   | 14      |
| 第1項 調査区・トレーニングの設定.....   | (中野) 16 |
| 第2項 第1主体の調査.....         | 16      |
| (1) 遺構の調査.....           | (中野) 16 |
| (2) 遺物出土状況.....          | (松本) 23 |
| (3) 出土遺物.....            | (松本) 27 |
| 第3項 第2主体の調査.....         | 31      |
| (1) 遺構の調査.....           | (中野) 31 |
| 第4項 第3主体の調査.....         | 33      |
| (1) 遺構の調査.....           | (中野) 33 |
| (2) 遺物出土状況.....          | (松本) 33 |
| (3) 出土遺物.....            | (松本) 34 |

|                        |             |
|------------------------|-------------|
| 第5項 墳丘斜面の調査            | (中野) ... 34 |
| (1) 東面の調査              | 34          |
| (2) 西面の調査              | 35          |
| (3) 南面の調査              | 38          |
| (4) 北面の調査              | 39          |
| 第6項 墳丘裾部の調査            | (中野) ... 41 |
| (1) 東面裾部の調査            | 41          |
| I 岩盤露呈部                | 41          |
| II 玉作工房跡               | 41          |
| III 墓道状遺構              | 46          |
| (2) 南面裾部の調査            | 47          |
| 第2節 新井三嶋谷2号墳丘墓の調査      | (中野) ... 49 |
| 第1項 第1主体の調査            | 49          |
| 第2項 第2主体の調査            | 52          |
| 第3項 小結                 | 52          |
| 第3節 新井三嶋谷1号墳の調査        | 52          |
| 第1項 墳丘                 | (中野) ... 52 |
| 第2項 石室                 | (中野) ... 53 |
| 第3項 遺物出土状況             | (松本) ... 56 |
| 第4項 出土遺物               | (松本) ... 56 |
| 第5項 小結                 | (中野) ... 57 |
| 第4節 新井三嶋谷遺跡発掘調査遺構外出土遺物 | (松本) ... 58 |
| 第1項 遺構外出土遺物・1          | 58          |
| 第2項 遺構外出土遺物・2          | 58          |
| 第4章 考察                 | 60          |
| 第1節 新井三嶋谷1号墳丘墓について     | (中野) ... 60 |
| 第2節 新井三嶋谷1号墳丘墓出土遺物について | (松本) ... 65 |

## 挿図目次

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 挿図1 新井三嶋谷墳丘墓周辺の地質層序表               | 8  |
| 挿図2 東側より見た墳丘墓と基盤岩の成層状態を示す写真        | 8  |
| 挿図3 千葉市谷当のニオガイの合弁殻に伴う巣穴 (大森, 1993) | 8  |
| 挿図4 岩美町海岸部の古地理図                    | 8  |
| 挿図5 岩美町遺跡分布図                       | 11 |

|      |   |       |
|------|---|-------|
| 挿図 6 | 新井三鷗谷遺跡位置図（新井三鷗谷周辺部）                      | 15    |
| 挿図 7 | 発掘調査範囲、全体図及びトレンチ配置図                       | 17・18 |
| 挿図 8 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、墳丘土層断面図（南北、東西トレンチ）           | 19・20 |
| 挿図 9 | 各トレンチ土層断面図                                | 21・22 |
| 挿図10 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 1 主体遺構図（平面、土層断面図）          | 24    |
| 挿図11 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 1 主体北棺遺構図（平面、土層断面、遺物出土状況図） | 25    |
| 挿図12 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 1 主体南棺遺構図（平面、土層断面、遺物出土状況図） | 26    |
| 挿図13 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 1 主体北棺出土遺物実測図              | 28    |
| 挿図14 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 1 主体南棺出土遺物実測図              | 29    |
| 挿図15 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 1 主体北棺・南棺出土遺物実測図           | 30    |
| 挿図16 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 2 主体遺構図（平面、土層断面図）          | 31    |
| 挿図17 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 3 主体遺構図（平面、土層断面、遺物出土状況図）   | 32    |
| 挿図18 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 3 主体出土遺物実測図                | 33    |
| 挿図19 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、貼石エレベーション図（1）                | 36    |
| 挿図20 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、貼石エレベーション図（2）                | 37    |
| 挿図21 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、東面墳丘裾部検出ピット遺構図及び遺物出土状況図      | 42    |
| 挿図22 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、東面墳丘裾部出土遺物実測図（1）             | 43    |
| 挿図23 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、東面墳丘裾部出土遺物実測図（2）             | 44    |
| 挿図24 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、東面墳丘裾部出土遺物実測図（3）             | 45    |
| 挿図25 | 新井三鷗谷 1 号墳、墓道状遺構（平面、土層断面図）                | 46    |
| 挿図26 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、南面墳丘裾部検出ピット群遺構図              | 47    |
| 挿図27 | 新井三鷗谷 2 号墳丘墓、全体図                          | 48    |
| 挿図28 | 新井三鷗谷 2 号墳丘墓、第 1 主体遺構図（平面、土層断面、見透し図）      | 50    |
| 挿図29 | 新井三鷗谷 2 号墳丘墓、第 2 主体遺構図（平面、土層断面、見透し図）      | 51    |
| 挿図30 | 新井三鷗谷 1 号墳、土層断面図                          | 53    |
| 挿図31 | 新井三鷗谷 1 号墳、遺構図                            | 55    |
| 挿図32 | 新井三鷗谷 1 号墳、出土遺物実測図                        | 56    |
| 挿図33 | 新井三鷗谷遺跡、遺構外出土遺物実測図（1）                     | 58    |
| 挿図34 | 新井三鷗谷遺跡、遺構外出土遺物実測図（2）                     | 59    |
| 附図 1 | 鳥取県東部、弥生時代遺跡分布図                           |       |
| 附図 2 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、調査前全体図                       |       |
| 附図 3 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、全体図                          |       |
| 附図 4 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、東面貼石実測図（平面図・立面図）             |       |
| 附図 5 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、西面貼石実測図（平面図・立面図）             |       |
| 附図 6 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、南面貼石実測図（平面図・立面図）             |       |
| 附図 7 | 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、北面貼石実測図（平面図・立面図）             |       |

## 挿 表 目 次

|                                      |         |
|--------------------------------------|---------|
| 表 1 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 1 主体出土遺物観察表       | 68 ~ 70 |
| 表 2 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、第 3 主体出土遺物観察表       | 70      |
| 表 3 新井三鷗谷 遺跡、遺構外出土遺物観察表 (1)          | 70      |
| 表 4 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、東面裾部出土遺物観察表         | 70 · 71 |
| 表 5 新井三鷗谷 1 号墳丘墓、東面裾部出土石製模造品 (玉) 観察表 | 71 · 72 |
| 表 6 新井三鷗谷 1 号墳、出土遺物観察表               | 72      |
| 表 7 新井三鷗谷 遺跡、遺構外出土遺物観察表 (2)          | 72 · 73 |
| 表 8 烏取県東部弥生時代遺跡一覧表                   | 74 · 75 |

## 図 版 目 次

カラー写真

カラー写真

図版 1 1号墳丘墓 (北東より) 新井三鷗谷地区全景 (北東上空より)

図版 2 1号墳丘墓 (北東上空より) 1号墳丘墓 (東面)

図版 3 1号墳丘墓 (北面) 1号墳丘墓 (北面貼石)

図版 4 ①北棺・南棺黒褐色土土層断面 (西より) ②北棺・南棺黒褐色土検出状況 (南東より)  
③北棺・南棺黒褐色土完掘状況 (東より) ④北棺・南棺黒褐色土完掘状況 (南東より)

図版 5 ①~④北棺・南棺黒褐色土土層断面 ⑤北棺・南棺黒褐色土完掘状況  
⑥第 1 主体掘り形土層断面 ⑦第 1 主体土層断面 ⑧北棺黒褐色土完掘状況

図版 6 ①~③第 1 主体土層断面 ④南棺遺物検出状況  
⑤⑥南棺黒褐色土土層断面 ⑦⑧北棺遺物出土状況

図版 7 第 1 主体掘り形検出状況

図版 8 ①第 2 主体検出状況 (北西より) ②第 2 主体、木棺部検出状況 (南西より)  
③第 2 主体・第 3 主体検出状況 (南東より) ④第 2 主体土層断面 (南西より)

図版 9 ①第 3 主体黒褐色土検出状況 (南西より) ②④第 3 主体黒褐色土完掘状況 (北西より)  
③第 3 主体土層断面 (南西より)

図版 10 ①第 3 主体検出状況 (北東より) ②第 3 主体検出状況 (南西より) ③第 3 主体土層断面

図版 11 ①第 2 · 第 3 主体検出状況 ②~④第 3 主体土層断面  
⑤第 2 · 第 3 主体検出状況 (南東より) ⑥第 3 主体検出状況 (南東より)  
⑦第 3 主体遺物出土状況 (北西より) ⑧第 3 主体遺物出土状況 (南西より)

図版 12 ①2トレンチ ②1トレンチ ③3トレンチ ④⑤1トレンチ ⑥19トレンチ  
⑦⑧1トレンチ

- 図版13 ①2トレンチ ②19トレンチ ③18・21トレンチ ④19トレンチ  
           ⑤18トレンチ ⑥15トレンチ ⑦20トレンチ ⑧15トレンチ
- 図版14 ①南面貼石状況（南東より） ②5トレンチ ③6トレンチ ④8トレンチ  
           ⑤8トレンチ ⑥7トレンチ ⑦9トレンチ
- 図版15 ①10トレンチ ②12トレンチ ③IIベルト・東面ピット群 ④Iベルト周辺  
           ⑤IIベルト ⑥II・IIIベルト周辺 ⑦IVベルト周辺 ⑧IVベルト周辺
- 図版16 ①1号墳丘墓北東隅部 ②17トレンチ周辺 ③⑤～⑦Vベルト周辺  
           ④16トレンチ ⑧1号墳道か？
- 図版17 ①1号墳丘墓（上空より） ②1号墳丘墓北東隅（北より）  
           ③1号墳丘墓南東側（東より） ④1・2号墳丘墓（南東より）
- 図版18 ①東面貼石状況 ②③東面隅部貼石状況 ④～⑧東面貼石状況
- 図版19 東面貼石状況
- 図版20 東面貼石状況
- 図版21 東面貼石状況
- 図版22 ①②④西面貼石状況 ③西面貼石状況（上空より）
- 図版23 ①西面貼石状況（西より） ②西面貼石状況  
           ③④1号墳丘墓（南上空より） ⑤～⑧西面貼石状況
- 図版24 西面貼石状況
- 図版25 ①②南面貼石状況（南より） ③南・東面貼石状況（上空より）  
           ④南東隅部貼石状況（南東より）
- 図版26 ①②南面貼石状況（南より） ③～⑥南面貼石状況（南東より）  
           ⑦南面貼石状況（南より） ⑧南面貼石状況（東より）
- 図版27 南面貼石状況
- 図版28 南面貼石状況
- 図版29 南面貼石状況
- 図版30 ①1号墳丘墓（上空より） ②～④北面貼石状況
- 図版31 ①1号墳丘墓北西隅（上空より） ②③⑤～⑧北面貼石状況  
           ④1号墳丘墓北東隅（北より）
- 図版32 ①②⑥～⑧北面貼石状況 ③16トレンチ ④北面貼石状況（北東より）
- 図版33 北面貼石状況
- 図版34 ①東面貼石・岩盤露出状況  
           ②1号墳丘墓東側裾部、玉・石材チップ出土状況（南西より）  
           ③1号墳丘墓東側裾部、玉・石材チップ出土状況（東より）  
           ④1号墳丘墓東側裾部ピット完掘状況（東より）
- 図版35 ①④1号墳丘墓東側裾部、石材出土状況 ②③⑤1号墳丘墓東側裾部、玉出土状況  
           ⑥⑧玉出土状況 ⑦1号墳丘墓東側裾部、ピット完掘状況

- 図版36 ①ピット検出状況 ②南側裾部ピット半截状況 ③ピット3 ④ピット1  
⑤ピット4 ⑥ピット8 ⑦ピット2 ⑧ピット6・5
- 図版37 ①～④墳丘東側裾部岩盤露出状況（東より）
- 図版38 ①東面岩盤露出状況 ②③1号墳墓道状遺構（右中央はVベルト） ④Vベルト
- 図版39 ①～⑥東面岩盤露出状況 ⑦東面裾部遺物出土状況 ⑧東面裾部状況
- 図版40 ①～③穿孔貝生息痕 ④～⑧穿孔貝生息痕のある貼石
- 図版41 ①2号墳丘墓遺構検出面（南東より） ②2号墳丘墓完掘状況（北西より）  
③第1主体完掘状況（北西より） ④第2主体完掘状況（南東より）
- 図版42 ①1号墳検出状況 ②1号墳完掘状況（東より）  
③1号墳ベルト除去前（南東より） ④1号墳完掘状況（北西より）
- 図版43 ①1号墳検出後、ベルト設定 ②1号墳ベルト ③20トレンチ  
④1号墳縦断面土層検出状況 ⑤⑥1号墳縦・横断ベルト  
⑦1号墳横断面土層検出状況 ⑧1号墳横断面土層検出状況
- 図版44 ①1号墳横断面土層検出状況 ②③1号墳横断トレンチ  
④1号墳玄門付近土師器出土状況 ⑤～⑦1号墳遺物出土状況  
⑧1号墳丘墓と1号墳（北より）
- 図版45 第1主体、北棺出土遺物
- 図版46 第1主体、北棺出土遺物
- 図版47 第1主体、南棺出土遺物
- 図版48 第1主体、北棺・南棺出土遺物 第3主体出土遺物
- 図版49 1号墳丘墓貼石石材 北棺出土円礫・玉砂利 遺構外出土遺物1
- 図版50 1号墳丘墓東側裾部出土遺物
- 図版51 1号墳丘墓東側裾部出土遺物
- 図版52 1号墳出土遺物
- 図版53 遺構外出土遺物1（1号墳丘墓北側斜面）
- 図版54 遺構外出土遺物2（1号墳丘墓墳頂部）・（1号墳丘墓南側裾部）
- 図版55 (1) 墳丘墓の基盤岩平坦面にはば垂直に穿孔したニオガイ科の生痕。  
(2) 同左。やや斜めの破断面に見られるニオガイ科の貝がつくった生痕。  
(3) 墳丘墓のある丘陵の側面に見られる生痕。ほぼ水平な地層である。  
(4) 生痕の内表面に残るニオガイ科の貝が作った切削痕。  
(5) 東側より見た墳丘墓と基盤岩の成層状態を示す写真。

# 第1章 調査の経過

## 第1節 発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、岩美町立岩美南小学校建設事業に伴い、工事予定地内の発掘調査により検出した新井三嶋谷墳丘墓の学術調査を目的としたものである。

岩美町立岩美南小学校建設事業は、平成10年11月に着手していたが、平成11年4月、工事区域内の丘陵及び山林の樹木伐採を完了した時点で、埋蔵文化財の所在が予測される地形を認め、直ちに県教育委員会と埋蔵文化財の保護と工事との調整を行うべき協議を行った。協議の結果、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、A～C区に調査区を分けてそれぞれトレーナーを設定して行ったが、B区及びC区について埋蔵文化財が確認されたため、その分布範囲を確定した。その後、建設工事計画と文化財保護の調整がつかなかつたため、記録保存となった。

発掘調査により、工事区域内の南側の山林（B区）に古墳10基、城砦跡が確認された。また、南東から北西方向にかけて舌状に伸びる細長い丘陵上（C区）に、縄文時代後期の石器工房跡、弥生時代の墳丘墓2基、古墳3基などを確認した。このように工事区域内からは、縄文時代から古墳時代に至る遺跡と、中世の城砦跡の所在が確認された。中でも新井三嶋谷1号墳丘墓は、弥生時代後期初頭の築造で、この時期としては全国でも最大級の規模を持ち、貼石の特徴など他の墳丘墓に類を見ない貴重な文化財であることが判明した。

その後、鳥取県文化財保護審議会、鳥取県埋蔵文化財センター等の指導により、新井三嶋谷1号墳丘墓とそれに隣接する新井三嶋谷2号墳丘墓を保存整備することを決定した。また、保存するにあたり、平成11年11月には町の史跡としてこの二つの墳丘墓を文化財指定した。

保存が決定された新井三嶋谷墳丘墓の学術的調査を実施するため、県教育委員会と協議を重ねた。その結果、平成11年度に引き続き、国及び県の補助金を受けて、文化庁・県教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 発掘調査検討委員会協議の経過

発掘調査にあたり、平成12年6月に「新井三嶋谷墳丘墓発掘調査検討委員会」を発足し、協議の後調査に着手することとなった。

「新井三嶋谷墳丘墓発掘調査検討委員会」（以下、「検討委員会」）は、文化庁・鳥取県教育委員会の指導のもと、岩美町教育委員会が4人の委員を委嘱し、学術的な発掘調査の方法や計画について専門的に検討することを目的に発足した。

第1回目の「検討委員会」は、平成12年6月4日（日）に開催された。島根大学の渡辺貞幸教

授を座長に選出し、「平成12年度発掘調査実施について」という内容で協議が行われた。

当初、本町としては、墳丘墓の墓制の実態を掘むため、全容を解明し考古学的な資料として活用を図る方針であった。しかし、墳丘墓を保存することに決定していたため、「検討委員会」では、保存整備のために必要な発掘調査方法を前提とした調査方針が示された。特に主体部については、発掘調査すべきかどうかについて慎重に審議が成された。その結果、主体部の築造時期を確認するため、第3主体の黒褐色土（供獻土器包含層）のみ掘り下げて調査することとなった。

「検討委員会」で示された調査方針は、墳丘墓の北面に所在する新井三嶋谷1号墳の継続調査。東側のテラス面にトレンチを設定し、地山面の確認調査を実施する。また、墳丘斜面にトレンチを設定し、墳丘盛土、地山面、貼石の施工法、墳丘裾部の確定などを行なう等であった。

第2回目の「検討委員会」は、平成12年8月30日（水）に開催された。第1回「検討委員会」の調査方針に基づき発掘調査した結果を報告し、その成果をもとに保存整備についての協議が成された。保存整備については、本町と墳丘墓整備の実施設計及び施工管理の契約を締結していた大阪市の株式会社空間文化機構にも協議に参加していただいた。

整備計画の何通りかの案を「検討委員会」に提示し、新井三嶋谷墳丘墓と似た様相を持つ島根県安来市荒島墳墓群、京都府加悦町の古墳公園整備の例などを参考に協議が進められた。時間の関係上、今回の保存整備の協議は、内容を完全に決定するまでには至らず、主なところを決定し、詳細については第3回の「検討委員会」で協議する事となった。

第3回の「検討委員会」は、平成12年9月28日（木）に開催された。今回は、保存整備を中心には話し合いが持たれ、第2回「検討委員会」で決定できなかった詳細部分について協議が成された。

協議の結果、基本的に新井三嶋谷1号墳丘墓及び2号墳丘墓共に検出した形状をそのまま復元する。1号墳丘墓については、発掘調査時の露出状況と同様な貼り方をする。2号墳丘墓については、シバ等で表面を覆うことなどが決まった。

また、貼石の整備方法、主体部の表現法、見学路、案内施設等の施工方法についても協議された。

発掘調査については、「検討委員会」で協議された調査内容を全て終了し、岩盤実測と全体写真撮影を行えば完了する事を報告し、「検討委員会」の目的を達成した。

### 第3節 発掘調査の方法

本年度に実施した新井三嶋谷墳丘墓発掘調査は、「新井三嶋谷墳丘墓発掘調査検討委員会」(以下、「検討委員会」)で協議された方針に則った調査方法を企画した。

「検討委員会」でなされた協議の結果、以下の調査方針が示された。

- ① 埋葬施設の発掘調査は、遺跡を保存するという立場から、そして、調査期間と調査費用との関連から見て無理があるので掘り下げは行わない。
- ② 前年度、諸般の事情で着手できなかった未調査部分を中心に発掘調査を実施する。
- ③ 1号墳丘墓北面裾部に位置する、新井三嶋谷1号墳の石室掘り形を検出し、1号墳丘墓と墳丘裾部との関係を把握する。1号墳の石材は除去しない。
- ④ 東面裾部のテラス面にトレントを設定して、墳丘裾部及び丘陵斜面との関連を調査する。
- ⑤ 墳丘斜面の貼石に関しては、トレントを設定して施工方法及び盛土の有無を確認する。
- ⑥ 斜面に傾斜変換点が見られる部分についても、同様にトレントを設定して調査を行う。
- ⑦ 前年度、墳頂部に設定しているトレントを墳丘斜面裾部まで延長し、墳丘盛土の確認を行う。
- ⑧ 埋葬施設に関しては、トレント調査をするに留める。
  - i 第1主体は、墓壙内埋土の土層断面の再確認を行う。また、墓壙掘り形の規模を確定する。
  - ii 前年度の調査で、切り合い関係が認められた第2・第3主体については、後出すると考えられる第3主体についてのみトレント調査を実施する。同時に黒褐色土の落ち込み部分は、埋土を除去し供獻土器の有無を確認する。また、墓壙掘り形の規模を再確認する。
  - iii 第2主体は、遺構検出面で墓壙掘り形の規模を再確認する。

このような「検討委員会」協議の内容に沿い、また前年度調査の結果を踏まえて調査計画をたてた。

今年度実施する発掘調査は1号墳を除き、その殆どがトレント調査であるため、調査区全域にトレントを設定した。設定したトレントは、既存のトレントと関連づけられるように配置した。また、既存トレントの延長部分については、従来のトレント番号を踏襲している。東面テラス面に設定したトレントは、一部を除き任意である。

調査を実施するにあたり、必要に応じて設定したトレントもあり、最終的に21を数える。土層観察用に設定したベルトは5である。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 岩美町新井三嶋谷遺跡とその周辺の自然環境

放送大学鳥取学習センター 赤木三郎

#### まえがき

鳥取県岩美郡岩美町新井の三嶋谷墳丘墓群のうち、最大規模の1号墳丘墓を被覆する貼石の石質と墳丘墓の載る丘陵の地形・地質について調査した。その結果、貼石は蒲生川流域から流下した円礫のうち、花崗岩質や安山岩質の岩石の中礫が選択的に採取されて使用されたものであり、一部に墳丘墓周辺に分布する岩石が岩盤から削剥分離して円磨された亜円礫ないしは亜角礫を利用されていることが分かった。その中に凝灰質泥岩礫の表面に穿孔貝が穿孔した生痕化石（生息痕）の残るものがあり、これらが海岸近くの岸壁や岩礁、礁浜に穿孔するニオガイの作ったものであることが分かった。精査すると墳丘墓の載る基盤岩の表層部にも多数の生痕が認められた。墳丘墓の載る三嶋谷丘陵はかつての海蝕台が離水したものであり、貼石に使用された円礫は当時の海岸線近くにあったものである。生痕化石の存在が示す地質学的な意義と丘陵形成までの古地理の考察を行った。

#### 1) 地形・地質の概観 [挿図1・5・6、附図1]

扇ノ山（1310m）に源を発する蒲生川は岩井温泉付近から西方に流れて沖積平野をつくる。新井三嶋谷はこの付近で蒲生川左岸に合流する支谷である。河岸には標高13m～15mの緩傾斜の丘陵が発達している。右岸には高山、広岡などの丘陵が広がり、左岸の丘陵には上記の1号墳丘墓、2号墳丘墓が構築されている。

新井三嶋谷墳丘墓の載る丘陵は北方に蒲生川沖積平野を見下ろし、現在では遠くに浦富砂丘が日本海の海岸線沿いに広がる展望点である。蒲生川は本来は浦富海岸の蒲生川沖積平野を北流していたが、現在では河崎付近の狭間を西流して小田川と合流し網代で日本海に注いでいる。

新井三嶋谷墳丘墓の背後に広がる山地は山腹・山麓緩斜面と呼ばれる標高150m以下の山地であり、標高200m～300mの小起伏山地がさらにその背後に広がる。

この付近の地質の概要は鳥取県（1996）、松本（1991）などによって明らかになっている。それによると蒲生川水系には基盤岩として白亜紀後期～古第三紀に活動した“中生代火山岩類”と呼称される流紋岩類の溶岩や火砕岩、優白色で黒雲母を含む“鳥取花崗岩”と呼称されている花崗岩類が分布しており、県境付近の一部には鮮新世の火山岩類が見られるものの流域の大部分は新生代第三紀中新世の鳥取層群に属するものであり、特にその上位は松本（1991）によって岩美累層と命名された地層が広く分布している。新井三嶋谷墳丘墓の基盤は岩美累層の荒金火砕岩層でできている。

新井三嶋谷墳丘墓の貼石に使用されている岩石は、浦富海岸部・蒲生川水系・墳丘墓周辺に分布する岩石であるが、小田川の上流域から河口部に運搬された河床礫も使用されている可能性はあるものの、特定できるまでには至らなかった。

貼石に使用された岩石の多くは花崗斑岩である。そのほか荒金火砕岩層に属する安山岩類や石英斑岩、閃綠岩の礫を見ることができるが量は少ない。荒金火砕岩層は主に石英安山岩質凝灰角礫岩～火山礫凝灰岩、軽石凝灰岩、凝灰岩などからなり少量の泥岩、砂岩、礫岩を伴う。墳丘墓の載る丘陵は全体に凝灰質泥岩であり、砂岩質のところもある。地層の走向はほぼ東西で、北に僅かに傾斜している。西方の山麓に設けられている新設道路沿いには本岩層が良く露出しており、泥岩の一部には生物によって擾乱されたと考えられる葉理がみられるが化石や生痕はみられなかつた。

貼石の中に荒金火砕岩層に属する凝灰質泥岩がみられる。この亜円礫の表面に多数の穿孔がみられるものがある。これは海棲の二枚貝類であるニオガイが穿孔したもので、過去の生物が生息時に残した生活の跡であり、生痕化石と呼ばれるものである。また、花崗岩や花崗斑岩の円礫がかなり多く使用されているが、これらは浦富海岸部に多くみられる岩石で、丘陵近くまで前進していた海岸の礫浜から採集され使用されていると考えられる。これら花崗岩質の円礫には生痕は全く穿孔されていなかった。

## 2) 生痕のある岩盤及び貼石に穿孔された岩石について [挿図2・3、図版40・55]

貼石の一部が凝灰質泥岩で、生物の残した生痕があることから、基盤の岩石表面を観察したところ、同岩質であるばかりか、表面に同一つの生痕が多数見られた。礫にのこる生痕は礫の表面に万遍なく見られるのに、基盤の露頭では丘陵上面では側面表面にほぼ垂直に穿孔され、断面が径2cm強の穴が開いているものが多い。一方、側面では不規則な分布で生痕の縦断方向のくぼみが多数見られた。

この生痕は基盤の表面近くに見られるのみで、墳丘墓の南面に作られた法面では内部には全く見られない。このことは生痕の形成が丘陵形成以降のものであることを示している。

生痕は直径が2cm強であるが、3cm程度に浸食された広がったものもある。長さは5ないし6cmで内部が広がり徳利状のものもある。ほぼ表面に対して垂直であるがやや傾斜したものもある。

生痕を形成した生物について考察すると、形態、大きさ、穿孔している岩石の岩相、生痕の内面に作られた擦痕の形状などから、海生の軟体動物で穿孔性のニオガイ科の二枚貝が穿孔したものと判断した。

ニオガイ (*Bareenea inornata* Pilsbry) は殻の長さ7cm、高さが2.4cm、幅2.3cm、白色の薄い殻をもち前後に細長く後方へ緩やかに細くなる。殻の前端の開いているところから丸い足を出し、地物に押し当て殻を左右に動かして岩を削り穴を掘り中に住む。

生痕だけからは種名の同定は難しい。ニオガイ科全体が海岸近くの岩礁や岸壁、礫底に住むので示相化石として知られる。基盤と貼石に生痕が見られたことは、この場所が海岸近くの水面下にあったことを意味し、その近くに遊離した岩石の礁や礫浜にニオガイが穿孔したものが貼石と

して採取され使用されたことを示している。

3) 新井三鷲谷墳丘墓の載る13m面について [挿図2・8、附図3・4、図版37・39]

墳丘墓の載る緩傾斜の平坦面はかつての海底面であったことを示し、海食台であったことを意味する。その平坦面の標高は13m前後であり、その高度まで海進がすんでいたことの証拠である。

第四紀の海面変動は何回もあったが標高が13~15mの位置に海面があったのは他の地域の例を見ると更新世中期が考えられ、少なくもその頃かそれ以前にこの面が形成されたと考えざるをえない。その時期は鳥取砂丘の古砂丘が形成された時期までさかのぼることが出来る。鳥取県の山陰海岸ではこの時期の海岸段丘が認められたことはない。更新世中期以降の海面変化の貴重な資料である。

山陰海岸では城崎町畑上の丘陵から海生の貝化石を産し、その時代は更新世の下末吉海進の時期のものとされ、今から12万年前と考えられている。京都府峰山町では海成段丘が3段認められ、いずれも中位段丘とされているがH2(高位)、M(中位)、L(低位)の3面の内、標高15m~20mに広がる波食面に対比できるようである。新井三鷲谷付近の段丘を更新世中期のものとすることによって従来不明であったこの地方の第四紀の地史を解明できる可能性がある。

4) 穿孔貝が穿孔した当時の古地理について [挿図1・4・5・6、附図1]

新井三鷲谷墳丘墓の載る13m~15mの丘陵面は更新世中期頃には海岸線がこの付近の13m付近にあったことを示すものである。広岡や高山付近にも標高の近似した平坦面があり、蒲生川の中流、岩井温泉の南でも大山中部火山灰層のる段丘があるので一連のものではないかと考えるが今後の研究に待ちたい。

衆知のごとく、縄文時代の前期ころから海平面の上昇がすすみ、前期中葉から後期にかけて最高海面期となった。いわゆる縄文海進であり、山陰地方でも海平面が現在より少なくとも4m近くは上昇した。この海進で河崎・新井付近の微高地は海面上昇で海面下となり蒲生川の水域と小田川の水域は相互に連絡していたと考えられる。

河崎と新井の付近の蒲生川河床に弥生時代中期の新井遺跡がある。出土したのは太型蛤刃石斧・石包丁・玉砥石状石器などで、遺物の内容から新井遺跡はここの微高地を利用した生活遺跡と考えられている。従って弥生時代中期までは確実に蒲生川は北に流路をとっていたことが分かる。

しかしながら、新井と河崎付近では南から北に伸びる山地の尾根筋がこの付近で低くなっているおり、微高地に弥生遺跡のあることは、弥生時代以前までにこの地点が顕著な浸食作用をうけていたことを意味している。たまたま、この場所が浦富海岸へ続く花崗岩塊と南に広がる荒金火碎岩層との境界に当たり、東西性の断層が通っている場所である。このような地形開析が進行した時期は新井三鷲谷墳丘墓の載る新井段丘形成時かそれ以前の海進時であると考えられる。墳丘墓構築時には蒲生川沖積地が浦富砂丘の形成により、湖沼退化が進んだ時期と考えられる。それは、浦富砂丘の西側に古墳の存在することからも考えられるところである。現在、浦富沖積平野は全体に灰色の低地土壌やグライ土が発達し、東の山裾に低位泥炭土壌や黒泥土壌が分布している。

このことは初め外洋に面した内湾であった谷底低地が徐々に埋積されてついには潟湖化し、やがて低湿地となつたことを示している。

一方、蒲生川の流路を人工で変え、小田川と合流して網代で海に出るようになったのは弥生時代以降である。流路変更の時期は土地利用の経緯から見て、大谷川河口の低地が干拓された江戸時代中期頃と考えられるがその証拠はない。

第四紀更新世以降の地形発達史を概観すると、山陰地方の大地形は地殻変動と海水面変動によって漸次現在の地貌になったが、更新世前半については不明である。更新世中期までに河谷地形、湾入部などの大まかな地形の形成があり、更新世中期以降、段丘や谷底平野、扇状地、崖錐、砂丘などの形成があった。さらにそれらの地形を利用して人間による自然改変があった。特に江戸時代中期以降に水田開発がすすみ、干拓や水路開削が行われた。蒲生川の流路の変遷もその一つである。

#### まとめ

墳丘墓の貼石と出土品の石材鑑定に端を発して、墳丘墓の載る地山の地質と地形にまで調査を進め、丘陵周辺の構造、形成期、古地理などを考察した。

墳丘墓の立地条件についてみると、人工に頼らず眺望のよい自然の平坦地を利用して建設されたことが分かった。今後はこのような視点から未踏査の遺跡を探す上で一助になるであろう。

弥生時代の古地理についても考察を求められたが、資料が不足しており充分なものにならなかつた。繩文海進以降の古地理については山陰地方全体から海水準変動を鍵として考える必要があるであろう。

墳丘墓の載る丘陵面が更新世中期のもので、下末吉海進時のものであるなら、山陰東部地域の地形発達史に貴重な資料を提供したことになり、鳥取砂丘の古砂丘形成のメカニズムを考える上でも貴重であるといえる。

幸い当局により現地が保存され、誰でも観察できるように適切な措置をとられた。

最後に、お世話になった岩美町教育委員会教育長大黒啓之先生はじめ、お世話になった調査員の皆様に厚くお礼を申し上げる。この調査の端緒を作っていただき、終始お世話になった現地調査員の中野知照先生に感謝の意を表する。また、現地調査に立ち会っていただき、地質学的な指導助言を頂いた鳥取県文化財保護審議会委員・鳥取大学教育地域科学部教授岡田昭明先生に厚くお礼を申し上げるものである。

#### 参考文献

- 松本俊雄（1991）鳥取市北東方地域の中心統廻序と中中新世の火山活動。地質学雑誌, 97-9, 697-712.  
大森昌衛（1993）生痕化石調査法。地学ハンドブックシリーズ・8、地学団体研究会、坂本 亨・上村不二雄（1972）兵庫県北部城崎東方の海成更新統。地質学雑誌, 78-8, 415-416。  
鳥取県（1966）10万分の1鳥取県地質図および同地質図。鳥取県  
鳥取県（1976）土地分類基本調査「浜坂」5万分の1。

|             |  |                        |
|-------------|--|------------------------|
| 完新世         | 浦富砂丘<br>現在の西進した養生川<br>灌漑地                |                        |
|             | 養生川沖積平原堆積物<br>浦富の盆地時代                    | 泥炭土 低位泥炭土じょう<br>高泥土じょう |
|             | 浦富入り江の沼澤時代                               | 新井遺跡・三崎谷遺跡             |
|             | 浦富湾入りの海浜時代                               |                        |
|             | 浦富入りの海浜時代                                |                        |
| 更新世         | 新井三崎谷堆積丘墓のる段丘<br>(新井段丘)                  | 島取段丘の方段丘               |
| 新第三紀        | 新井北火山岩層<br>貴入記層                          |                        |
| 中新世         | 島取層群<br>石英安山岩質層灰岩層<br>紀岩、礫岩、礁岩<br>曾我寺瓦基層 |                        |
| 古第三紀<br>中生代 | 花崗岩(鳥取花崗岩)<br>中生代火成岩類                    |                        |

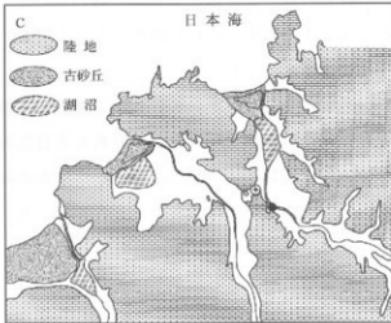
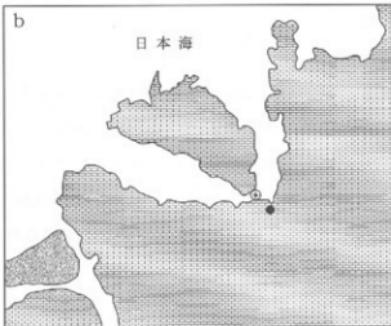
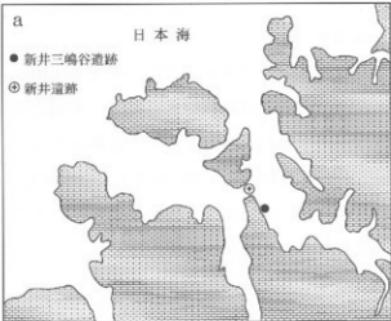
挿図1 新井三崎谷堆積丘墓周辺の地質層序表



挿図2 東側より見た堆積丘墓と基盤岩の成層状態を示す写真



挿図3 千葉市谷当のニオガイの合弁殻に伴う巣穴  
(大森, 1993)



挿図4 岩美町海岸部の古地理図

a 更新世中期頃の古地理図。新井三崎谷の丘陵地はこの頃出来た。堆積丘の貼石はこの当時の海岸線近くの浜礫を用いた。約13万年前の下末吉期の頃。

b 調査海進の最盛期の頃の古地理図。標高4m近くまでの海面上昇があった。

浦富海岸にまだ砂丘がなかった。約5000年前の頃。

c 幼生時代以降古堆積時代の頃。浦富海岸の砂丘が出来ている。新井遺跡はこの時期には地表になっている。浦富、大谷に低湿地が出来た。2000年～1500年前の頃。

## 第2節 歴史的環境 [挿図5]

岩美町に於いて、先人が最初の生活の痕跡を残したのは縄文時代に始まる。岩美町の最南東端部に位置する鳥越の沢尻で条痕地・無文地を呈した縄紋土器が採取されている。鳥越からやや下った山ノ神地区では、山ノ神5号墳発掘調査時に、縄文前期の土器片や石鎌・石斧の出土をみている。これら山地に立地する遺跡の他、蒲生川中流域の沖積平野には岩井廃寺下層遺跡が見られる。岩井廃寺下層遺跡では、縄文晚期の深鉢形土器の出土をみている。

昨年度発掘調査を行った新井三嶋谷遺跡の三嶋谷地区では、縄文後期の土器片を伴った石器工房跡が検出されている。この石器工房跡は、岩美町では初めての遺構検出例となつた。<sup>註1</sup> 遺構内からは、土器片の他、多数の安山岩系の石材・剥片と黒曜石の剥片が出土している。また、周辺の遺物包含層からは、縄文晚期の突帯文土器も検出されている。

弥生時代に入ると、蒲生川下流域の沖積平野に遺跡の分布が見られる。蒲生川は、本来、新井あるいは高山付近より北流して日本海に注いでいたものと考えられる。また、小田川は河崎付近で西に屈曲して大谷地区的砂嘴で塞がれたラグーンを経て、日本海に注いだものと考えられる。この蒲生川と小田川の屈曲部に挟まれた位置に新井遺跡が所在する。新井遺跡は、弥生中～後期の壺・甕・器台などの土器の他、大型始刃石斧・石包丁・砥石などの石製品の出土をみている。遺跡の東西は、ラグーンあるいは肥沃な低湿地が展開しており、弥生人が生活する上で好適地であったといえる。また、水上交通の要衝にもあたり、漁撈・水田耕作などの生産基盤を管掌する集団が居住していたことが窺える。

この新井遺跡の北側に隣接した丘陵の山腹では、流水式銅鐸を出土した上屋敷遺跡が所在する。この銅鐸は、島根県加茂岩倉遺跡出土の31・32・34号銅鐸と、神戸市桜ヶ丘3号銅鐸とともに同じ鋳型で造られた兄弟鐸であることが判明し話題となっている。

また、小田川中流域に所在する上太夫谷遺跡からは、弥生後期の竪穴住居跡や木棺墓群が確認されている。この上太夫谷遺跡の南に隣接する上ミツエ遺跡からは、弥生中期の土器を出土している。この他、小田川下流域に展開するラグーンあるいは低湿地を前面に控えた大谷地区と平野地区に於いて土器片や石製品の出土が知られている。いずれも、新井遺跡と同様、漁撈や水田耕作を生産基盤とした集落が存在していた。

弥生時代の墳墓としては、新井遺跡から南東約2kmに所在する新井三嶋谷遺跡に於いて、弥生後期初頭に造営されたと考えられる貼石墳丘墓1基を確認している。<sup>註2</sup> この墳丘墓の南側に隣接した方形の墳丘墓は、ほぼ同時期に造られたものと考えられる。この貼石墳丘墓（新井三嶋谷1号墳丘墓）は、弥生後期初頭に比定される墳墓の中では、全国的に見ても最大規模のもので南北約26.5m、東西約18m、高さは最大約3mを測る。墳丘斜面には、拳大～人頭大よりやや小振りな石を貼り付けている。貼石の一部には当三嶋谷1号墳丘墓のみにしか見られない目地を通した石列や、弧状を描く石列が見られる。

また、新井遺跡の南側に隣接する丘陵上では、新井32号墳の墳丘直下より弥生時代と推定しうる木棺墓2基が確認されている。これに隣接した51号墳の墳丘盛土中より、弥生後期の甕・器台の出土をみたことで、この丘陵上にも墳丘墓が存在していたものと考えられる。

この他、小田川下流域に展開する低湿地に面した丘陵上に於いても墳丘墓の存在が知られている。新井遺跡の西方約2km、低湿地の南側に所在する本庄古墳群中に於いて、弥生後期段階の土器片を伴う貼石墳丘墓2基を確認している。<sup>註3</sup>

古墳時代では、弥生時代に展開した沖積平野の生産基盤に加え、山間部の谷底平地の開発が進んでくる。古墳時代に入りても、前述の新井遺跡においても居住空間は踏襲されたものと考えられる。小田川下流域の本庄地区でも、昭和50年代後半に河川改修がなされ土器師高杯・甕などの出土が知られている。<sup>註4</sup>このことから、低湿地の中に微高地が形成され集落が営まれ、沖積平野の開発も進んでいたものと考えられる。小田川中流域に位置する上太夫谷遺跡や上ミツエ遺跡からも古墳時代の土器が出土しており、集落が営まれていたものと考えられる。これらの遺跡は、踏襲されて奈良時代に連続する。

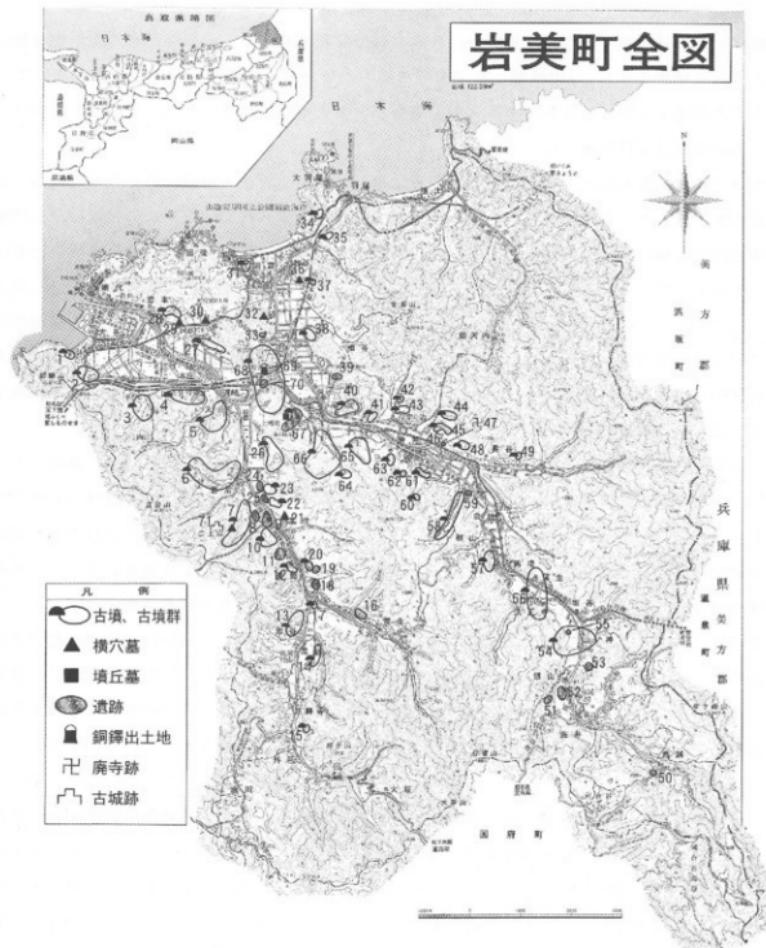
河川下流域の沖積平野周辺や山間部の丘陵上には、多くの古墳群が形成されている。岩美町内では、20余の古墳群が確認され、約450基の古墳と20余基の横穴墓が知られている。古墳群の中でも、蒲生川下流域に所在する新井古墳群は71基、小田川中流域の高野坂古墳群は36基（横穴墓を含む）を数え、群を抜いている。

岩美町内では、弥生時代の墓制を継承する古墳出現期の古墳は確認されていない。最も古い段階の古墳としては、新井三嶋谷遺跡の南谷3号墳が挙げられる。南谷3号墳第1主体で4世紀後半代に比定される土器師高杯が出土している。この第1主体は、副室を持つ組み合わせ式石棺<sup>註5</sup>であり、高杯は土器枕に転用されたものであった。

その後、古墳の造営が各地の丘陵上に展開していったものと考えられる。現在確認されている古墳は、その多くが古墳時代後期（6～7世紀）に造営されたもので、横穴式石室を内部主体とするものである。

岩美町における横穴式石室の特色として、狭長な石室を持つことが知られている。小畠1号墳（穴観音古墳）の石室長11.3mを始め、満願寺谷1号墳では10.7m、弥長古墳に於いては10.2mを測るなど、10mを超える古墳が認められる。本年、調査がなされている小畠3・5号墳など10mを超える狭長な石室とともに、巨石を構築していることが確認されている。これら横穴式石室の多くは、玄室天井の一部を一段高く架構する「中高天井」を採用している。この「中高天井」を有する古墳は、鳥取平野を貫流する千代川以東に見られる通有形態である。この中でも、町内に所在する高野坂8号墳は6世紀後半代の築造であり、「中高天井」の初源形態を示すものとして注目されている。<sup>註6</sup>

また、この「中高天井」が分布する地域は、家型石棺を内包する古墳が見られる。鳥取県内で確認されている家型石棺は、11例を数える。この内、8例が千代川以東に見られる。岩美町内では、高野坂古墳群で3例、満願寺谷古墳群で2例が確認されている。中でも、高野坂10号墳の家



- |            |             |              |                |             |
|------------|-------------|--------------|----------------|-------------|
| 1 伊長古墳     | 16 広庭遺跡     | 31 滝富古墳群     | 46 岩井荒神下層遺跡    | 61 岩井荒神下古墳群 |
| 2 小堀古墳群    | 17 腹内古墳群    | 32 岩美病院裏横穴墓群 | 47 岩井荒神跡       | 62 岩井荒神谷古墳  |
| 3 平野古墳群    | 18 腹内向難遺跡   | 33 新井第1道跡    | 48 岩井大野古墳群     | 63 岩井荒神古墳群  |
| 4 本庄古墳群    | 19 長郷遺跡     | 34 熊古古墳群     | 49 長谷聖塚古墳群     | 64 志志島の谷古墳群 |
| 5 大田古墳群    | 20 豊郷猪ノ谷古墳  | 35 牧谷横若古墳群   | 50 鳥越沢灰窯跡      | 65 板上古墳群    |
| 6 滅羅寺谷古墳群  | 21 莺ヶ谷横穴墓   | 36 牧谷横穴墓群    | 51 須山女教寺遺跡     | 66 志志島古墳群   |
| 7 高野坂古墳群   | 22 岩紫城山古墳群  | 37 牧谷下竹原古墳   | 52 須山瓦劔寺遺跡     | 67 新井三塚谷遺跡  |
| 8 上大矢谷遺跡   | 23 岩紫猪ノ谷古墳群 | 38 高山下細山古墳群  | 53 津井觸跡谷遺跡     | 68 新井古墳群    |
| 9 上ミツ工遺跡   | 24 宮の前遺跡    | 39 高山狭間遺跡    | 54 山ノ内古墳群      | 69 上屋敷遺跡    |
| 10 高佐古墳群   | 25 磐石道路     | 40 高山上ノ山古墳群  | 55 山ノ神遺跡       | 70 斬井遺跡     |
| 11 東森谷遺跡   | 26 横座古墳群    | 41 恵志寺山古墳群   | 56 浦生古墳群       | 71 二上山城跡    |
| 12 長郷古墳群   | 27 滝富古ヶ崎古墳群 | 42 宇治絕ケ谷古墳群  | 57 馬場古墳群       |             |
| 13 泊谷古墳群   | 28 岩本古墳群    | 43 宇治宮下尾敷古墳群 | 58 真名古墳群       |             |
| 14 泊谷粉山古墳群 | 29 岩本横穴墓群   | 44 宇治市浜脇谷古墳群 | 59 真名遺跡        |             |
| 15 延興寺城山古墳 | 30 坂谷横穴墓群   | 45 岩井富の谷古墳群  | 60 岩井太郎右立門谷古墳群 |             |

挿図5 岩美町遺跡分布図

型石棺は、蓋部分が厚く作られ、長側辺に6本の縄掛突起を有する。縄掛突起を付す形態は他の地域と異なる様相を示し、「因幡型」とでも呼べるものである。高野坂10号墳出土遺物として、壺部上面に忍冬文を付した銅製壺型鏡・銅製帶金具・須恵器などが見られた。墳形は二段築成の方墳で築造時期は6世紀後半である。<sup>註7</sup>

当地域で特徴的なものとして、浦富海岸砂丘に埋没していた浦富3号墳は箱式石棺を内包した横穴式石室であった。石棺は、安山岩の柱状石を立て並べて作られていた。この石棺は、玄門部板石閉塞による横口構造をとり、出土遺物として銀象眼太刀を副葬していた。同3号墳の石室は、腰石以上を失っているが、同古墳群中の浦富5号墳と同様に畿内型の平天井を呈していたものと考えられている。<sup>註8</sup> この浦富古墳群に採用された横穴式石室は、「中高天井」を採用する普遍的な地域に於いて特異な存在といえよう。また、柱状節理の石材を埋葬施設に用いた例としては、浦富古墳群の他、坊谷横穴群、新井1号墳の堅穴式石室が見られる。周辺の地域では、福部村海士25号墳、兵庫県城崎町稻荷裏古墳に見られる。

この他、高野坂古墳群から小田川を挟んだ対岸の丘陵裾部に、陶棺を出土した福石遺跡がある。陶棺は、高野坂古墳群前面の通称藏見越しを越えた、福部村藏見地区に所在する藏見3号墳でも見られる。同3号墳出土の陶棺は、蓋上面の両端部に鷦尾が付されていたことで注目され、墳形も多角形であることが確認されている。この藏見3号墳は高野坂古墳群の後背地にあたり、陶棺を埋葬施設に多く採用する岡山県美作地方との儀礼的死生観に共通するものが窺える。

古墳時代に続く奈良時代になると、蒲生川中流域右岸の沖積平野に白鳳時代後期の法起寺式伽藍配置をとる岩井廃寺（弥勒寺）が造営される。現在は、寺域内にあった塔心礎が残り、通称「鬼の椀」と呼ばれ親しまれている。岩井廃寺の発願主は不明であるが、その周辺の平野を生産及び経済基盤とする氏族集団は恩志古墳群、坂上古墳群、真名古墳群を造営した集団であったと考えられる。

集落として、小田川中流域左岸に所在する上ミツエ遺跡・上太夫谷遺跡などで、掘立柱建物跡とともに多量の円面硯・転用硯を始め、輪羽口・鉄滓・銅滓等を出土している。これらの遺跡の南東約3kmに広庭遺跡が所在している。広庭遺跡は、小田川支流の荒金川右岸に立地している。同遺跡からは、規格性を持った掘立柱建物跡が検出され、転用硯や瓦片の出土をみている。広庭遺跡の近くには荒金銅山があり、産出した銅鉱を中央に献上していたものと考えられている。このことは、上ミツエ遺跡・上太夫谷遺跡などとともに銅鉱や交通を管掌する官衙的な要素を併せ持った遺跡であると考えられる。

律令制度下の土地制度である条里制に伴う条里地割りは、小田川中流域右岸の平野や蒲生川中流域に展開する平野部に認められる。驛傳制の驛路や傳路については、「鳥取県史・岩美町誌」では、蒲生峠を越えた後岩井付近・本庄地区を経て駒馳山峠から福部村に向かう説を挙げている。しかし、当時の自然環境や驛路本来の性格などから見て、蒲生峠を越えた後、更に十王峠を経て因幡国府に至ったとする説もあり定説には至っていない。この時期、岩美町は巨濃郡に属していたが、郡衙の所在は不明である。諸説あるが、小田川流域の広庭遺跡も含めた上ミツエ遺跡・上

太夫谷遺跡の周辺に造られていたものと考えられる。

南北朝時代には、文和年間（1352～1355年）に山名氏が二上山に因幡守護所を置いたことが知られる。この二上山山麓裾部に位置する上ミツエ遺跡や上太夫谷遺跡からは、当時の遺物である青磁・白磁・天目茶碗などの陶磁器類を出土している。

これ以降、戦国時代に至るまで各地に城砦が築かれており、戦術的な山城として機能していたものと考えられる。

#### 参考文献

「新井51号墳」岩美町教育委員会 1986

「新井32号墳」岩美町教育委員会 1987

「上ミツエ遺跡発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1987

「浦富3号墳発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1988

「広庭遺跡発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1989

「上太夫谷遺跡発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1991

「山ノ神5号墳発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1991

「高野坂古墳群発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1992

註1 長径1.43m、短径1.34m、深さ約0.4mを測るやや歪な円形の土坑で埋り鉢状を呈している。安山岩系の石材は、岩井村近に産出するものである。

註2 新井三鶴谷1号墳丘墓は、貼石の状況と南東隅部の解釈で四隅突出型墳丘墓であるとする意見もある。

註3 山樹雅美氏教示。九重段階の弥生土器片が採取されている。

註4 鳥取市在住、水見久信氏教示。河川改修の折、川床付近の粘土層より出土していた。所謂「流れ込み」ではなく、量的にもまとまっていたようである。

註5 岡山理科大学助教授、亀田修一氏教示。組み合せ式石棺に副室を備える例として、岡山県北部地域に3例、奈良県・和歌山県に各1例が知られているのみである。

註6 小畠3号墳の玄室に家型石棺が納められていた。この家型石棺は、從来岩美町内で確認されてきた石棺とは薄を違え、蓋石は刺り貫き式であるが、棺身は組み合せ式である。棺身の底部は、側板を嵌め込ませるため浮き彫り状に造られている。規模も大きく、全長約2.4m、幅約1m、全高は約1mを測る。

註7 高野坂10号墳は、1987年の調査では、遺存する石列の状況より方墳としている。しかし、墳裾部西側の石垣が若干西方にせり出し、石室背後の石列がやや弧状を描いていること等から、亀田修一氏が指摘する如く多角形墳もしくは八角形墳であった可能性も考えていかないといけない。当事例だけでなく、隣接する国府町梶山古墳では、その後の調査により変形八角形墳であることが確認され、墳丘前面に石垣と外縁列石等による方形壇が付設されていた。また、高野坂古墳群後背地に立地する福部村藏見3号墳に於いても、試掘調査により変形八角形墳であることが確認されている。このように見てくると、高野坂10号墳は、本来、墳丘の前面に方形壇を付設していた可能性が高いと思われる。

註8 浦富2・5号墳ともに現在その姿を見ることは出来ない。しかし、「岩美町誌」によると一見「鏡内型」の平天井を呈しているが、玄室中央部の天井石が前後より若干高く架構していることが認められる。側壁の上部も、高く架構した結果生じた隙間に小振りな石材を充填している。所謂「中高天井」を採用した横穴式石室とは趣を異にしているようであるが、衰退していく時期のものと考えておきたい。石室平面プランは長台形を呈し、所謂「羽子板型」であり「鏡内型」と当地域特有な「中高天井」型の折衷様式といえよう。

註9 岩美町内では、他に新井51号墳、新井三鷗谷遺跡南谷5号墳などでも柱状節理の石材が使用されている。

註10 薩見3号墳出土の陶棺は、棺蓋の棟部両端に鶴尾が付してあった。全体形が見える全国でも唯一のものである。他には、岡山県北部に1~2点見られるのみである。

註11 『続日本紀』「因幡國銅鏡獻」の記事による。

註12 山陰道は、蒲生峠~十王峠を経て国府町柄本庵寺付近を通過し、因幡國府に至ったと考えるのが妥当である。岩美町（当時は邑部郡）内は、福部村薩見より高野坂越し（岩美町内の通称名は薩見越し）を経て小田川~広庭遺跡付近より山越えし岩井庵寺の立地する平野部に所在していたであろう都街に至る傳路が在ったものと考えられる。

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 新井三鷗谷1号墳丘墓の調査 [挿図6・7、附図2・3、図版1・2]

今年度調査した新井三鷗谷1号墳丘墓は、昨年度の発掘調査の結果、保存整備事業の事前調査として実施されたものである。

新井三鷗谷1号墳丘墓は、調査の結果、墳丘の規模は南北26.5m、東西約18m、高さは最大約3mを測り、墳頂部には東西11m、南北17mを測る平坦部を確認した。

墳丘の四辺の斜面には、亜円礫を用いた貼石が施されていた。この貼石は、斜面の上半と下半では用いる石材の大きさを意図的に変えている。即ち、上半では拳大の亜円礫を貼り付け、斜面の下半では人頭大よりやや小振りな石材を用いている。また、墳丘斜面の東面・北面の中央部附近には縦方向に目地を通す貼石が確認された。

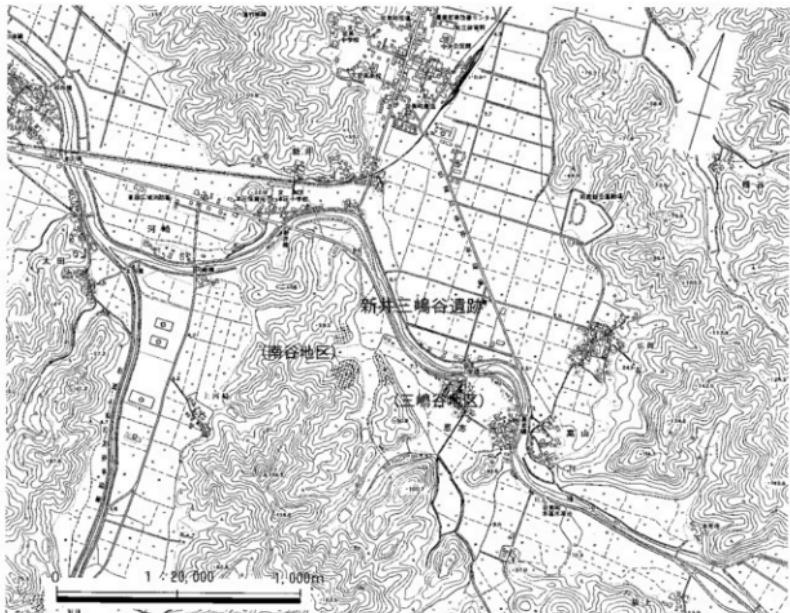
東面では、幅約2mの間隔で縦方向に目地を通す貼石があり、この目地列の間隙に更に横方向の石列を施している。この横方向の目地列は4列確認でき、それらを起点に僅かではあるがジグザグ様に角度を変えている。縦方向の目地列の内、北側の石列の外側には青灰色を呈した安山岩の柱状石を配している。

北面では、中央部に於いて幅約4.5mの範囲で縦方向の目地列が5列以上認められる。両端部分にはそれぞれ2列の石列が一対となり、その間隙に青灰色を呈するやや大きめな亜円礫が配されている。石列及び貼石は花崗斑岩が用いられ、青灰色を呈する石材は安山岩柱状節理が亜円礫となったものである。

南面の貼石は、墳丘斜面の端部より約4分の1あたりに、弧状を描く石列が認められた。この石列の上半と下半では、用いた石材の大きさを違えている。即ち、上半では拳大の石材を貼り付けるのに対し、下半では人頭大よりやや小振りな石材を据え付けている。特に裾部の石材は、斜面側では不明瞭ではあるが石列状をなし、裾部側は方形の張り出しやストーンサークル状を呈している部分が認められる。弧状を描く石列の両端部は、隅部に向かってカーブあるいは屈曲させている。斜面上半の東端部は、貼石の隅角処理が施され、対角線上に3~4条の目地列が認められる。斜面上半に施された貼石は、視覚的に傾斜を変換させており、二~三段築成の墳丘を思わせる。

西面は、貼石の遺存状態が悪く、他の面で認められている石列や目地列は不明瞭である。僅かに、中央部上半と南側に目地列状を呈する部分が認められるに過ぎない。

このように、新井三嶋谷1号墳丘墓は、古段階の墳丘墓の中では最大の規模を持ち、墳丘の各辺に貼り石が施されていることが知られた。当墳丘墓に施されている貼石は、他地域の墳丘墓には見られない石列の存在や、縦・横方向を組み合わせて目地を通す貼り方をしている部分が認められた。また、墳丘の隅部に於いて突出部状に地山を削りだしている部分も確認した。南面の裾部に於いては、弧状を描く石列の存在も確認している。



挿図6 新井三嶋谷遺跡位置図（新井三嶋谷周辺）

しかし、この時期において見られる四隅突出型墳丘墓とは、ステッピングストーンを持たないことや、貼石・石列の様相に違いが見られ、他の地域とは異なる墓制を採用しているものと考えられる。この貼石の施工方法の相違は、四隅突出型墳丘墓のみならず、貼石墳丘墓に於いても同様である。

註1 角礪が風化する段階で角が丸くなった状態の石材を示す。

#### 第1項 調査区・トレンチの設定【挿図7、附図1・2】

発掘調査にあたり、調査区とトレンチの設定を行った。

「検討委員会」の協議の結果を踏まえて、墳頂部の埋葬施設、墳丘斜面の貼石部、墳丘裾部、三嶋谷1号墳を調査対象とし、それぞれを調査区とした。埋葬施設は、第1主体、第2主体、第3主体のトレンチ調査が主である。墳丘斜面の貼石部は、東面、西面、南面、北面に区別した。墳丘裾部は、昨年度未調査部分の東面を主とし、南面と西面についても補足調査を行った。

トレンチの設定は、前項で概述しているのでここでは割愛するが、各調査区報告の中で詳述することにしたい。

#### 第2項 第1主体の調査

##### (1) 遺構の調査【挿図7・8・10~15、図版4~7】

第1主体の調査は、昨年度調査の継続である。今年度の主眼とするところは、墓壙掘り形の確定と、既掘トレンチを掘り下げる状態での墓壙内埋土の層序確認であった。同時に、黒褐色土の落ち込みを精査し平面実測を行うことであった。

墓壙掘り形は、トレンチの土層断面観察と遺構検出面での確認調査を行った。土層断面観察に関わるトレンチは、No.①・②・③である。遺構検出面での確認作業は、昨年度調査終了後に覆い土を施していたため一部しか行えていない。

墓壙掘り形の規模は東西約5.3m、南北約5.6mを測り、僅かに南北に長い隅丸方形を呈する。遺構検出面からの深さは約0.6mまで掘り下げている。したがって、墓壙内床面に埋置されたであろう内部主体の上面には達していない。墓壙の主軸方位は、後述する内部主体に伴う落ち込みが東西方向を示しているため、N-45°-Eに造られたものと思われる。

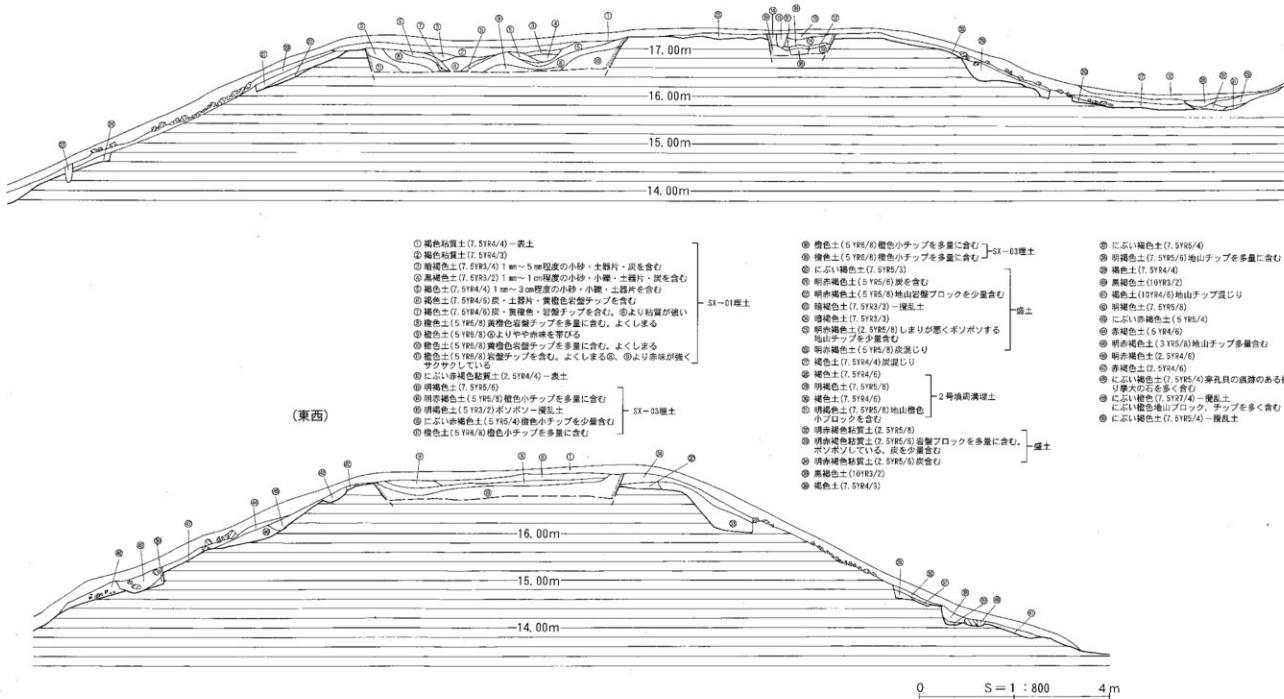
遺構面直上には褐色土の擾乱土が堆積していた。擾乱土の堆積は、墓壙中心部に向けてやや瘤み状を呈し、北側の斜面上部に連続している。この擾乱土は、後世に墳頂部が削平された名残と思われる。削平は、戦国期に城砦（三嶋谷城）として利用されたために行われたものである。墳頂部南側と約0.2mの段差が認められることから、第1主体の墓壙上面は削平時にカットされたものと思われる。

墓壙掘り形の掘り下げは、墳丘に盛土が施されて後に行われていることが知られた。後世の削平が著しく判然としない部分も認められるが、墓壙の東側において墳丘盛土である⑭～⑯層が確



挿図7 発掘調査範囲、全体図及びレンチ配置図

〈南北〉



挿図8 新井三塙谷1号墳丘墓、墳丘土層断面図（南北、裏西トレンチ）

15.50m

⑩ ベルト

- ① 黒褐色土(7.5YR4/2) 錐孔員の痕跡のある  
小塊を含む  
② 黑褐色土(7.5YR4/0) 岩盤チップ埋り  
③ 明褐色土(7.5YR5/0) 岩盤チップ埋り  
④ 褐色粘土土(7.5YR5/6) 岩盤及び風化土  
⑤ 褐色粘土土(7.5YR2/3)  
⑥ 黑褐色土(7.5YR5/2) - 表土  
⑦ 褐色土

⑫ ベルト

- ① 褐色土(7.5YR4/2) 錐孔員の痕跡の  
ある小塊を含む  
② 黑褐色土(7.5YR3/2) - 表土  
③ にぶい褐色土(7.5YR5/2) ホソソゾ  
④ \* よりやや明るい  
⑤ 岩盤(5YR)

14.50m

⑬ ベルト

- ① 黑褐色土(7.5YR4/2) - 塵土  
② にぶい褐色土(7.5YR4/3)  
③ 明褐色土(7.5YR5/0)  
④ 明褐色土(7.5YR5/6)  
⑤ 褐色土(7.5YR8/6) 岩盤風化土及び岩盤

⑭ ベルト

- ① にぶい黄褐色土(7.5YR5/3) - 表土  
② 黑褐色土(7.5YR4/2)  
③ にぶい褐色土(7.5YR5/4) - 塘丘盛土  
④ 褐色土(7.5YR4/3)  
⑤ 褐色土(7.5YR4/0) 地山チップを多量に含む  
⑥ 塘丘土(7.5YR4/0)  
⑦ 褐色土(7.5YR4/4)  
⑧ 黑褐色土(7.5YR2/2)  
⑨ 褐色土(10YR4/6) 地山チップ埋り

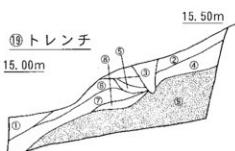
16.00m

⑮ ベルト

- ① 褐色土(10YR4/4) 地山ブロック埋り - 表土  
② 黑褐色土(10YR2/2)  
③ にぶい褐色土(7.5YR4/3)  
④ 明褐色土(7.5YR5/6) 地山チップ埋り - 岩盤風化土  
⑤ 岩盤(5YR)

III ベルト

14.00m



⑯ ベルト

15.00m

⑯ ベルト

- ① にぶい褐色土(7.5YR5/3) 埋り  
② 褐色土(5YR4/0) サラサラ  
③ 明褐色土(7.5YR5/6)  
④ 明褐色土(2.5YR5/4) 岩盤及び風化土

16.00m

⑯ ベルト

16.00m

0 S = 1 : 40 2 m

挿図9 各トレンチ土層断面図

認できた。墓壙北側では、削平時に北側斜面上部の盛土をカットしていることが認められる。墳頂平坦部の南側では、墳丘盛土が僅かではあるが遺存している。本来、この南側に見られる盛土のレベルまで墳丘盛土が施されていたものと考えられる。⑩層は墳丘盛土の表層で貼石を施すための化粧土である。このため墓壙掘り形の掘り下げは、墳丘墓築成過程の最終段階に行われたものと考えられる。⑪層は岩盤及び地山風化土で、⑫・⑬層は墳丘盛土の下層部分を形成したものである。

墓壙内埋土は9層が確認でき、遺構図中⑧～⑪層は木棺埋置後に施された埋土である。これらの埋土は、岩盤から剥離した細かな礫を多く混入した堅く縮まった土と、やや柔らかく赤味を帯びた橙色土の土を交互に埋めていることが知られた。⑧層は墓壙内埋土の最上層に該当する。その上面に炭・土器片及び細かな岩礫が混入した褐色土⑨層は墓壙上で行われたであろう葬送儀礼時に形成されたものと考えられる。

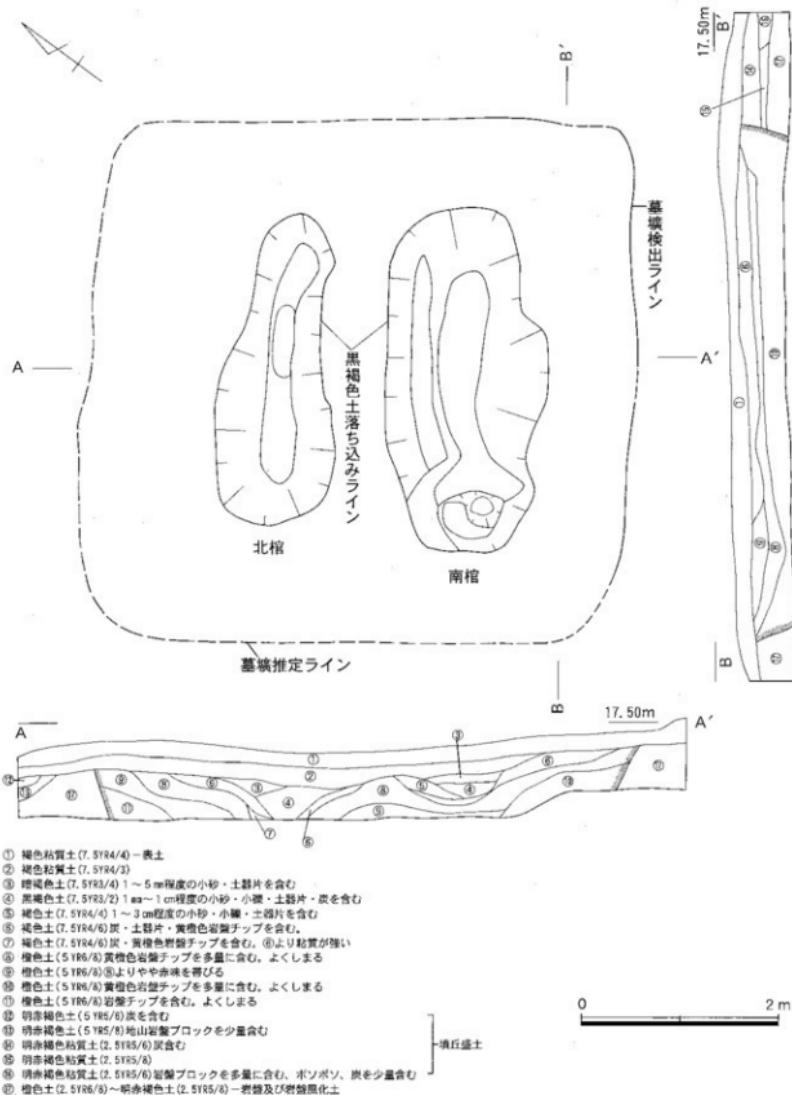
墓壙内埋土の上面において2カ所の黒褐色土の落ち込みが認められた。この落ち込みは、墓壙上面で行われた供獻行為の痕跡を示すものである。即ち、埋葬行為の最終段階に於いて、土器が供獻された後、内部主体の腐朽に伴い陥没したものと考えられる。落ち込みは、墓壙内の占有する位置関係から北棺と南棺とに分けた。落ち込みの規模は、北棺で最大幅1.25m、最大長3.15m最大深さ0.45m以上。南棺では最大幅1.65m、最大長3.5m、最大深さ0.35mを測る。この落ち込みの最下層部に該当する④層を基底として、弥生土器片の堆積が認められた。供獻された土器片は、③層上面からも確認できているが、落ち込みが形成されて後に長期間風雨に晒されていたためである。2カ所の落ち込みは、土層断面を観察する限り先後関係は認められなかった。陥没した順位は明らかではないが、内部主体における空間の差を考慮に入れても時期差は無いものと考えられる。しかし、その中でもより深く陥没している北棺が先行するものと思われる。この先後関係は陥没した時期を示唆したもので、埋葬は2棺同時埋葬と思われる。

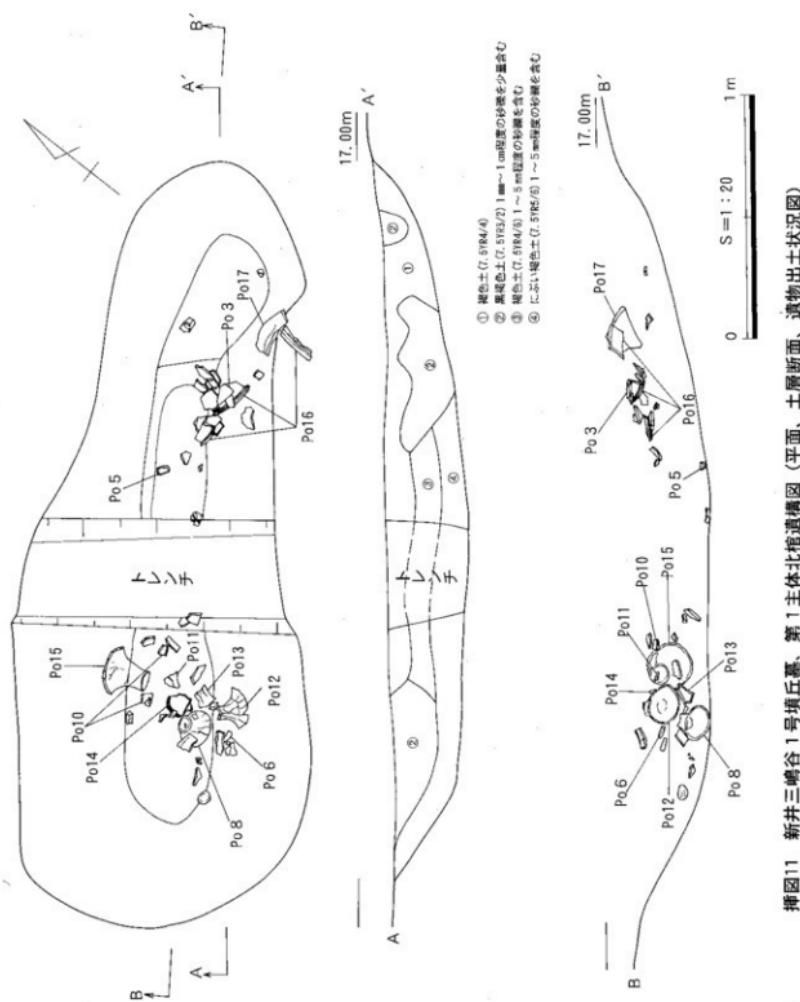
落ち込み内から出土した土器は、壺・器台・高杯などが認められ、甕などの煮炊具は供獻されていない。陥没して形成された窪みの中で、長期間風雨に晒されていたため遺存状態は不良であった。出土した土器は完形品ではなく、上半あるいは下半を欠く。これは、今後検討しなければならないが、一つには後世に城砦として当該地区が利用された時点において、墳頂部と同時に供獻土器類も削平されたものと思われる。

## (2) 遺物出土状況 [挿図11・12、図版6]

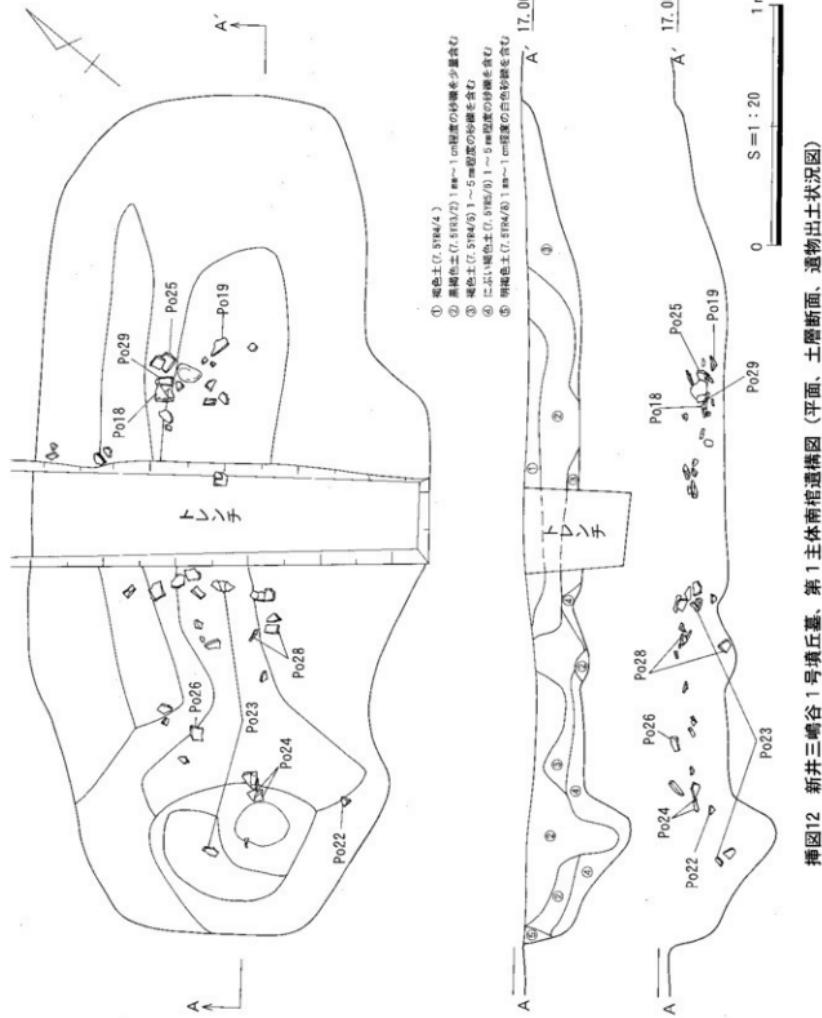
木棺腐朽に伴って落ち込んだ腐植土層（黒褐色土層）から多数の弥生土器を検出した。その多くは、長い年月風雨に晒されたためか、遺存状態が非常に悪く、検出する途中で崩れてしまったりするものも少なくなかった。南棺の土器は、全体的に5～10cm程度の破片になったものが多く、黒褐色土層の中央付近を中心に分布し、層位も上位、下位にわたって検出している。

北棺に關しても、出土位置等は、南棺と変わりがない。原形がある程度残すものとして、P08・12・15などの器台が挙げられるが、これらは倒れ込んだ状態で出土し、共に受部を欠損している。





插図11 新井三嶋谷1号墳丘墓、第1主体北棺遺構図（平面、土層断面、遺物出土状況図）



插図12 新井三幡谷1号墳丘墓、第1主体南棺遺構図(平面、土層断面、遺物出土状況図)

Po 8 の筒部の中からは同一個体と考えられる小さな壺の破片 (Po 1・Po 2) が出土しているが、この壺の体部は検出されなかった。置かれた土器が倒壊する過程を考えた場合不自然な感がある。全体的に一個体としてまとめて出土するものは少なく、大小の破片が混在しているという印象をうける。また、南棺、北棺ともに、全体を復元できた遺物ではなく、墳丘斜面等からも検出できなかった。これらの出土状況から一連の土器群は、墓壙上で破碎供献された可能性が考えられる。その他、北棺、南棺からは、円礫・玉砂利を30数点検出しており、これらも送葬儀礼に関わる遺物ではないかと思われる。<sup>註1</sup>

註1 直径5～10cm程度のものを円礫、1～5cm未満のものを玉砂利と呼ぶこととする。

### (3) 出土遺物 [挿図13・14・15、Po 1～36、図版46～48]

第1主体からは、北棺、南棺合わせて36個体を図化したが、その大半は壺・器台で占められる。一部トレンチにかかった遺物で、北棺か、南棺か判断できないものがある (Po30～36)。これらは北棺・南棺出土遺物として掲載している。

#### 北棺 [挿図13、Po 1～17、図版45・46]

壺 (Po 1・3) は、復口径が、それぞれ18.1・9.0cmを測る小型の壺である。口縁端部を上下にややつまみ出すもので、口縁はほぼ直立する。口縁帶には3～4条の凹線を施している。Po 2～5は、いずれも平底である。Po 2・4は、底部より大きく開きながらたちあがり、胴部最大径は胴部下半にあると考えられる。それに対してPo 5の胴部最大径は、そのたちあがりからや上位にあると思われる。Po 5は、底部に縦横の細かいハケメがみられる。Po 2は、胎土、色調よりPo 1と同一個体と考える。

Po 6は、壺の把手と考える。

器台 (Po 8～17) は、形態によりA・B・C類の3種類に分類した。

A類 比較的器壁の厚い大型の器台 (Po16・17) である。

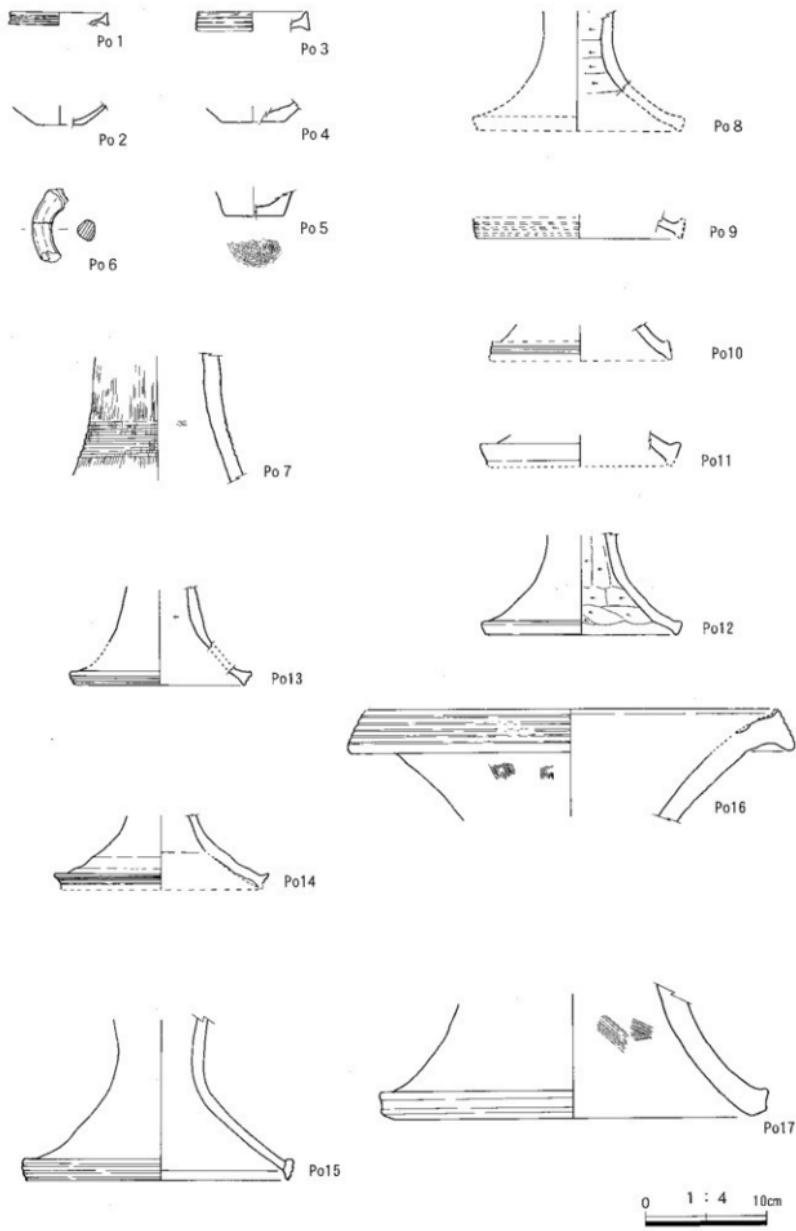
Po16は、口縁端部をやや上下に拡張し、内傾する口縁帶を形成している。その口縁帶には、浅い凹線を5条施す。復口径33.8cmを測る。Po17は、16と胎土等が似通っていることより同一個体と考えている。脚端部はやや肥厚させ、面を成す。ナデ調整を行う。復脚径29.4cmを測る。胎土中には、砂粒の外、角閃石を多く含む。

B類 比較的器壁が薄い小型の器台である。受部は検出されなかったが、受部と脚部には同類の直立または内傾、外傾する面を形成すると考えられ、そこには、凹線を施すものと施さないものがある (Po 8～15)。

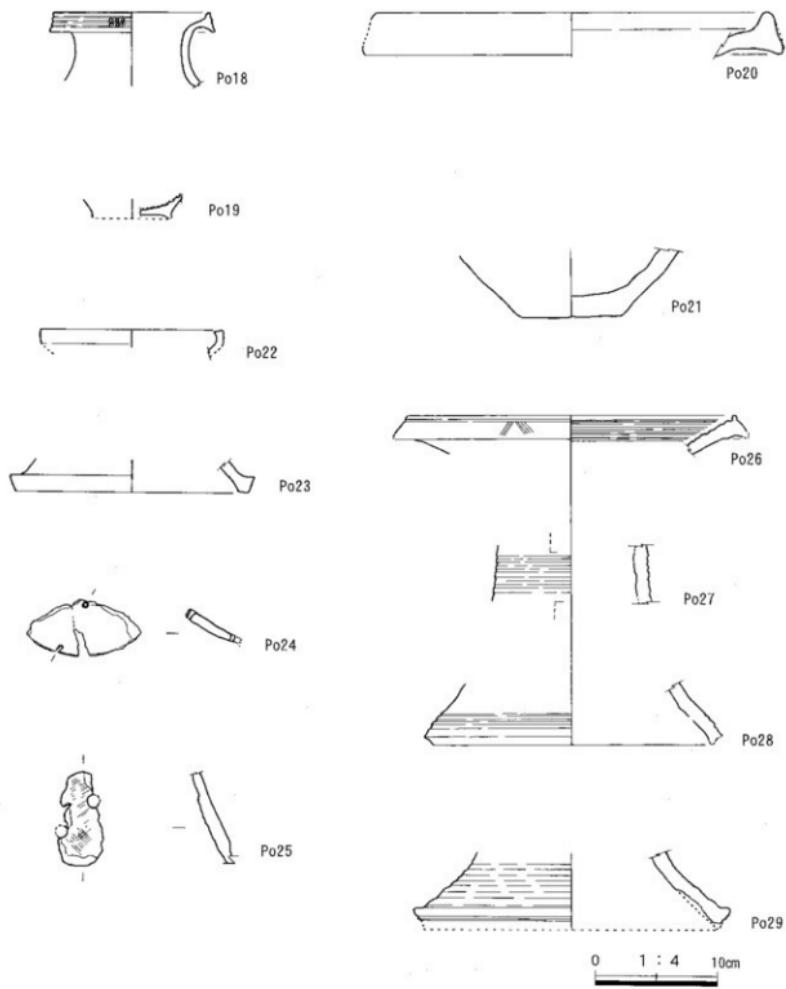
脚部片を検出している。復脚径14.0～21.9cmを測る。脚端部を上下に拡張させ、数条の凹線を施すもの (Po 8～10・13～16) と施さないもの (Po11・12) がある。

Po15の脚端部は、粘土紐を貼り付けた後に面を形成しており、他と製作過程で違いがみられる。

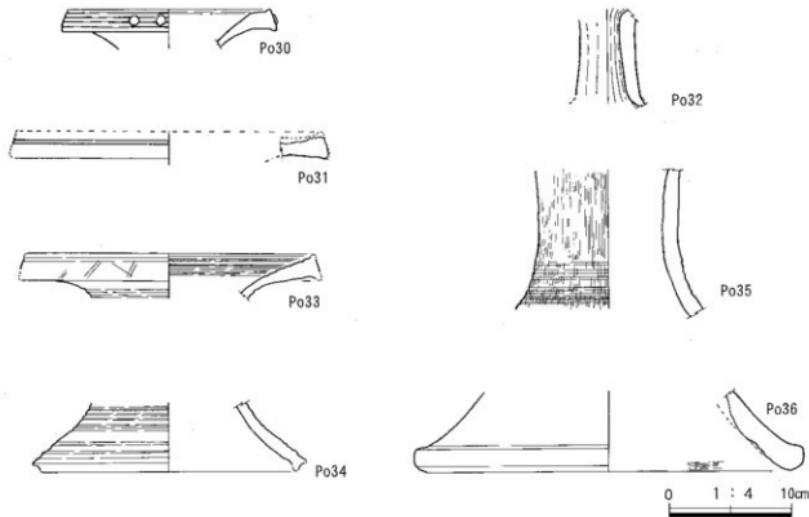
C類 法量的にはA類とB類の中間にあたり、中型の器台である。受部、筒部、脚部に鈍い凹



挿図13 新井三嶋谷1号墳丘墓、第1主体北棺出土遺物実測図



挿図14 新井三嶋谷1号墳丘墓、第1主体南棺出土遺物実測図



挿図15 新井三嶋谷1号墳丘墓、第1主体北棺・南棺出土遺物実測図

線を多用するものである（Po7）。

南棺〔挿図14、Po18～29、図版47〕

壺（Po18～21）は、同一個体と考えられるPo20・21の大型品と、Po18・19の小型品がある。Po18は、口縁を上下にやや拡張し、やや内傾する口縁帯に3条の凹線と竹苞文を施すものである。Po19は上げ底気味の底部片である。

Po22は、復口径13cmを測る小型の口縁部片である。端部は面を持つ。高杯か？器種は不明である。

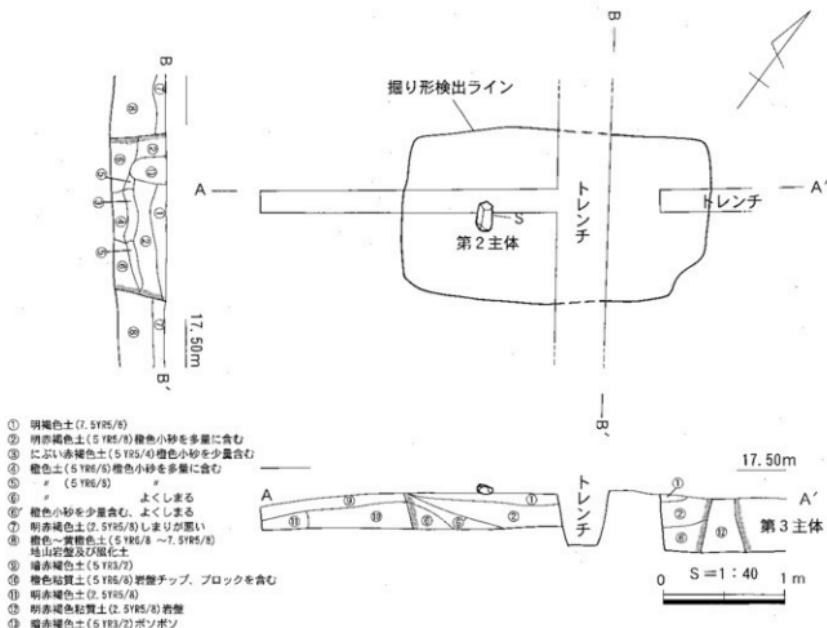
Po23は器台の脚部片で、端部に面を持つ。

Po24は体部に穿孔あり。蓋か？

Po25～29はC類の器台と考えられる。胎土中に砂粒の外、角閃石を含み胎土が酷似するPo26・27・28は同一個体と思われる。Po26は口縁端部をやや下垂させ、内傾する口縁帯を形成し、そこに凹線、鋸齒文を施す。また、内面には多条の凹線を施す。Po27は筒部片である。6条の凹線を施し、その上下にスカシを入れる。Po28・29は、脚部片である。Po28は数条の凹線を施し、端部は面をもつ。Po29は、脚端部をやや拡張させ、凹線を施し、裾部にも多条の凹線を入れる。

南棺～北棺〔挿図15、Po30～36、図版48〕

Po30・31は壺の口縁部である。口縁端部をやや肥厚させ、断面は三角形を呈する。Po30は4条の凹線を施し、2ヶ所に円形浮文を付す。Po31は、胎土に砂粒の外、角閃石を含む。



挿図16 新井三嶋谷1号墳丘墓、第2主体遺構図(平面、土層断面図)

Po32は、高杯円柱部である。内面に絞り痕あり。

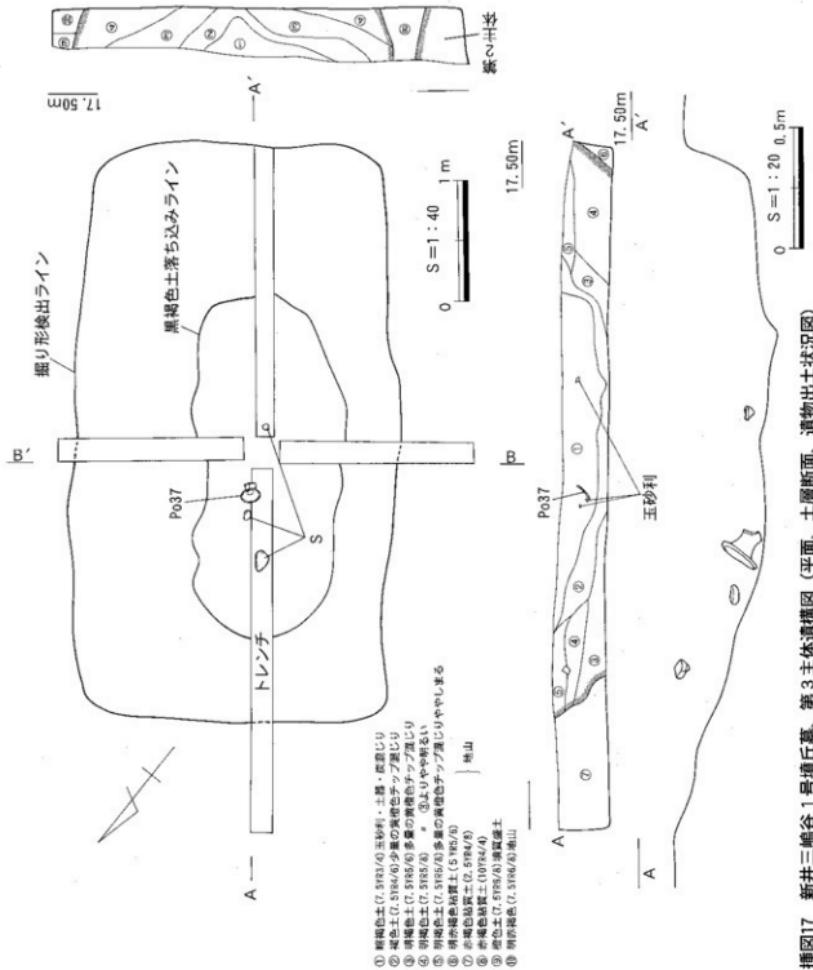
Po33～35はC類、Po36はA類の器台である。Po33は、口縁端部をやや上下に拡張した口縁帶に1条の凹線を引き、さらに鋸歯文を施す。筒部上方にも凹線あり。口縁部内外面には凹線文を多用する。Po34は、脚部片で、端部は面を持つ。裾部外面に凹線を施している。Po35は筒部片である。外面にはタテハケメ後、数条の凹線を施している。Po36は、大型器台の脚部片である。端部は肥厚させ、面を成す。内外面はヨコナデ、内面に若干ハケメ痕が残る。これら器台(Po33～36)は、砂粒の外、角閃石を含む。

### 第3項 第2主体の調査

#### (1) 遺構の調査 [挿図8・16、図版8]

第2主体は、第1主体の南側に位置する。東隣には第3主体が位置する。第2主体は、当初発掘調査の対象にはなっていなかったが、第3主体調査の過程で必要と判断し実施したものである。

第2主体の規模は、最大幅1.44m、最大長2.54m、最大深さ0.45mを測り、主軸はN-45°Eをとる。墓壇の主軸方向は第1主体と同一であり、墳丘の主軸に対し直交し、不整な隅丸長方



形を呈している。

墓壙内埋土は、7層を確認している。昨年度調査のトレンチの土層面観察と今年度実施したサブトレンチでの調査であるため、墓壙床面までは検出していない。トレンチの土層面観察を詳細に行ったところ、木棺の痕跡を確認した。木棺の幅は、外法で0.48mを測る。木棺は、側板と棺蓋が腐朽した状態で検出できた。第2主体では、所謂黒褐色土の落ち込みは認められなかった。墓壙上面の中央部よりやや西寄りで標石が遺存していた。

挿図17 新井三塙谷1号墳丘墓、第3主体構造図(平面、土層断面、遺物出土状況図)

墓壙の掘り下げは、墳丘に盛土が施されて後に行われていることが知られた。墓壙の東側は地山面からの掘り下げであるが、これは墳丘築成以前の地形の起伏によるもので、本来は全面に盛土が施されていたものと考えられる。遺構図中⑨層は、墳丘盛土の表層で貼石を施すための化粧土である。このため墓壙掘り形の掘り下げは、墳丘墓築成過程の最終段階に行われたものと考えられる。⑩層は地山風化土で、⑪層は墳丘盛土の下層部分を成す。

#### 第4項 第3主体の調査

##### (1) 遺構の調査 [挿図17・18、図版9~11]

第3主体は、第1主体の南側に位置し、西側に第2主体が隣接する。墓壙の規模は、最大幅2.74m、最大長4.80mを測り、やや不整な隅丸長方形を成す。深さはトレンチ調査により約0.43mまで確認している。墓壙は、墳丘の主軸に平行に造られておりN-45°-Wを測る。

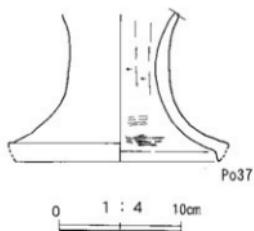
遺構検出面中央部から西側にかけて黒褐色土の落ち込みが見られた。この黒褐色土の範囲は幅1.28m、最大長2.85mを測る。深さは0.43mである。黒褐色土中より器台脚部1と円礫及び玉砂利の出土をみた。弥生土器は、落ち込みのほぼ中央部の最下部より出土している。また、遺構検出面の黒褐色土上面からは、貼石と同質のやや偏平な亜円礫を検出している。この石材は標石との見方もあるが、落ち込みに伴うものであるかは不明である。墓壙内埋土は、5層を確認した。調査は、黒褐色土の最下層を限度としているため、内部主体までは達していない。埋土は明褐色土を主に用い、墓壙上面を褐色土で被覆している。この上で供獻行為が行われ、弥生土器の器台とともに底面には玉砂利が撒かれていたものと考えられる。落ち込みは、墓壙の西側に偏しているが、最深部は中心に向かっていることが知られた。このため、内部主体は墓壙のほぼ中心部に埋置されていたものと考えられる。

墓壙の掘り下げは、第2主体と同様、墳丘に盛土が施されて後に行われていることが知られた。墓壙の西側は地山面からの掘り下げであるが、これは墳丘築成以前の地形の起伏と後世の削平によるもので、本来は全面に盛土が施されていたものと考えられる。遺構図中⑨層は、墳丘盛土の上層で貼石を施すための化粧土である。このため墓壙掘り形

の掘り下げは、墳丘墓築成過程の最終段階に行われたものと考えられる。

##### (2) 遺物出土状況 [挿図17、図版11]

黒褐色土中、中央部やや北寄りの下層より、器台(Po37)を1点検出した。脚部を上にし、落ち込むような状態で出土した。受部は欠損していたが、墳丘斜面等からも検出できなかつた。その他、黒褐色土上面で、直径10cm程度の円礫を1点、また、黒褐色土中より、直径5cm程度の円礫、玉砂利を10数点確認している。



挿図18 新井三崎谷1号墳丘墓、第3主体出土遺物実測図

### (3) 出土遺物 [挿図18、Po37、図版48]

Po37は、器台で、受部は欠損している。脚部端は下垂させ、接地面が断面三角形を呈するものである。外面はナデ、内面は筒部左方向へのヘラケズリを施し、脚部はハケメ、一部ミガキ様の細い筋が観察される。復脚径は16.0cmを測る。

## 第5項 墳丘斜面の調査

### (1) 東面の調査 [挿図7～9・19・20、附図4、図版12・15・18～21]

墳丘東側斜面部に於いては、墳頂部に設定しているNo.③トレンチを貼石上端部まで延長し、調査を行った。墳丘斜面には、4本のトレンチNo.⑩・⑫～⑯を設定して調査を行った。この内No.⑩・⑪・⑯トレンチは、それぞれ斜面裾部のI・II・IIIベルトとリンクさせている。また、墳丘斜面の貼石部については、2カ所に於いてエレベーション(G-G'、H-H')を実施した。

No.③トレンチの東端部の調査では、地山直上に於いて3層の盛土が確認された。盛土は、地山面より墳丘築成が行われている。地山直上に墳丘築成に伴い明赤褐色粘質土が、最大0.6mの厚さで盛土が施されていた。最下層の盛土は、締まりがなく風化土とも考えられるが、岩盤チップを多く含み炭片を底部に含有していた。上面の盛土は明赤褐色粘質土であり、炭片を含み貼石を施すための化粧土と考えられる。この化粧土は墳丘の体裁を整えた後、墳丘全面に施されていることが知られた。

墳丘の南東隅部に当たるNo.⑩トレンチでは、地山直上に風化土がみられ、その上面に盛土が施されていた。このことから、墳丘の裾部はNo.⑩トレンチ付近まで伸びていたことになり、南面から見れば突出状に張り出している感を与える。

東面の斜面裾部に設定しているNo.⑫～⑯トレンチの土層断面観察によれば、No.③トレンチで確認した墳丘盛土と化粧土が認められた。No.⑫トレンチでは、地山から剥離した岩盤チップが多量に含まれた盛土の存在が知られた。この岩盤チップは、後述する「穿孔貝生息痕」が見られるもので、地山面より遊離した状態で検出された。このことは、墳丘盛土に際し1号墳丘墓所在地に散在する岩盤チップと周辺の土を混合して盛土したことが窺える。この傾向は、墳丘全面で確認できた。

#### (貼石) [附図4]

墳丘斜面に施されていた貼石は、斜面の上半と下半では用いる石材に大小の差が顕著に認められた。即ち、斜面上半では拳大の大きさの石材を、墳丘盛土上層の化粧土に埋め込むように貼られていた。斜面下半では、やや大きめの拳大～人頭大の石材を化粧土に貼り付けていた。斜面下半の化粧土は、斜面上半のそれとは趣を異にしている。盛土上層の化粧土の上に、更に暗黒褐色土を施している。斜面下半の貼石は、この暗黒褐色土に埋め込み貼り付けている。

貼石は、全面的に規則性・石列は認められない状況であった。その中で、斜面中央部に於いて縦方向に目地列を通す部分が認められた(B～B'・C～C')。幅約2.8mの間隔で縦方向に目地を通していった。この縦方向の目地列の間隙には、更に横方向の目地列が3～4列認められた。

この横方向の目地列を境にして、斜面貼石の傾斜角を変換させていることが看取できた。このような貼石は、中央部分の縦方向目地列に囲まれた部分のみで他では認められなかつた。

斜面全面に施された貼石の石材長軸方向を検討してみたが、特に規則性は見られなかつた。その中にあって、斜面南側の一部に於いて3~4条にわたって、斜面に対し縦方向に目地を描えている箇所が認められた(A~A')。その両側は、概ね石材長軸方向を等高線に沿わせていることが知られた。斜面北側の貼石は後世の改変で失っており、その貼石状態を窺うことは出来ないが、同様の措置が執られていたものと考えられる。この部分的に見られる縦方向の目地列は、墳丘斜面に施していた貼石の施工単位と考えられる。

(エレベーション) [挿図7・20]

東面南側の斜面部に於いて、2カ所のエレベーション(G-G', H-H')を行つた。G-G'ラインでは、僅かではあるが斜面下半の裾部に於いて傾斜の変換が認められ、墳丘基底部に緩やかに繋がっていくことが知られた。視覚的に見ても、斜面上半の傾斜と下半のそれとは趣を異にしている。この傾向はH-H'ラインでも同様であり、裾部から基底部に向かってやや緩やかに接続している。

(2) 西面の調査 [挿図7~9・19・20、附図5、図版22~24]

墳丘西面の調査では、前年度設定していたNo.①トレンチの墳丘裾部を延長した。また、その南側に設定していたNo.⑩トレンチも同様、裾部まで延長して土層断面観察を行つた。西面の貼石状況は不良であったが、南側でエレベーション(D-D')を実施した。

No.①トレンチの土層断面観察を行つたところ、東面のNo.③トレンチと同様、墳丘盛土が2層確認できた。盛土上層の化粧土は、他の斜面より省略されている感がある。これは、貼石の遺存状態をみても簡素化された措置であろう。

斜面下半では地山面直上に岩盤チップを多く含む盛土(挿図8、⑧層)が施され、墳丘裾部を成すものと考えられる。丘陵斜面は、この地点より急傾斜となっている。

西面の北端部と南端部は、後世の崩落により欠失しているため詳細は不明である。

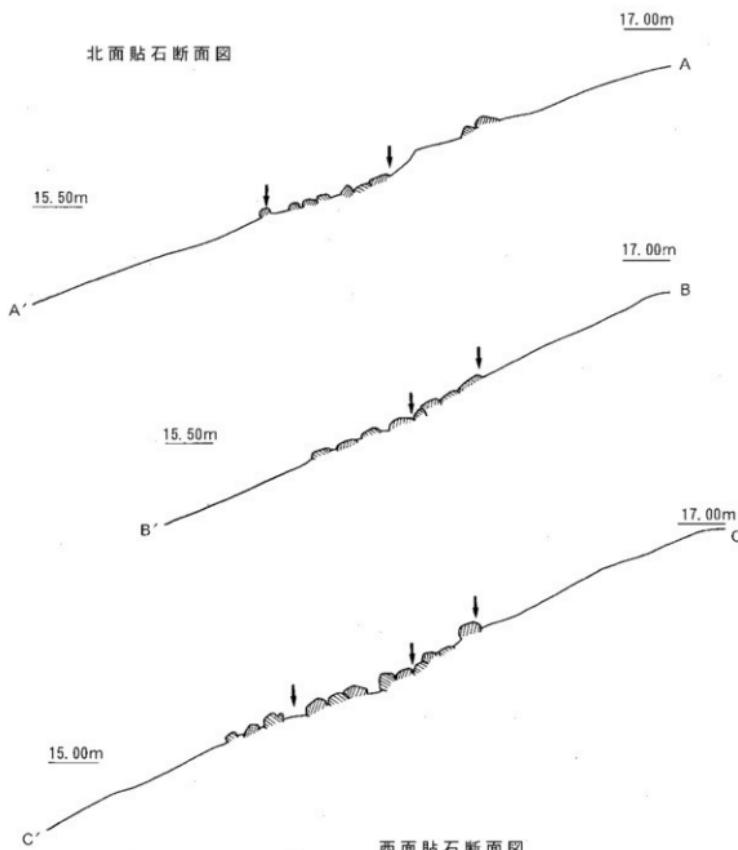
(貼石) [附図5]

西面に施された貼石の遺存状況はプライマリーな状態ではない。後世の改変に伴う欠落も考えられるが、本来、他の斜面ほど丁寧な貼石が施されなかつたものと考えられる。これは、墳丘盛土の施工法に関しても云えることである。墳丘盛土上層は全体的に赤褐色系の土を盛り上げているのみで、他の面で見られる黒褐色及びにぶい褐色土の化粧土は施されていない。貼石の遺存状況を見ても、他の面と同様に斜面の上半・下半では用いる石材の大きさを変えてはいるが、全体的にまとまりがない。目地を通す貼石や石列は存在していない。従つて西面の貼石は、墳丘墓築成時に他の面ほど意識しない施工が成されたものと考えられる。

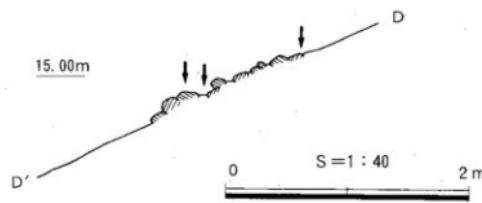
(エレベーション) [挿図7・19]

西面では、比較的遺存状態の良好な南側の貼石部でエレベーション(D-D')を行つた。貼

北面貼石断面図



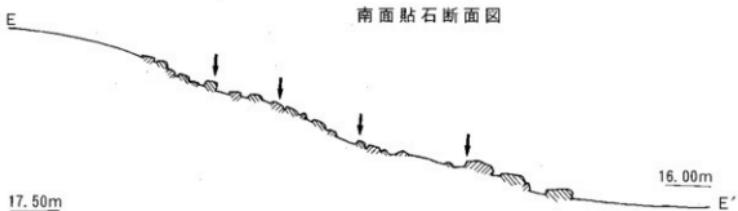
西面貼石断面図



挿図19 新井三崎谷1号墳丘墓、貼石エレベーション図（1）

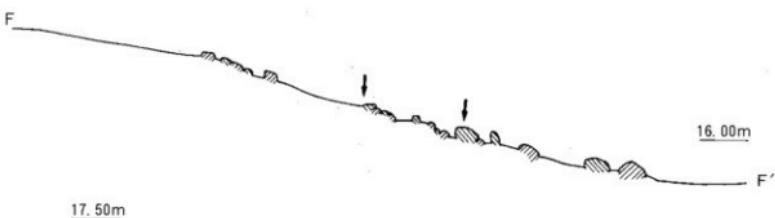
17.50m

南面貼石断面図



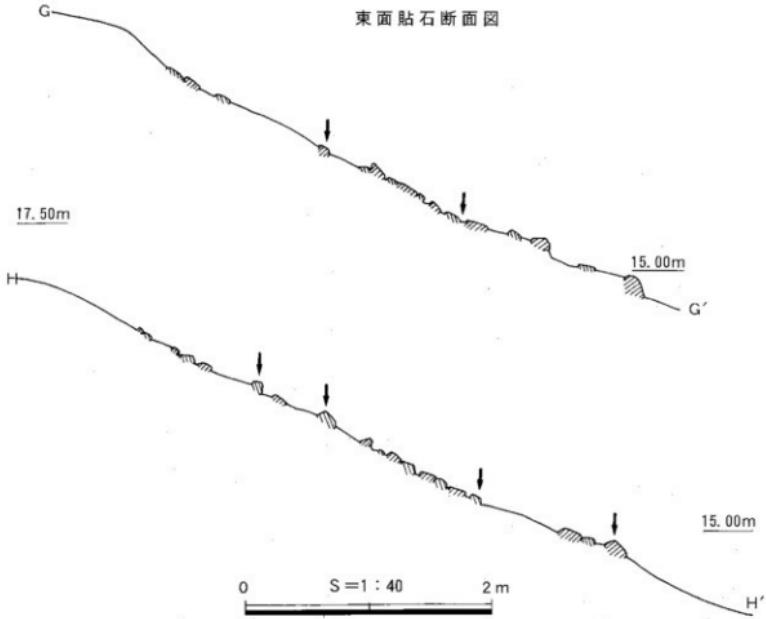
17.50m

16.00m



17.50m

東面貼石断面図



0 S = 1 : 40 2 m

挿図20 新井三崎谷1号墳丘墓、貼石エレベーション図（2）

石のレベルで見ると、東面と同様、標高16m付近で僅かに傾斜変換点が認められる。この地点は、石材の大きさを変えている箇所に該当する。斜面下半の貼石はその殆どを失っていて、詳細は不明である。

### (3) 南面の調査 [挿図7～9・19・20、附図6、図版25～29]

墳丘南側斜面部に於いては、墳頂部に設定しているNo.④トレンチに接続して、No.⑤～⑧及びNo.⑨トレンチの調査を行った。No.⑦・⑨トレンチは、前年度設定したトレンチである。墳丘斜面の貼石部では、2カ所でエレベーション(E-E' , F-F')を実施した。

No.⑦～⑨トレンチは、1号墳丘墓と2号墳丘墓の鞍部に位置する。土層断面の観察により風化した岩盤直上より墳丘盛土が行われている事が確認できた。盛土は墳丘の体裁を整える⑨層の上に⑩層の貼石を施す化粧土が確認できた。他の面と同様、斜面上半は墳丘盛土上層に石材を貼り付けている。斜面下半では盛土上層の上に更に化粧土を施し、石材を埋め込み貼石を行っていることが知られた。斜面上半の一部では(No.⑥トレンチ)、墳丘盛土上層中に於いて石材が検出された。この石材は、墳丘盛土の上層・下層からも検出されたが、その性格は不明である。

#### (貼石) [附図6]

南面に施されていた貼石の遺存状況は、比較的良好であったが斜面西側は崩落が著しい。

貼石は他の面と同様、斜面上半には拳大、斜面下半では人頭大よりやや小振りな石材を用いている。斜面中程よりやや下部(標高16.00m～16.20m)に石列(A～A'・B～B')が認められる。この石列は斜面中央部では崩落して連続していないが、西端部に人頭大の石材が3石配置されている部分(A～A')に繋がっていたものと考えられる。この石列は斜面裾部に施されたものではないが、全体的に弧状を描いていることが認められる。特に、西端部に配された3石の貼石は、西側の石材は約40度の角度を付けていることが知られ、南北方向に伸びていたものと考えられる。斜面東側に認められる石列(B～B')は、全体に弧状を描き墳丘の南東隅部に向かつて伸びていることが確認できた。石列の東端部は欠失していて不明であるが、本来、更に伸びていたものと思われる。この南東部に於いて、調査時に除去してしまったが長さ約0.7m、幅約0.3mを測る石材を確認している。この石材は、斜面に施された貼石と同質の亜円礫であった。この石材の性格としては、墳丘裾部の隅角処理に用いられたものと考えられる。

石列より下半に見られる貼石は、概ね人頭大より小振りな石材が施されていた。これらの貼石は斜面部よりの崩落と思われたが、トレンチ調査の結果、元位置を保つものと確認された。全体にまとまりがないが、視覚的には2条の目地列を追うことが可能である。しかし、明確な石列や目地列を成すものではなかった。このような貼石は、倉吉市阿弥大寺1号墳丘墓や島根県頓原町順庵原1号墳丘墓などで見られるストーンサークル状を呈しているかの如くである。また、広島県三次市陣山遺跡に見られる方形の張り出し部とも見ることが出来るが、明確な張り出しへなくその性格は不明である。

石列上半に見られる貼石は、拳大よりやや小振りな石材が貼られていた。石材は花崗斑岩を主

体とするが、青灰色や緑色を呈した安山岩系のものも用いられている。一部には穿孔貝生息痕の残る、岩盤から遊離した礫が貼石として代用されていた。斜面東側の貼石は比較的遺存状態が良好であり、施工法を窺い知ることが出来た。石列直上の貼石は拳大より小振りな石材を密に配置しタイル状を呈している。斜面上方は拳大の石材を用い、比較的密な状態で貼られている。この僅かな石材の大きさを変えることで、視覚的に見て墳丘墓を二段築成に見せかける意図が考えられる。貼石部の断面観察に於いても、僅かではあるが傾斜変換点が認められている。

標高16mのレベルに認められた石列は、東西面貼石上半部の下端ラインに合致することが判明したが、現段階ではその相互関係は不明である。

斜面上半の東側部に於いて3条の目地列（C～C'）が確認できた。墳頂平坦部より南東隅部に向けた稜線上に当たる。長さ約1mの遺存であるが、貼石の隅角処理の措置と考えられる。出雲市西谷3号墓、米子市尾高浅山1号墓等に見られるステッピングストーンとは、趣を異にしている。

#### （エレベーション） [挿図7・20]

南面貼石部の東側斜面に於いては2カ所でエレベーション（E-E'、F-F'）を実施した。南面貼石部の東側斜面は貼石遺存状態が良好で、視覚的にも二段築成を思わせる箇所であったためエレベーションを実施したものである。断面観察によれば、16.5m、16.88m付近に傾斜変換点が認められる（E-E'ライン、F-F'ライン）。下端の傾斜変換点から緩やかに石列に接続していることが知られた。また、この部分の貼り石状況はその密度が密でタイル状を呈していることが確認できている。

#### （4）北面の調査 [挿図7～9・19・20、附図7、図版30～33]

墳丘北側斜面部に於いては、墳頂部のNo.②トレンチを貼石上端部分まで延長して調査を行った。また、墳丘裾部にNo.㊀～㊈トレンチを設定し、1号墳丘墓と三鷗谷1号墳との切り合いを観察した。墳丘斜面の貼石部については、3カ所でエレベーションを実施した。

No.②トレンチ北端部の土層断面観察によれば、他の面と同様、地山直上より墳丘盛土が施されていることが確認された。墳丘盛土は3層が確認でき、その内㊁層は貼石を施すための化粧土で暗褐色を呈している。この㊁層中に於いても、南面と同様、一部で石材の埋没状況が確認されているが、その数は僅かであり性格は不明である。しかし一つの考え方として、貼石を施す際の目安（施工単位の目印）を表しているとも考えられるが、他の地域でこのような施工法は管見の限りでは知らない。

斜面裾部に設定したNo.㊀～㊈トレンチの土層断面観察の結果、標高約14m付近まで墳丘盛土が確認できた。盛土は2層が認められ、上層はNo.②トレンチに於ける㊁層の化粧土に該当する。従つて、本来、裾部まで貼石が施されていたものと思われる。

三鷗谷1号墳の石室掘り形は、この1号墳丘墓の墳丘盛土をカットして造られていたことが知られた。

(貼石) [附図 7]

北面に施された貼石の遺存状態は比較的良好であった。しかし、斜面下方は三嶋谷 1 号墳築造に際し貼石部分のみ削平されているため遺存状態は悪い。

貼石に使用した貼石は、他の面とは趣を異にしており人頭大より小振りな石材を貼り付けていた。貼石の上限は、標高約 16m 付近であり、東面や西面斜面上半に見られる拳大の石材を貼り付ける下端レベルに合致する。しかし、北面では斜面上半には貼石は確認できなかった。本来、部分的ではあるが拳大の石材が見られたことで、貼石が施されていた可能性が考えられる。

斜面中央部に於いて、東面で見られた縦方向に目地を通す目地列が確認された。目地列は 7 列が確認できた。この目地列の内 C～C'・E～E' ラインに囲まれた部分では、横方向の目地列が 3～4 条認められる。また C～C'・E～E' ラインの外側には約 0.6m の間隔で更に縦方向の目地列を作っている。この 2 条の石列の間隙には青灰色を呈した玄武岩からなる石材を貼り付けている。この青灰色を呈した玄武岩は、柱状節理の石材が亜円礫化したもので、町内の鴨ヶ磯海岸より産出されるものである。これらの玄武岩は、貼石に使用された石材の内最も大きな部類にはいる。2 条の石列に囲まれて配置された貼石は、覆瓦構造を示しており斜面下部より貼り付けていったことが知られた。同様に E～E'・F～F' ラインに囲まれた範囲に於いても、一石ではあるが青灰色を呈した玄武岩系の石材が用いられていた。本来、石列の間隙全面に配置されていたものと思われる。この部分での石材は、円礫化が進んでおらず柱状節理の原形を留めている。これと同様の石材は（青灰色を呈した玄武岩）斜面東端部に於いても認められた。その周囲には顯著な石列や目地列は認められなかった。しかしながら、南面ほど明確ではないにしても、隅角稜線上に沿う形で目地が通っていることが認められる。

斜面に施された貼石の内、東側に於いて弧状を描く目地列が僅かに認められるが石列を成すものではない。また、遺存している貼石の東端部では、南面東端部で見られた隅角処理が認められた。

(エレベーション) [挿図 7・19]

北面に於いては 3 力所でエレベーションを実施した。貼石の傾斜変換が顯著な A～A'、縦方向の目地列上を横断する B～B'、覆瓦構造を示す C～C' である。A～A' ラインでは、斜面中程と下端部に傾斜変換点が認められる。中程の部分は、弧状を描く目地列上に該当する。下端部は、墳丘裾部に連続する部分である。目地列の斜面上側の石材は、図中には表れていないが立石状を成す。B～B' ラインは、青灰色を呈した玄武岩が配置される部分の東側に位置する目地列である。エレベーションの観察では一定の斜度を示しているが、レベル的には A～A' ラインの中程に該当する部分に於いて僅かに傾斜変換点が認められる。この変換点は、C～C' ラインに於いても同様の傾向を示している。C～C' ラインでは、3 力所で傾斜変換点が認められる。即ち、斜面上半から貼石部に移行する箇所でやや急傾斜となり、いったん緩やかな貼石を施した後、やや角度をとつて裾部に統いていることが認められる。このような貼石状況は、東面中央部に於けるジグザグ状を呈した箇所に共通する措置である。

## 第6項 墳丘裾部の調査

### (I) 東面裾部の調査 [挿図7・9・22~25、附図4、図版16・34・35]

東面裾部の調査は、前年度未着手であったため、ベルト (No.I ~ No.V) 及びトレンチ (No.⑩ ~ No.⑯) を設定し、墳丘裾部の確定を行った。調査の結果、裾部に岩盤層とピット群が検出されたため、調査範囲を広げ土層断面観察ベルトを除きほぼ全面を掘り下げた。東面裾部では、人為的な作為が看取される部分が認められた。中央部では、玉製品と須恵器を伴とするピット群が検出された。また北端部に於いては、三嶋谷1号墳に通じたと考えられる墓道状の造構が確認された。

墳丘裾部の確定は、No.⑫・⑭・⑯トレンチ及びNo.I ~ IVベルトの土層断面の観察により行った。観察の結果、裾部は、ほぼ前年度調査で想定していた貼石の最下部が該当していることが確認できた。北側では、貼石下端部より0.4m程下側に位置する。この墳丘裾部（基底部）には、0.7 ~ 1.0mのテラス面が廻っている事が確認できた。東面裾部で確定できた裾部ラインを元に墳丘の規模を想定すると、東西幅は約18mを測る。

### I 岩盤露呈部 [挿図7・9、附図4、図版37・39・40]

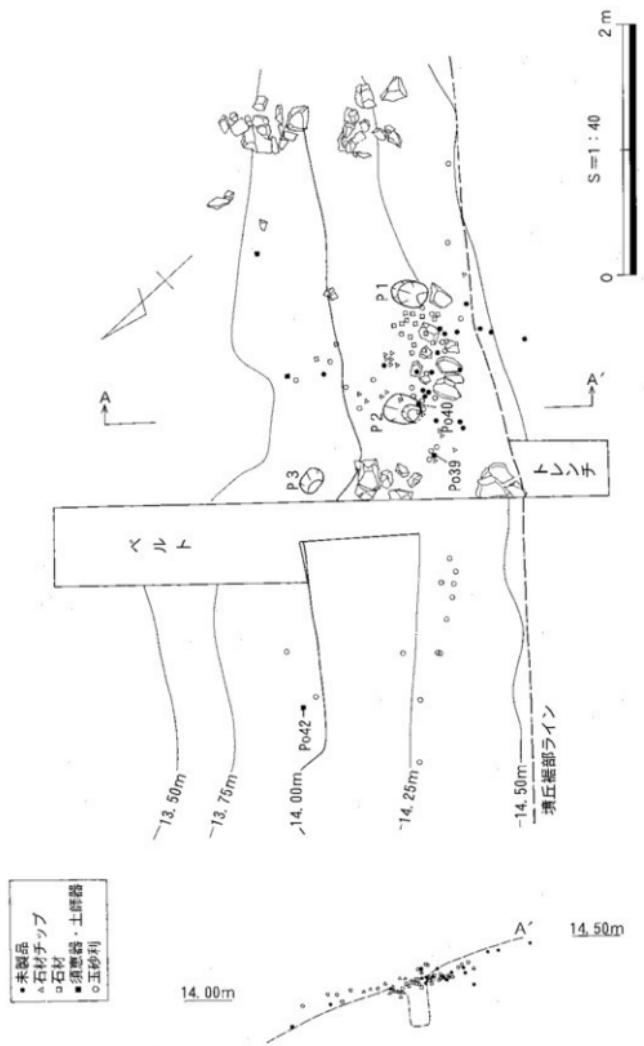
墳丘東面の裾部を成すと考えていたテラス面を掘り下げたところ、丘陵を形成する岩盤露呈部が検出された。岩盤露呈部の一部には、岩盤から遊離した石材を人為的に積み上げている部分が認められた。この露呈部は調査の結果、一部地表面に出ていない箇所も認められるが、2号墳丘墓南端部より1号墳丘墓北端部まで伸びていた。1号墳丘墓南端部 (No.⑩トレンチ付近) に於ける岩盤露呈部の状況は、一抱え大の岩塊がやや遊離した状態で検出された。この岩塊の南側は、やや屈曲して丘陵内側に回り込む状況にあることから、1号墳丘墓の南東隅部を意識しているものと思われる。この部分より北側では、一部に石垣状を呈した箇所が認められる。この石垣状を呈した部分は、墳丘斜面に施された貼石ほどの丁寧さは見られず、岩盤露呈部を墳丘築成時に景観の中に取り込んだものと考えられる。

岩盤露呈部は、No.Iベルトの北約4m地点で一旦途切れ、No.IIIベルト付近で再び露呈している。

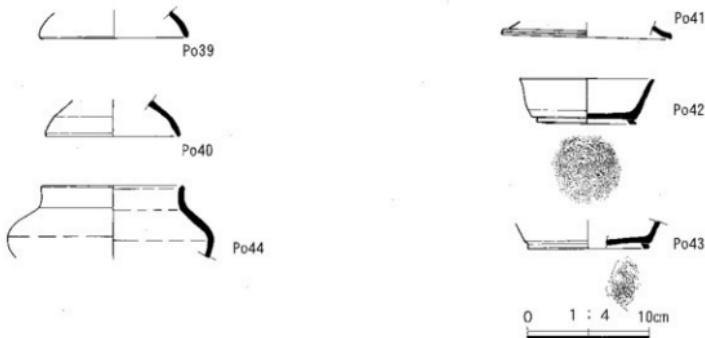
### II 玉作工房跡 [挿図7・9・21~24、附図4、図版34・35]

東面裾部のほぼ中央部に於いて、滑石製の玉製品・未製品・石材と須恵器を伴とする造構を検出した。この造構は、柱穴と考えられるピットを伴っていた。造構は、1号墳丘墓裾部付近より東側の岩盤露呈部が途切れる箇所に位置している。

柱穴と思われるピットは3カ所検出された。ピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、P 1 (0.175m×0.14m×0.197m)、P 2 (0.21m×0.25m×0.368m)、P 3 (0.14m×0.16m×0.227m) である。ピットの心々間距離は、P 1より0.9m、1.0mを測る。ピット底部の標高は、P 1よりそれぞれ13.918m、13.8m、13.68mである。これらのピットは斜面に対してほぼ垂直方向に掘られており、覆屋的な建物（小屋掛け程度か？）が建てられていたものと考えられる。



插図21 新井三嶋谷1号墳丘墓、東面埴丘縁部検出ピット遺構図及び遺物出土状況図



挿図22 新井三嶋谷1号墳丘墓、東面墳丘裾部出土遺物実測図（1）

#### 遺物出土状況 [挿図21、図版34・35]

1号墳丘墓東側裾部およびテラス面を検出中、石製模造品（玉）の準完成品、未成品及び石材、石材チップが多数出土した。これらの多くは、P 1からP 2の約2mの間に散在しており、土層としては、③の明褐色土層（挿図9、⑩トレンチ）より出土したものである。また、これに伴うかたちで、同レベルから杯蓋（Po39・40）を検出しているが、いずれも細片である。やや離れて、杯身の完形品（Po42）を検出している。

#### 出土遺物 [挿図22～24、Po39～43、S 3～34、図版50・51]

遺物は、須恵器の杯蓋・杯身・直口壺、そして、石製模造品（玉）・玉砥石を図化した。

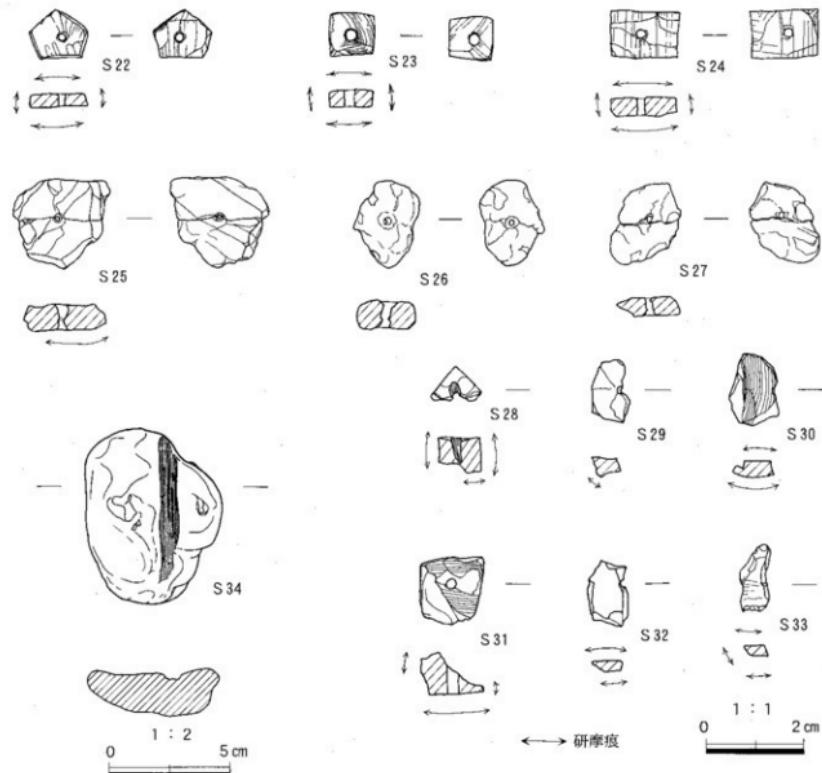
Po39・40は、復口径が12.0～10.8cmを測る比較的小さな杯蓋である。体部は丸みを持つと考えられる。Po41は、蓋の口縁部片で、端部には1条の沈線が見られる。Po42・43は、高台付の杯身で、底部に回転糸切り痕がみられる。Po44は、短い頸部の直口壺である。

S 3～33は、石製模造品（玉）の準完成品及び未成品である。石材は、滑石製（S 3～24・28～33）27点と、滑石よりもより軟質なクローム雲母製（25～27）3点とがある。形態は円形・不整円形・方形・長方形・五角形・不整形などの形状を呈し、中央に一孔を穿ったものである。法量は円形のもの（S 3～S 17）で、大型品が $1.6 \times 1.4\text{cm}$ 、小型品が $1.0 \times 0.85\text{cm}$ を測る。重量は1.87～0.42gである。穴は片面穿孔のものが21点、両面穿孔のものが5点あり、幅は、1.0～1.29mmを測る。両面には、成形時の削り痕及び研磨痕が観察できる。軟質なクローム雲母製は、不定形な形状に加工し、穿孔するのみのものである。S 28～30・32・33は、穿孔途中で欠損した失敗品と考えられる。S 34は、幅0.6cm、長さ6cm、深さ0.25cmの溝状の凹みを持ち、玉砥石の可能性がある。

遺物の時期は、Po39・40・44は、陶邑編年II型式6段階に相当すると考えられ、年代は7世紀



插図23 新井三崎谷1号墳丘墓、東面墳丘裾部出土遺物実測図（2）



挿図24 新井三嶋谷1号墳丘墓、東面墳丘裾部出土遺物実測図（3）

前半代に比定される。また、Po41～43は、下坂窯跡群編年のV期、陶邑編年IV型式3段階に相当すると考えられ、年代は8世紀初頭～8世紀中頃に比定される。<sup>註3</sup>

石製模造品（玉）は、Po39・40と同レベルで出土しているので、おそらくこれらの遺物と同時期の7世紀前半代のものと推定される。

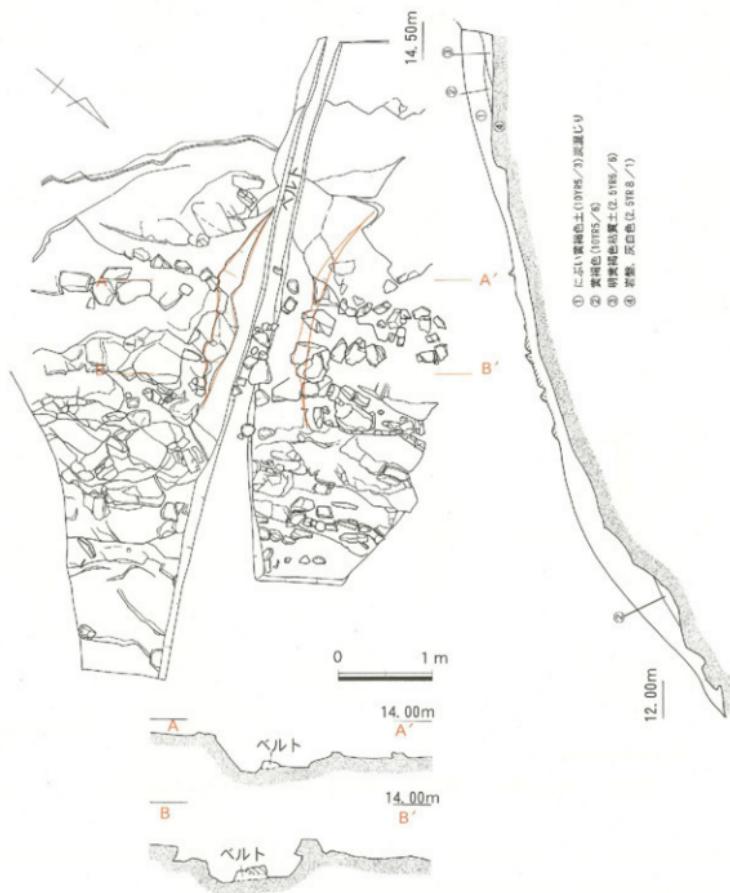
註1 玉類の中には、未完成品も見られるが、完成品として扱ってもよいものも多数あった。しかしそれらが、石材チップおよび石材と一緒に検出されているため、ここでは準完成品として記載する。

註2 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房株式会社 1981

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

註3 中野知照『下坂窯跡群』郡家町教育委員会 1988

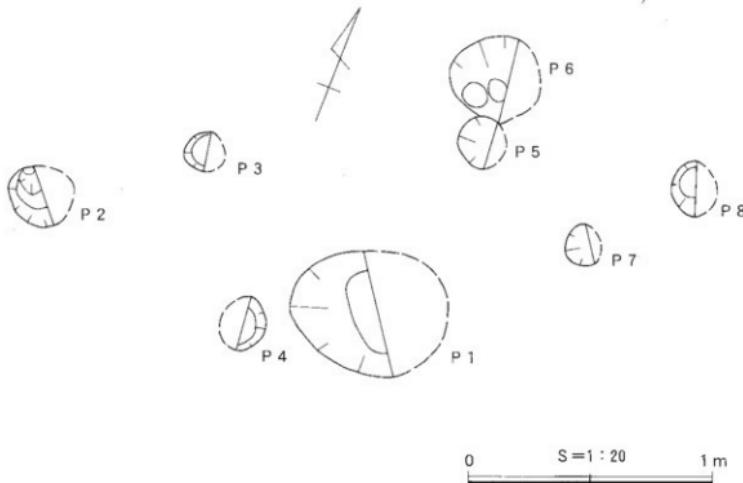
挿図25 新井三崎谷1号墳、墓道状遺構（平面、土層断面図）



### III 墓道状遺構 [挿図7・25、附図4、図版16・37・38]

岩盤露呈部の北端部分に於いて、自然の窪みを利用した墓道状の遺構が確認された。この墓道状の遺構は、三嶋谷1号墳に付随したものと考えられる。

墓道状遺構は、1号墳丘墓北東隅部の裾部を成す平坦面から丘陵斜面に移行する箇所で検出さ



挿図26 新井三嶋谷1号墳丘墓、南面墳丘裾部検出ピット群遺構図

れた。遺構は、傾斜変換点辺りの自然な崖みをほぼそのまま利用している。墓道床面の両端部に切削して墓道として体裁を整えた部分も認められた。この墓道状遺構の規模は、遺構上端幅約1.1m、床面幅約0.65~0.8mを測る。遺存している全長は約4.5m以上である。西側は三嶋谷1号墳の玄門に接続していたものと考えられる。東側は丘陵斜面に連続するが、墓道状の崖みは形成しておらず、岩盤の節理を利用した階段状の凹凸が認められるのみである。

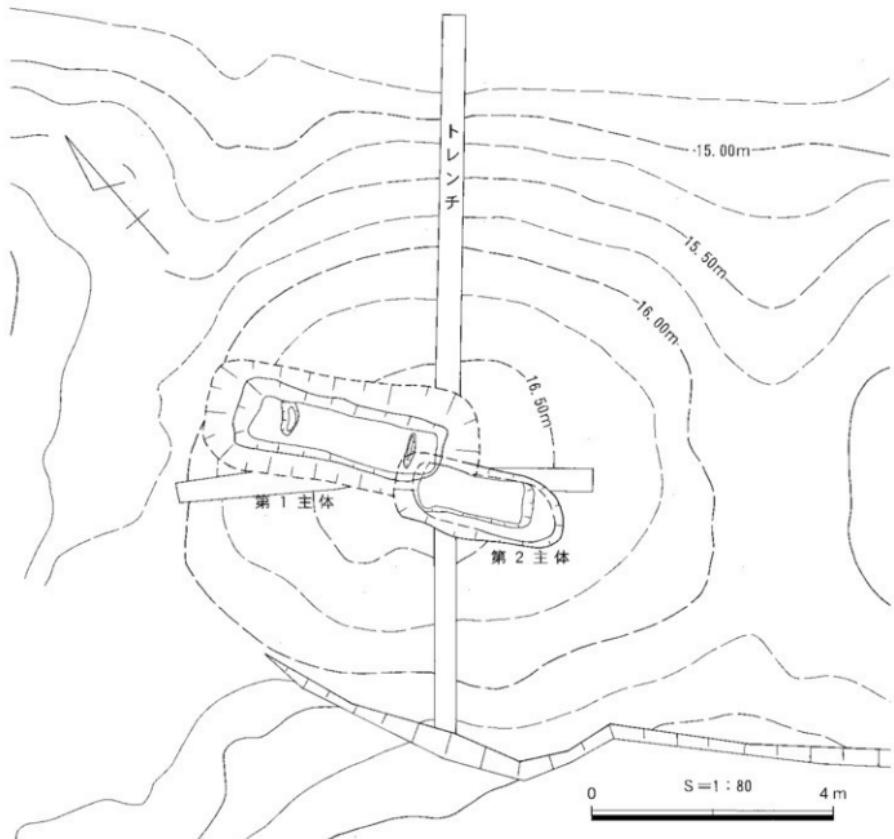
床面には、1号墳丘墓の墳丘斜面に施されていたと思われる石材が検出された。墓道状遺構の床面を敷石状に施したものとは云えないが、何らかの意識で配置したものと考えられる。

#### (2) 南面裾部の調査 [挿図7・26、附図6、図版36]

墳丘南面裾部と2号墳丘墓中間に平坦部に於いて8個のピットを検出した。ピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、P1（0.66m×0.53m×0.15m）、P2（0.27m×0.26m×0.17m）、P3（0.16m×0.16m×0.06m）、P4（0.23m×0.19m×0.17m）、P5（0.21m×0.20m×0.14m）、P6（0.38m×0.36m×0.14m）、P7（0.18m×0.15m×0.06m）、P8（0.23m×0.20m×0.23m）である。

ピットの埋土は概ね黒褐色土で、P4は暗褐色土であった。P2の埋土中より弥生土器片の出土を見ている。P5とP6には切り合いが見られ後者が先行する。P1は、炭片の混入が見られ、表土除去中には須恵器高台付長頸壺（Po58・59）が出土している。

P 2より出土した弥生土器は概ね後期代のものと考えられる。須恵器高台付長頸壺の年代観は7世紀中頃と考えられる。このように各ピット間には年代観のバラツキが認められ、その分布範囲も南面裾部の西側のみに限定されることからピット群の性格は不明である。



挿図27 新井三崎谷2号墳丘墓、全体図

## 第2節 新井三嶋谷2号墳丘墓の調査

新井三嶋谷2号墳丘墓の調査は前年度に行ったものである。調査の結果、墳丘は2号墳丘墓直上に、古墳時代中期の古墳（三嶋谷2号墳）が造られていたため墳形や規模は不明である。

2号墳丘墓は、三嶋谷2号墳の墳丘断ち割りトレンチに於いて、古墳築造前の旧表土下面に盛土と弥生土器片<sup>見出</sup>が出土したことでの存在が知られたものである。盛土は墳丘の南側と東側の一部に見られ、1層が遺存しているだけであった。墳丘の北側には盛土は見られず地山整形のみである。

墳丘の規模は古墳時代の改変と、東側は丘陵斜面に連続し西側に於いては重機による破壊により判然としない。しかし南側は2号墳の墳裾部とほぼ同一と考えられ、北側は1号墳丘墓の南面裾部との間を墳丘基底部として捉えるならば南北約11mを測る。現段階の現状で墳形を類推するならば、墳丘のコンターラインはやや歪な方形形状を呈している。北側の墳丘裾部は確定できないが、2号墳丘墓は一辺約11mの方形墳丘墓であったと考えられる。

2号墳丘墓では、墳頂部に於いて2基の木棺墓を検出した。2基の墓壙内及びその周辺部に於いても遺物の検出は認められなかった。三嶋谷2号墳の墳丘盛土中より弥生土器片が確認されているが、時期の特定には至っていない。

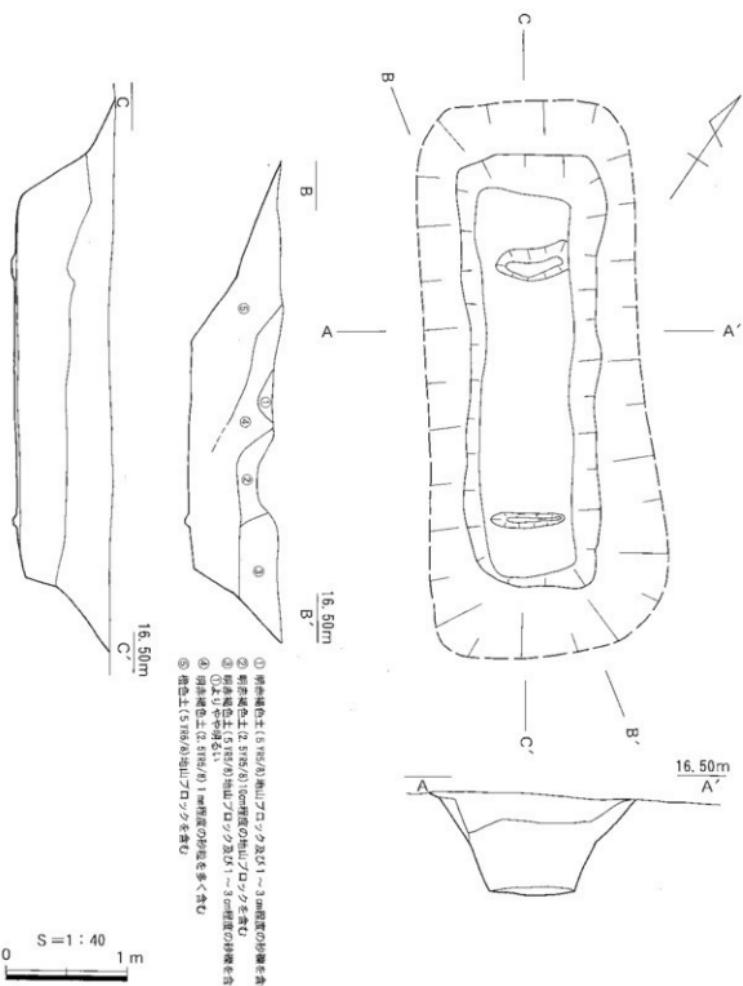
### 第1項 第1主体の調査 [挿図6・7・27・28、図版41]

現存する墳丘の中心部より北側に位置する。南側に第2主体が、第1主体墓壙掘り形を切って作られていた。

墓壙掘り形は隅丸長方形を呈していた。墓壙掘り形の北端部は、2号墳築造に際し一部削平を受けていた。墓壙内埋土は5層を確認している。埋土中からは一部で縄紋土器片の混入が見られた。この縄紋土器は、周辺の遺物包含層に含有されていたものと考えられる。

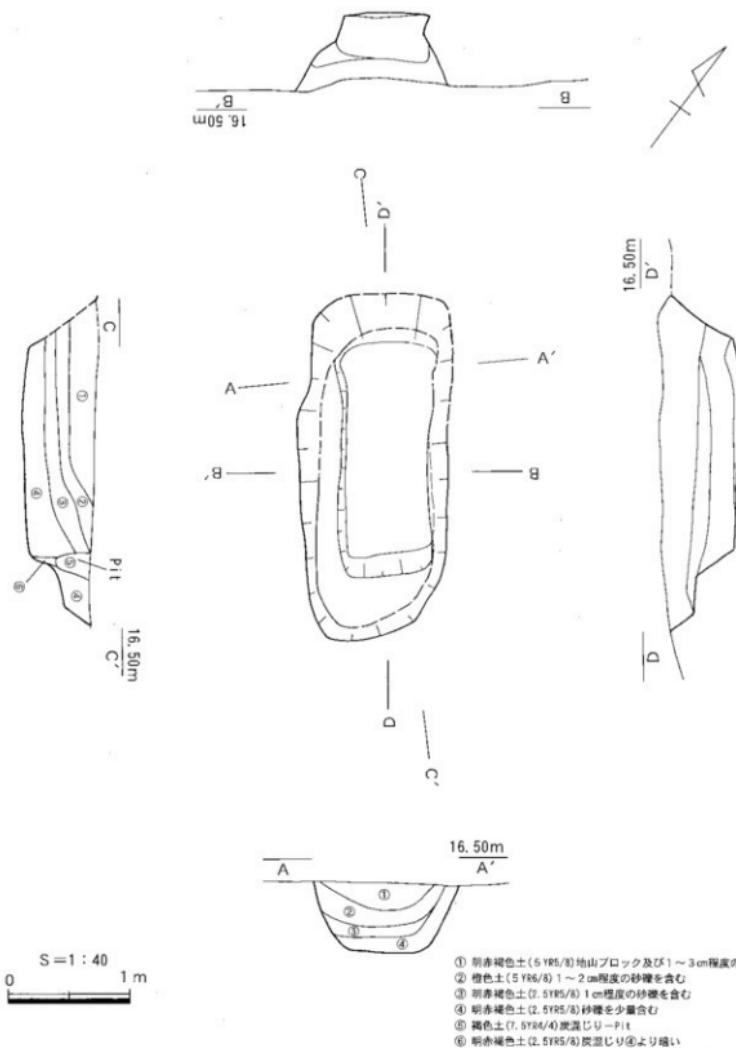
墓壙掘り形の規模は長さ約3.54m、幅約1.22m、最大深さ約0.6mを測る。床面はほぼフラットで、その規模は長さ約3.18m、幅約0.77mである。床面の南北に小口穴が作られていた。北側のそれは、床面北端部より南側約0.45mに外方に向けたやや弧状を描く小口穴が掘られていたが、本来の小口板は直線的なものであろう。小口穴の規模は長さ約0.58m、幅約0.25mを測り、深さは約0.04mである。底の長さは約0.46m、幅約0.08~0.11mである。南側の小口穴は、床面南端部より北側約0.39mに位置する。小口穴の規模は長さ約0.6m、幅約0.12mを測り、深さは約0.03mである。底の長さは約0.45m、幅約0.03mである。両小口底部の心々間距離は2.05mを測る。

小口穴の規模から見て、木棺材は厚さ約8cm前後の板材を使用していたものと考えられる。この場合、木棺の内法長は約1.9~1.95mであったと思われる。木棺の幅は約0.6m前後であったと考えられる。埋置された木棺は、組み合わせ式木棺で、小口板を長側板で挟み込む梯子型を呈していたと考えられる。



挿図28 新井三嶋谷2号墳丘墓、第1主体遺構図（平面、土層断面、見透し図）

第1主体の床面及び埋土中からの出土遺物は見られなかった。



挿図29 新井三嶋谷2号墳丘墓、第2主体造構図(平面、土層断面、見透し図)

## 第2項 第2主体の調査 [挿図6・7・27・29、図版41]

第2主体は、第1主体の埋葬行為が終了した後に、同主体の墓壙掘り形の南西隅を一部切り合った形で作られている事が確認された。

墓壙掘り形は隅丸長方形を成す。墓壙は二段掘りに作られ、組み合わせ式木棺が埋置されていたものと考えられる。墓壙内埋土は6層確認でき、床面南端部で小口板の腐植層が認められた。

墓壙掘り形の規模は、長さ約2.83m、幅約1.24m、最大深さ約0.64mを測る。二段掘りの痕跡は、墓壙の南西部にテラスが認められた。東側にはテラスは認められないが、壁面がオーバーハングしていることが確認された。二段目の規模は、長さ約1.96m、幅約0.73m、深さ約0.23mである。墓壙内床面には小口穴は認められなかったが、長側壁の北側に於いて「T」字状を呈する抉り込みが認められる。この抉り込み部分に小口板を差し込んでいたものと思われる。この抉り込みは墓壙の南側では認められない。このことから木棺は、北側では長側板を小口板で押さえて安定化を図ったものと考えられる。南側は、長側板で小口板を挟み込んだものと思われる。

第2主体に於いては、第1主体と同様、出土遺物の検出はならなかった。

## 第3項 小 結

このように、2号墳丘墓では築造時期を推定する土器類の出土が見られなかつたため、その年代観は不明である。しかしながら、第1主体の占有する位置関係から見て、墳丘は本来1号墳丘墓あたりまで伸びていたものと考えられる。三鷲谷2号墳築造に際しての改変も考慮に入れなければならないが、1号墳丘墓の造墓過程で墳丘の北側が削平されたものと思われる。

従つて、2号墳丘墓の築造時期は1号墳丘墓より先行するが、その時期差は余り無いものと考えておきたい。

註1 確認した赤生土器片は、縦片であったため固化し得ず年代観の特定には至っていない。

## 第3節 新井三鷲谷1号墳の調査

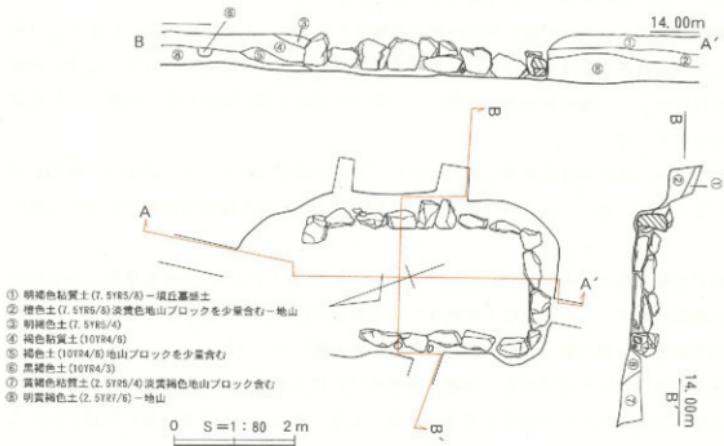
新井三鷲谷1号墳は、新井三鷲谷1号墳丘墓の北面裾部に位置している。前年度、北面裾部の調査中に於いて、暗褐色を呈した攪乱土の堆積と石材の露呈が認められていた。石材は、1号墳丘墓に施されていた貼石とは材質と大きさが異なり、「L」字状に石列をなしていた。

今年度の調査は、石室掘り形を検出し石室内埋土の除去を行い全容を明らかにすることを主眼に置いた。従つて、遺存している石室の側壁や腰石の除去は行っていない。

## 第1項 墳 丘 [挿図7・30・31、図版42]

本墳は、標高13.5m~14.0mの丘陵突端部に位置し、北側は崖となっている。

墳丘盛土は既に失っており、腰石のみの遺存であった。石室は丘陵軸線に対し直交して造られ



挿図30 新井三嶋谷1号墳、土層断面図

ている。墳丘の北側は急斜面の崖を成し、控えが余り無い状況であるが、築造時の丘陵も現況とほぼ同じであったと考えられる。

本墳築造に際しての地山整形は、石室掘り形と石室に接続する墓道に対して行われている。石室掘り形の平面形は砲弾型を成し、横断面は逆台形を呈している。石室前面は羨道部を作らず墓道に接続するため、緩やかに「U」字状のカーブを描いている。石室前面は、後世の改変・開削を受けているためその殆どを失っているが、丘陵山側で緩やかに墓道に接続していることが確認できた。

墳丘は、本墳が丘陵末端部に作られていたことと、後世の改変により墳丘盛土を失っているため原形を復元することは困難である。ただ、石室前面に遺存していた石室掘り形の末端部を墳丘基底部と考えるならば、墳丘の規模は長軸方向で約7m前後であると考えられる。石室掘り形の南側は1号墳丘墓北面を開削して作られているが、掘り形肩部の周囲約1~2mの範囲で貼石を失っている部分が認められる。この貼石が欠失している部分が、三嶋谷1号墳の墳丘盛土が施されていた痕跡とも考えられる。この場合、石室の中心を基準として考えるとその規模は6~7mの数値が得られる。

## 第2項 石室 [挿図30・31、図版42~44]

本墳の内部主体は、北東方向に開口する両袖型横穴式石室である。その主軸はN-22°-Eを測る。石室は後世の開削・改変を受けていたため、玄室の天井石や側壁の大半を失い腰石のみ遺

存していた。玄門部の右側では、掘り形床面に浅い窪みが2カ所に認められた。この浅い窪みは、側壁玄門部寄りの腰石と右側袖石の石材抜き取り痕であると考えられる。

石室は、砲弾型に掘り込まれた掘り形の内側に構築されていた。石室平面は、やや幅の広い長方形の玄室に玄門部のみを付けたもので、所謂羨道部は持たないものと考えられる。石室の各部を構成する石材は主として凝灰岩の角礫を用い、一部に1号埴丘墓に施されていた貼石（玄武岩質の石材）が流用されていた。

**石室掘り形** 石室の掘り形は砲弾型に掘り込まれ、玄門部付近より北に行くに従って緩やかな傾斜で羨道へと上っている。このため、羨道部が構築されたとしても僅かな距離であったと思われる。

石室掘り形の規模は長さ約4.5m、幅約2.7m、南側からの最大深さ約0.9mを測る。石室はこの掘り形内に構築されているが、側壁・奥壁共に掘り形との間の控えが狭い事が知られた。これは特に奥壁側が顕著で、据え置く石材に合わせて掘り形が掘られていた。

石室内の床基底面はほぼ水平である。側壁・奥壁共に石材の形に合わせた掘り形は、石材の配置に際しての安定化を図るための措置と考えられる。また、本墳の占有する立地に制約されたことも一つの要因であると思われる。

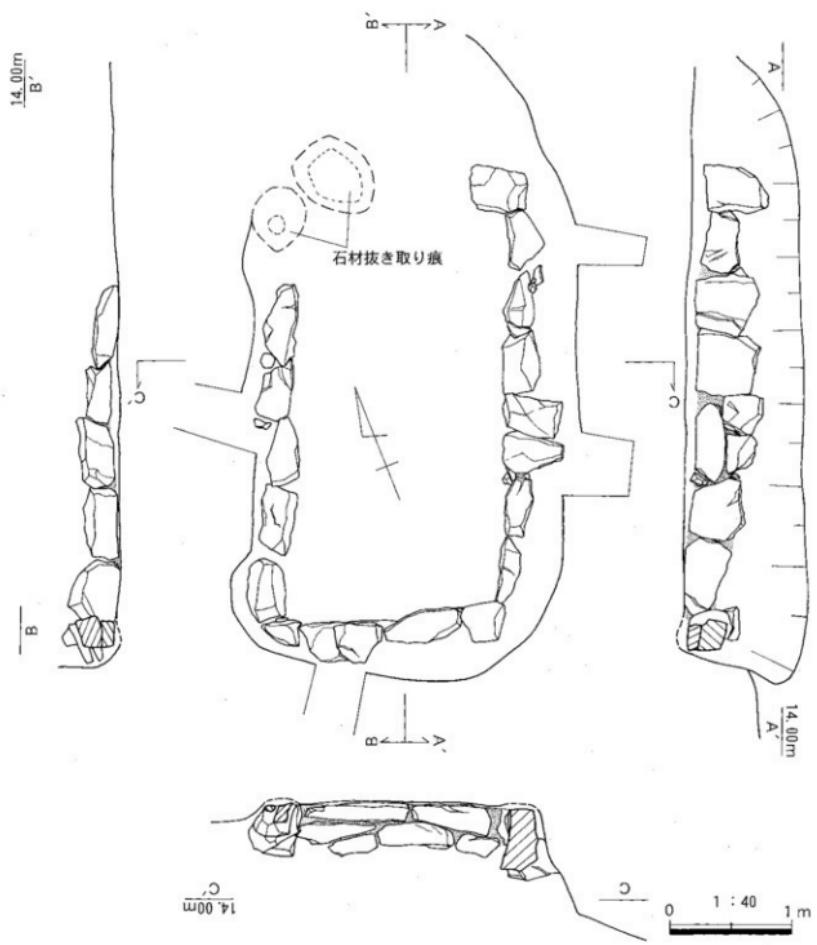
**玄室** 玄室の平面形は、やや幅の広い長方形を成す。玄室の規模は、全長約3.4m、奥壁幅約1.72m、中央幅約1.74m、玄門側推定幅約1.65mを測り、玄門部幅は推定約0.9mである。左袖石の幅は約0.3mである。また、奥壁の高さは約0.8m、玄門部袖石の高さは0.5mであった。

石室は両袖式で、右側の袖石を失っている。羨道部は築造当時から設計されず、構築されていなかったものと考えられる。

奥壁の最下段は、長さ約0.87m、幅約0.26mを測る偏平な石材を右奥に据えている。左側には、長さ約0.7m、幅約0.24mの偏平な石材を置いている。この2石を腰石としている。奥壁に構築され、遺存している石材は三段であった。いずれも比較的偏平な亜円礫が用いられ、二段目は3石が積まれていた。奥壁の左隅は、奥壁部が側壁を押さえ込んでおらず、その逆でもなく角を付き合わせているのみであった。しかし右隅では、側壁部を奥壁部で押さえ込んでいた。

玄室右側の側壁は、腰石のみの遺存で一段分確認された。左側の側壁とは趣を異にし、奥壁と同様な亜円礫を主として用いられていた。腰石の上端ラインまで開削されているため、石材背後の裏込め状況は不明である。しかしながら中央部の腰石背後に於いては、角礫と共に1号埴丘墓の貼石を裏込め石として流用していた。

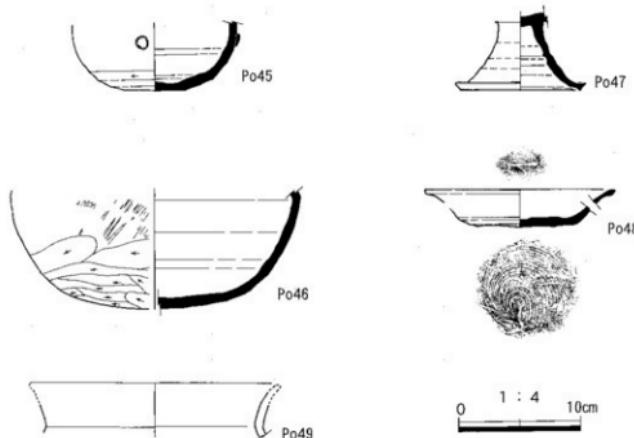
玄室左側の側壁は、偏平に割られた凝灰岩の角礫が立てて用いられていた。玄室内側に面を向けて据えられていた。構築された石材は右側側壁とは違い、比較的大きめな腰石が用いられている。腰石の上端ラインも不揃いであり、側壁の一部は二段分遺存していた。二段目の側壁は、石材の長辺を石室長軸方向に対して直交させて据えられていた。これらの石材の後端部は、石室掘り形の法面で固定されていることが知られた。これは、石室掘り形を広く掘り下げられず、裏込め土を施すことが出来なかつたための措置と思われる。このため、三段目以降も二段目と同様に



挿図31 新井三鷗谷1号墳、遺構図

掘り形の法面で側壁の安定化を図ったものと考えられる。

玄室の床面は、右側壁部が若干長いため歪な長方形を呈する。現存する床面積は約5.85m<sup>2</sup>である。



挿図32 新井三嶋谷1号墳、出土遺物実測図

玄室床面は、掘削された地山面の上に若干のにぶい黄褐色土を敷き詰めて床面としていた。床面には2~3石の小振りな石材が遺存していたが、棺台に該当するかは不明である。

#### 第3項 遺物出土状況 [図版44]

出土遺物として、玄室内から須恵器の壺・高杯・皿 (Po45~48) を4点、玄門部付近より土師器の壺 (Po49) を1点検出している。玄室内の遺物は、床面からのものではなく、明黄褐色～にぶい黄褐色を呈する擾乱土中より出土している。玄門部付近から検出したPo49は、褐色粘質土中 (挿図30、④層) の出土である。

#### 第4項 出土遺物 [挿図32、Po45~49、図版52]

Po45・46は壺である。Po45は体部に円形浮文を付す。Po46は、底部に手持ちヘラケズリを施している。Po47は、高杯である。比較的基部が太く、脚の短い形状である。これらの遺物は形態より概ね7世紀の前半代に位置づけられよう。

Po48は皿である。口縁部は平底の底部よりやや外反気味にたちあがり、端部で丸く納める。底部に回転糸切り痕、内面中央にはヘラ記号?がみられる。時期は、形態より、11世紀前半代に推定される。

Po49はくの字形の口縁部片である。剥離が著しく、時期決定し難い。

これらの遺物は、1号墳に隣接する1号墳丘墓墳頂部、墳丘斜面から出土した遺物と同時期のものも含まれており、1号墳出土遺物が擾乱土中の遺物であることも考慮して、埋葬時の遺物で

ない可能性が十分考えられることを断つておく。

註1 中村治『和泉陶邑窯の研究』柏書房株式会社 1981

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

註2 中野知照『山田窯跡群』郡家町教育委員会 1987

山田12号の遺物と類似し、その年代観より、11世紀前半代とする。

## 第5項 小 結

新井三嶋谷1号墳の調査は、破壊されることなく保存を前提とした発掘調査であったため、腰石の除去は行わずに実施したものである。

調査の結果、横穴式石室を内部主体とした円形墳であったと推定された。石室の石材はその殆どを失っており、腰石のみの遺存であった。石室は両袖型で、玄室は幅広の長方形を成すことが確認できた。石室を構成する石材は比較的小振りなものが用いられているが、鳥取県東部の千代川以東に通有な横穴式石室の構築法とは趣を異にしている。すなわち、鳥取県東部の千代川以東に通有な横穴式石室に見られる腰石の用材は、一抱え大もしくはそれ以上の石材が用いられている。玄室の平面プランを見ても、全長に対する幅の比率が大きいことが知られた。千代川以東に見られる横穴式石室は、概ね狭長な石室が多く見られる傾向にある。特に岩美町内では、小畠古墳群に代表される全長10mを超える狭長な石室が認められている。また、三嶋谷1号墳の立地する丘陵西側の谷部を隔てて位置する新井古墳群中に於いては、柱状節理の石材を用いて竪穴式石室を構築した新井1号墳が見られる。

三嶋谷1号墳に見られる小振りな石材を用いる横穴式石室は少なく、千代川以東では鳥取市円護寺27号墳で確認されたのみである。同27号墳は、石室平面形が羽子板型を呈し横穴式石室としては最も古い形態のものである。また、三嶋谷1号墳と同様、奥壁の腰石に偏平な石材を横置きしていることが確認されている。近年発掘調査がなされた千代川左岸丘陵上に所在する横枕44号墳の横穴式石室は、玄室幅を広くとり寸詰まりの長方形を呈している。使用する石材を見ても、周辺地域の石室用材に比較して概ね小振りなものを用いていた。このような構築法は三嶋谷1号墳に近似した形態である。

三嶋谷1号墳では、後世の改変を受けているため、築造時期を推定しうる副葬遺物の出土が見られなかった。石室内及び周辺部に見られた擾乱土中より須恵器の出土を確認しているが、遺物の年代観は古墳時代終末期の様相を呈している。即ち、7世紀前半代に該当する時期の所産である。しかし、石室の形態から見れば、鳥取市横枕44号墳の如く6世紀後半代の築造と見るのが自然である。6世紀前半代に比定される鳥取市円護寺27号墳とは、石室に用いる石材と構築法に差異が認められ、同27号墳よりも後出するものであると考えられる。<sup>註1</sup>

岩美町内では、このような石室を持つ横穴式石室の存在は確認されておらず、築造時期の推定が困難である。周辺部に於いて出土している遺物の年代観が示しているのは、三嶋谷1号墳の最

終埋葬時期を具現化しているものと考えられる。このように考えれば、三嶋谷1号墳は6世紀後半代に築造が開始されたものと思われる。

註1 報告書未刊。土器の年代観は6世紀末から7世紀初頭の所産と思われる。

註2 『円護寺遺跡群』(財)鳥取県教育文化財団 1983年。

#### 第4節 新井三嶋谷遺跡発掘調査遺構外出土遺物

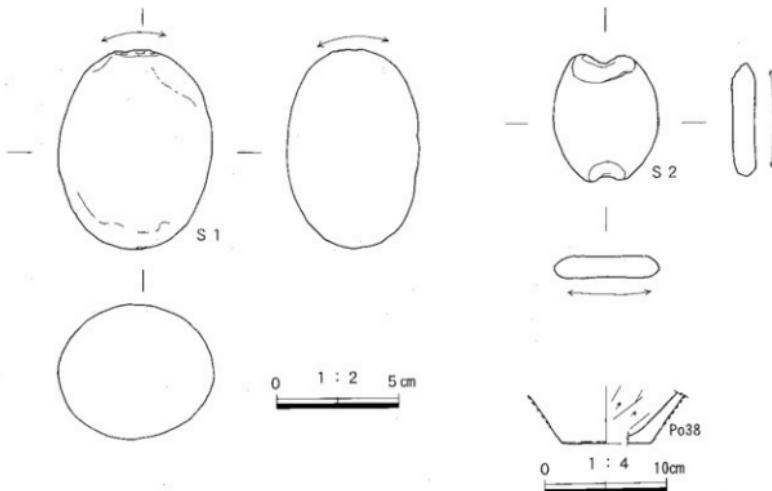
##### 第1項 遺構外出土遺物・1 [挿図33、S 1・2、Po38、図版49]

2号墳丘墓、2号墳丘墓南側表土中より、以下の遺物を検出した。

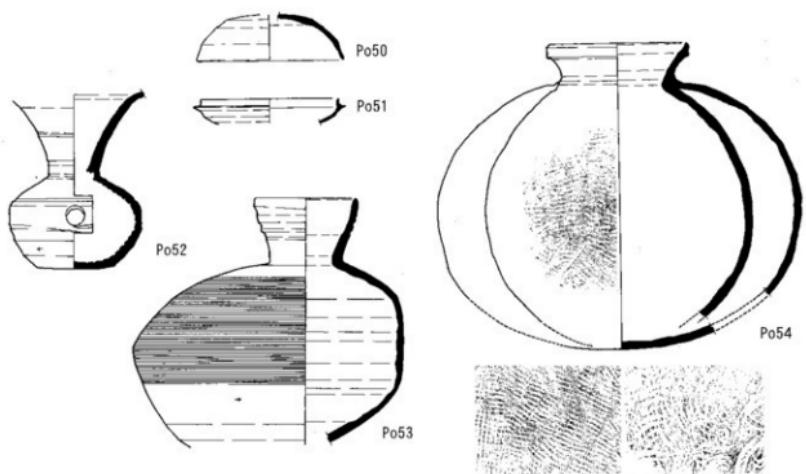
S 1は、叩き石である。全体に赤色顔料が付着している。赤色顔料の成分は微量のため、分析できなかった。石材は花崗岩である。S 2は石英安山岩製の石錘である。Po38は、平底の底部片で、外面ナデ、内面上方向のヘラケズリを施している。弥生時代後期のものと考えられる。

##### 第2項 遺構外出土遺物・2 [挿図34、Po50~59、図版53・54]

1号墳丘墓表土除去中に須恵器・土師器を検出した。出土した地点を、北側斜面・墳頂部・南



挿図33 新井三嶋谷遺跡、遺構外出土遺物実測図(1)



1号填丘墓北側斜面出土



1号填丘墓填顶部出土



1号填丘墓南側填丘裾部出土

0 1 : 4 10cm

插图34 新井三嶋谷遺跡、遺構外出土遺物実測図(2)

側墳丘裾部とで区別している。Po54は北側斜面から出土したものであるが、墳頂部から出土した破片と接合できたこともあり、墳頂部で破損し転落した遺物の可能性が考えられる。

Po50は、天井部から丸く口縁部へと続く杯蓋で、天井部はヘラ切り未調整である。復口径12.0 cmを測る。Po51は杯身である。たちあがりの比較的短いもので、上方へつまみあげ先細り気味に納めている。復口径11.2cmを測る。Po52は、ラッパ状に開く長い口頭を有する瓶である。底部は平坦なつくりである。Po53は、平瓶で、底部は欠損している。Po54、小型の横瓶である。Po55は、甕の扁片である。

Po56は、直口壺の破片である。口頸部は、カキメ後若干のナデを施す。Po57は、高台付きの皿である。口縁部は外反し、端部は丸く納めている。

Po58・59は高台付きの壺である。ともに口縁部を欠損している。

これらの遺物を時期的にみると、Po50・51の杯身、杯蓋は、陶邑編年II型式5段階墳のものと考えられ、7世紀初頭に比定される。Po58・59は7世紀中頃に比定される。Po57は、形態より11世紀代のものと思われる。<sup>註1</sup>

註1 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房株式会社 1981

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

註2 中野知照『山田窯跡群』郡家町教育委員会 1987

## 第4章 考察

### 第1節 新井三嶋谷1号墳丘墓について

#### I) 新井三嶋谷1号墳丘墓の概要

新井三嶋谷1号墳丘墓が所在する新井三嶋谷遺跡は、蒲生川中流域の左岸に立地する北西方向に伸びる低丘陵の先端部に位置する。遺跡は、縄文時代後期の石器工房跡を始め、2基の弥生墳丘墓、土壙墓2基、古墳時代中期の古墳2基と後期の古墳1基で構成される。

遺跡の北端部に位置する2基の墳丘墓は、北側より1号墳丘墓、2号墳丘墓と南北に並列している。1号墳丘墓は、墳丘斜面に貼石を施し一部に列石の存在や、目地を通す特殊な石列が見られた。2号墳丘墓は、古墳時代中期に造られた古墳により墳丘の大半を失っているため墳形と築造時期は不明であるが、1号墳丘墓とほぼ同時期に存在していたものと思われる。

ここで再度1号墳丘墓の概要に触れておきたい。

新井三嶋谷1号墳丘墓は弥生時代後期初頭に造られ、この当時としては最大の規模を持つ方形を基調とした貼石墳丘墓であることが知られた。その規模は、長辺約26.0m（東辺の最大値）、短辺約18m（復元最大値）、高さは最大約3mを測る。墳丘の主軸部分での規模は、長辺約24m、

短辺約17mである。

墳丘の四面の斜面には、亜円礫（角の取れた丸い石）を用いた貼石が施されていた。この貼石は、墳丘斜面の上半と下半では、その大きさを意図的に変えている事が知られた。即ち、上半では主に拳大の亜円礫を埋め込んでいる。下半では人頭大よりやや小振りな亜円礫を埋め込み或いは貼り付けて施している事が知られた。南面貼石の一部では、貼石と共に弧状を描く列石の存在が知られた。この列石は墳丘の裾部には作られておらず、貼石の下端部分より約4分の1あたりの斜面に位置していた。列石は、南面の東側部分に於いて比較的良好に遺存していた。西側では貼石の転落や抜き取りが著しく遺存状況は悪い。その中にあって、西端部分に於いて東側に見られる列石と同レベルで3石が確認できた。この3石の内、西端の石材は、約40度の角度を付けて南方に向けて配置されていることから、これに連続する列石が存在していたことが窺える。

墳丘斜面に施されていた貼石の状況には、新井三嶋谷1号墳丘墓に特有なものが見られた。この特有な貼石は、目地を通した石列を示す。石列は、所謂墳裾部に施したものをしてはいない。この石列は、墳丘斜面の内、北面と東面に見られるものである。

墳丘の東面に於いてはその辺の中央部に見られ、幅約2mの間隔で斜面に対し縦方向に目地を通した石列が認められる。この縦方向に施された目地列の間隙には、4列の横方向に目地を通す石列が認められた。この横方向の石列は傾斜変換点を成し、一見ジグザグ状を呈している。北側の縦方向に目地を通した石列の外側には、青灰色を呈した柱状石（玄武岩）を配している。

また、墳丘北面の中央部では幅約4.5mの範囲で、東面に見られた特殊な石列に共通する部分が認められた。縦方向の目地列は5列以上が認められた。特に中央部東側に位置する2列の石列の間隙には、青灰色を呈した比較的大きめな石材が配置されている。この特殊な貼石は、中央部西側に於いても、縦方向の目地列の間隙に青灰色の柱状石が配置されていた。この青灰色を呈した石材は玄武岩（柱状節理）の亜円礫であり、町内の山陰海岸（城原・鶴ヶ磯海岸他）より産出したものと思われる。縦方向に通した目地列の内、中央部分では横方向の目地列が2～3列確認できた。この横方向に目地を通した石列を傾斜変換点として、斜面に変化を付けているのは東面のそれと共にしている。北面に見られる貼石部分の内東側に於いては、北東隅部に向けた横方向の目地列がやや不明瞭ながら認められた。この目地列は僅かに弧状を描くが、南面に見られる石列と同様、斜面の中程に施されている。

埋葬施設としては、墳頂平坦面に於いて3基の墓壙掘り形を確認した。墳頂平坦面の北側に位置する墓壙を第1主体、主軸を一にするものを第2主体とした。第1・2主体共に墳丘の軸線に對し直交して造られていた。第2主体の東側には、墳丘の主軸に平行して第3主体が造られていた。第1主体墓壙掘り形の規模は、長辺5.6m、短辺5.3mを測る。第2主体墓壙掘り形の規模は、長辺約2.5m、短辺約1.4mを測る。第3主体墓壙掘り形の規模は、長辺4.8m、短辺約2.75mである。それぞれの墓壙に切り合いは見られなかった。

いずれの主体も掘り下げて調査はしていないが、第1主体は墓壙の中心よりやや南側に偏した位置に、木棺腐朽に伴うと見られる黒褐色土の落ち込みが2列確認された。黒褐色土の落ち込み

は並列しており、占有する位置関係から北側のものを北棺、南側のそれを南棺とした。落ち込みからは葬送儀礼に伴う供献土器が検出された。土器は、器台・高杯・壺などで甕等の煮炊具は見られない。

第3主体より出土した器台の年代観は、第1主体とほぼ同時期と考えられる。

## II) 新井三嶋谷1号墳丘墓と弥生時代墳丘墓について

新井三嶋谷1号墳丘墓は、墳丘斜面に貼石を施した貼石墳丘墓であることが知られた。その規模も、弥生時代中期末～後期初頭にかけて造られた墳丘墓の中では最大規模である。平面形の規模が大きいのもさることながら、墳丘の高さが非常に高い（約3m）ことが特徴といえる。<sup>図3</sup> 墳丘の裾部、特に四辺の隅角部分は後世の改変と貼石の欠落により不明瞭であるが、<sup>図4</sup> 墳丘盛土を確認した範囲で見た場合、最大長約26.0m～26.5mを測る。墳丘の南東隅部と北東隅部は、僅かに突出した張り出し部が認められる。

突出状の張り出し部分には、貼石・列石は遺存していなかったが、これは後世の改変或いは石材の流失に伴うものと考えられる。また、張り出し部分は、若干の盛土と地山を削り出して造られていたことが調査により確認できた。南東隅部に於いては、表土除去作業中に長さ約70cmの石材が見られていたが、この石材が隅部処理に配置されていたと思われる。この石材の元位置を見ると、<sup>図5</sup> 突出部の形態は舌状や袋状に広がるものではない。広島県三次市陣山遺跡、殿山墳墓群、<sup>図6</sup> 宗祐池西第1号墓や広島県庄原市田尻山第1号墓、<sup>図7</sup> 或いは島根県伯太町カウカツE-1号墓の様に、隅の突出が僅かなもののような形態であったと思われる。

南側斜面下部に見られる弧状を描く列石は完存していなかったが、南面の斜面東側では良好な状態で原形を保っていた。この列石は、他の墳丘墓に見られるように墳丘裾部を廻らす列石状を呈していないが、隅を意識したもので南東隅に向かってカーブの度合いを強めている。この列石に沿って、南面の墳丘裾部には不明瞭ながら、幅約1.2m～1.3mの距離の間隔を置いて伸びる立石列が認められる。南面西側ではこの立石列は判然としないが、本来は東側と同様裾部を廻っていたものと思われる。斜面中程に配置された列石の下部に見られる貼石は、本来このような立石列を伴うベルト帶（配石列）を成していたものと思われる。

この立石列を伴うベルト帶を成す配石構造は、東面に施されている貼石についても同様の措置といえる。東面に於いては、斜面の如何なる位置にも列石は見られない。しかし、上半部に施した拳大の貼石の下端レベルと南面に見られる列石のレベルが一致している。斜面下半に見られる人頭大よりやや小振りな石材を配置する構造は、南面と相似した形態と考えられる。東面裾部の一部では、やや不明瞭ながら立石が見られるのもベルト帶の裾を意識したものと考えられる。

この墳丘裾部に見られる配石列は、斜面下部の列石とセットを成し、出雲市西谷3号墓等に見られる二重列石の初源形態を表しているものと考えられる。弥生時代後期の中頃には四隅突出型墳丘墓の定着期を迎、墳丘の形態も定型化していく時期に当たる。その前段階に新井三嶋谷墳丘墓の配石構造が存在していたものと考えられる。

また東面と北面に於いて辺の中央部には、現在のところ新井三嶋谷1号墳丘墓のみに見られる

特殊な配石構造が認められる。この配石構造は、他地域に見られる貼石墳丘墓及び四隅突出型墳丘墓を見ても類例はないように思われる。

斜面に対して縦方向に目地を通す石列を施す例としては、広島県庄原市佐田谷第1号墓<sup>112</sup>、鳥取県倉吉市藤和墳丘墓<sup>113</sup>、鳥取県溝口町父原1号墳丘墓<sup>114</sup>、京都府舞鶴市志高墳丘墓<sup>115</sup>等に認められるのみである。上記の墳丘墓に見られる石列は、いずれも縦方向に通した目地を1～3条施ししているのみで、横方向の目地を組み合わせたものではない。その位置を見ても辺の中央部に施されるのは稀で、佐田谷1号墓と藤和墳丘墓の石列がやや中央部寄りに見られるのみである。これらの遺跡に見られる目地を通した石列は、貼石を施す際の施工単位と考えられている。志高墳丘墓では目地を通した石列が階段状を成す事が指摘されている。

新井三鷲谷1号墳丘墓に特有な縦・横方向の石列を組み合わせた配石構造は、他に例がない現状ではその性格は不明であるが、東面・北面に見られる特殊な配石構造部分は、墳丘上の聖域と下界を結ぶための象徴的な墓道であったと考えられる。<sup>116</sup>死者の靈魂は、この象徴的な墓道を通り聖域と下界を行き来したものと考えられる。四隅の対角線上のスロープは、葬送儀礼に伴う墓道であったものと考えられる。聖域に納める棺と、葬送儀礼を執り行う繼承者や参列者は、このスロープを墓道としたものと思われる。また、葬送儀礼に伴う墓道は四隅のスロープを使用し、墳丘頂部で行われたであろう首長繼承儀礼の後、北面の配石構造部分は亡き首長の靈魂のみが通ることを許された墓道と考えられないであろうか。

次に埋葬施設について見てみたい。検出した3基の墓壙は、掘り下げを行っていないため内部構造は不明であるが、墓壙上に見られる陥没坑の大きさから、内部主体は大型の木棺或いは木棺が造られていた可能性が指摘される（第2主体を除く）。第1主体は、その墓壙の大きさが注目される。弥生時代中期末葉から後期初頭にかけて造られた墳丘墓の墓壙としては、北陸以南の日本海側及び中国地方山間部内では最大級である。規模の大きさもさることながら、同一墓壙内に於ける2棺同時埋葬は弥生時代墓制の中で初見例である。墓壙の規模を見てもこの時期、丹後地域の京都府野田川町寺岡遺跡方形貼石墓<sup>117</sup>に於いて大型の墓壙が造られているが、その他の地域には見られない。後期に入ると島根県出雲市西谷3号墓や同県安来市安養寺1号墓<sup>118</sup>の様に大型の墓壙が出現していくが、いずれの墳丘墓を見ても同一墓壙内の2棺同時埋葬は見られない。

### III)まとめ

第1・3主体の墓壙上面には、木棺腐朽に伴う腐植土の落ち込み（陥没坑）が見られ、葬送儀礼に供された供獻土器類が検出された。出土した土器類は、破碎し仮器化されたもので完形品は見られない。従って、供獻された土器は、墓壙上の葬送儀礼に際し破碎供獻されたものと考えられる。

因幡地方に於ける墓壙上の土器供獻行為は、弥生時代後期前半から中葉にかけて鳥取平野周辺部の墳丘墓に認められている。千代川左岸地域では鳥取市布勢・布勢鶴指奥1号墓<sup>119</sup>（貼石墳丘墓）、同右岸地域では鳥取市香取・門上谷1・2号墳丘墓<sup>120</sup>（方形台状墓）が知られている。千代川支流の私都川上流部に於いては、郡家町市場・井毛墳丘墓<sup>121</sup>（貼石墳丘墓）が認められる。

一方、他の地域では、出雲市・西谷3号墓に代表される如く、弥生時代後期中葉段階で墓壙上の土器供獻が認められてくる。丹後地方では弥生時代中期末葉から後期初頭に於ける土器の供獻形態として、墓壙内に於ける土器破碎供獻が盛行する時期に該当し、後期後半まで続いている。

このように墓壙上に於ける土器供獻行為は、弥生時代後期中葉まで出現していない。この中にあって、新井三鶴谷1号墳丘墓では弥生時代後期初頭段階で既に墓壙上の土器破碎供獻が行われていたことになり、因幡地方に於ける「墓壙上土器破碎供獻」形態の初見例となるものである。

(中野)

註1 出土遺物の年代観については、第4章第2節に詳しいのでここではその詳細は省くが、出土した点数は少ないものの中葉段階の要素を持つものが見られることを考慮に入れ、墓壙上の供獻行為は弥生時代中期末葉から後期初頭にかけて継続的に行われていたものと考えたい。

註2 南東部と北東部の隅が僅かに突出していることから、初頭的な形態を示す出現期の四隅突出型墳丘墓と考えている。

註3 註2と同じ。

註4 弥生時代中葉段階から後期初頭にかけて見られる四隅突出型墳丘墓及び貼石墳丘墓の墳丘の高さは、いずれも相対的に低い。その中で比較的高いもので広島県佐田谷1号が指摘されるが、それでも高さは約1.5mである。

註5 越田 正弘『呻山遺跡』三次市教育委員会 1997年

註6 (財)広島県埋蔵文化財調査センター『大判・上淀・殿山』1987年

註7 三次市教育委員会『宗祐池遺跡』1980年

註8 向田 稔始「田尻山古墳群」『中国歴史自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 広島県教育委員会 1978年

註9 伯太町教育委員会『伯太町安田地内試掘調査報告書』1993年

註10 渡辺 貞幸他「西谷墳墓群の調査(I)」

昭和60年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書 技刷 1988年

註11 渡辺 貞幸「四隅突出型墳丘墓研究の諸問題」「四隅突出型墳丘墓とその時代」

第25回 山陰考古学研究集会 1997年

註12 (財)広島県埋蔵文化財調査センター『佐田谷墳墓群』1987年

註13 名越 勉「東伯耆地域の弥生墳墓・墳丘墓」「山陰地方に於ける弥生墳丘墓の研究」島根大学法文学部考古学研究室編 1992年

註14 日本考古学会『日本考古学年報48』 1995年版

註15 肥後 弘幸他「志高遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第12冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年

註16 広瀬 和雄「供獻土器の意義」「墳墓と弥生社会」季刊考古学 第67号 1999年

「…弥生墳丘墓・前方後円墳、首長塚繼承儀礼説をいまいちど検証の俎上にのぼらせるのも、無謀な試みではあるまい。ちなみに、わたくしは初期前方後円墳、ひいては弥生墳丘墓(後期後半頃)は、<亡き首長がカミになって共同体を守護する>ための場である、と考えている。いいかえれば、初期前方後円墳にはカミに昇華した亡き首長が存在していて、現実の首長と二重権力を構成していた、とみなすわけである」…とあり、弥生時代後期段階以降での首長塚繼承儀礼を説いている。新井三鶴谷墳丘墓では、墳丘上に於いて既に弥生時代中期末・後期初頭段階で首長塚繼承儀礼が行われていたと考えている。墳丘の北

面や東面に見られる特殊な石列を伴う配石遺構の存在が、首長靈繼承儀礼を行う上での象徴的な墓道を成したと考えられる。即ち、亡き首長がカミに昇華した後共同体を守護するために、特殊な配石遺構である象徴的な墓道を使用したと考えるわけである。

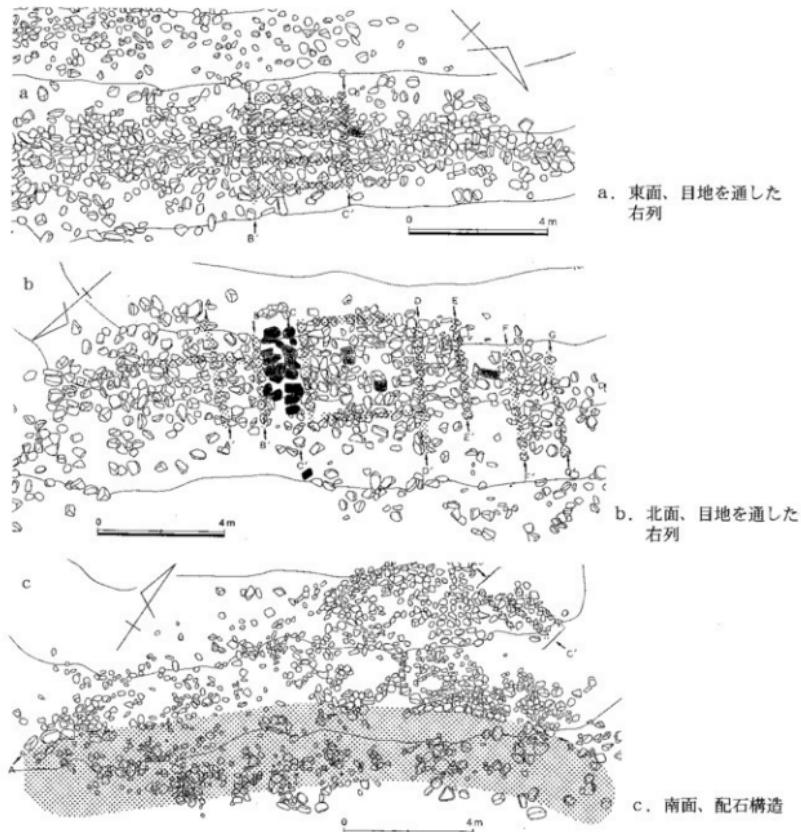
註17 野田川町教育委員会『寺岡遺跡』京都府野田川町文化財調査報告書第2集 1988年

註18 出雲考古学研究会『荒島墳墓群』『古代の出雲を考える』4

註19 (財)鳥取県教育文化財団『東桂見遺跡・布勢鶴指奥墳墓群』1992年

註20 平川 誠『門上谷遺跡』『定型化する古墳以前の墓制』I 墓藏文化財研究会 1988年

註21 中野 知照『郡家町市場所在遺跡試掘調査報告書』郡家町教育委員会 1999年



第4章 第1節付図

## 第2節 新井三嶋谷1号墳丘墓出土遺物について

1号墳丘墓、第1主体・第3主体より、供獻土器・円礫・玉砂利を検出した。これらはいずれも木棺腐朽にともなって落ち込んだ腐植土層（黒褐色土層）から出土したものである。

第1主体は、同時埋葬されたと考えられる北棺・南棺から、壺8、器台16、高杯1、把手1不明器種2の約27個体を確認している。実測できなかったものをあわせると、30数個体程度の土器供獻が行われたものと推測される。器種構成をみると、そのほとんどが器台・壺で占められており、新井三嶋谷1号墳丘墓の特徴を成している。これらの遺物の出土状況は、大小の破片が混在し、完形に復元できるものがなかった。墓壙上面に置かれたというよりも、破碎されて供獻されたといった感を受けた。また、墳丘斜面からの出土がなかったことも考え合わせると、これらの供獻土器は破碎された可能性があると思われる。

第3主体からは、受部を欠損した器台1と、第1主体で検出したのと同様に円礫、玉砂利10数点を検出している。供獻土器の量は少ないものの供獻状況は第1主体と共通する。

墓壙上面に供獻土器がおかれる行為は、因幡地域の特徴としてとらえられ、山陰東部では、1号墳丘墓はその最古例となる。また、土器破碎するという行為は、弥生時代中期から後期にかけて丹後地方を中心見られるが、これらはいずれも墓壙内で破碎されるものである。<sup>註1</sup>一旦、棺に盛土をした後、墓壙上面に破碎された土器が置かれたと考えられる1号墳丘墓とでは祭祀行為の手順に違いがみられることとなる。<sup>註2</sup>

因幡地方では、1号墳丘墓と類似するものとして、弥生時代後期中葉に築造されたと考えられる布勢鶴指奥1号墳丘墓（<sup>註3</sup>附図1、38）があげられる。同じく、墓壙上に土器が供獻されるが「土器はかなり壊れており、完形に復元できたものはない」とし、高杯、器台が多いことを特色としている。また、高杯、器台はそのほとんどが脚部片であること、新井三嶋谷1号墳丘墓と共通する。また、布勢鶴指奥1号墳丘墓の西側に隣接する丘陵上の桂見1号墓〔青木V、VI期〕（<sup>註4</sup>附図1、40）では、「遺物の多くは意図的に破碎された痕跡をとどめる」とし、土器とともに検出された10個あまりの角礫が葬送儀礼に使用された可能性を指摘している。このように、因幡地域の葬送儀礼では墓壙上で土器破碎供獻を行っている可能性があるものがみられ、今後、このような視点での観察が必要であると思われる。

また、1号墳丘墓から出土した円礫、玉砂利は、第1主体・第3主体の他、墳丘斜面およびテラス面からも相当数検出されており、葬送儀礼を考える上で興味深い。円礫が置かれる例は、出雲市西谷3号墓などにみられるが、出土した円礫・玉砂利は、使用痕や朱の付着が見られるようなものではなく、これらの石がどのような性格のものなのかは解らない。

次に、遺物の時期について考えてみたい。これらの遺物は、破片で検出されているため全体を知りうる個体がないうえに、遺存状態が非常に悪く、細かな調整等の観察が不十分である。よって、壺の口縁部、器台脚部の形態を中心に時期決定の目安とした。壺は、口縁端部を肥厚させ、

わずかに内傾する口縁帯に凹線を付すもの（Po30・31）と口縁端部を上下にややつまみ出して、やや内傾、または直立する口縁帯をつくり、そこに凹線を施すもの（Po1・3・18・20?）とがある。Po30・31は古い要素をもつものと考えられる。器台は、形態によって、A、B、Cの3種類に分類した。A類（Po16・17・36）は、大型の器台で、口縁を上下にやや拡張し、内傾した口縁帯に凹線を施し、脚部は、端部に面を有し、ナデ調整するものである。B類（Po8～15）は小型の器台で、脚端部は上下にやや拡張し、凹線を施すものと施さないものがある。C類は中型の器台で、受部、筒部、脚部に鈍い凹線を多用するものである。C類（Po7・25～29・33～35）は、A、B類に比して、鈍い凹線を多用するという点で古い要素をもつものと考えられるが、遺物出土状況から見る限り、これらの土器は混在し、同時に供献されたものとして考えている。

これらの壺、器台の時期は、岩吉編年に準拠するならば<sup>註6</sup>古から新の間に合致し、また、松井編年のV期に相当する。よって三嶋谷1号墳丘墓の時期は、概ね弥生時代後期初頭に該当するものと考えられる。第3主体から検出した器台は、脚端部を下方につまみ出すことによって縁部をなしている。形態的には第1主体のものと若干違いがあるものの、厳密に前後関係を言及できるものではない。よって、第1主体と第2主体との位置関係、ならびに規模より判断し、第1主体の埋葬が終って順次第2主体あるいは、第3主体の埋葬が行われたと推定できよう。

1号墳丘墓周辺からは、弥生時代の遺物の他に、7、8世紀代、11世紀代の遺物を検出している。注目される遺物として、1号墳丘墓東側裾部から、石材・石材チップとともに滑石製模造品（玉）を出土している。7世紀代の須恵器と共に伴し、この時期の滑石製模造品を考える上で良好な資料である。

（松本）

註1 松井廣「山陰東部における後期弥生墓制の展開と兩期」考古学と遺跡の保護—甘粕健先生退官記念論集 1996

因幡地域 表1-③ 弥生墳丘墓一覧をみると、西伯耆・東伯耆の供獻土器は、墳丘上面および斜面・墳丘裾部・溝などから検出されているのに対して、因幡地域では墓壙上で検出される例が8件中6件存在する。最近調査された宍山塚原1号墓と新井三嶋谷墳丘墓をいれると8例目となる。なお、西伯耆・東伯耆の墳丘墓の中には、主体部を未調査、未検出のものが多く含まれるので、供獻土器が墓壙上にないということではないことを断っておく。

参考文献 『宍山塚原平墳墓群』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1999

註2 肥後弘幸「近畿北部（丹後・丹波・但馬）の墓制」『墳墓と弥生社会』季刊考古学67号 1999

墓壙内被置供獻土器は、「まず墓壙を穿ち、墓壙底に木棺を組むか置く行為があり、統いてその内部に遺体を安置し、蓋をしたあとに行われる葬送儀礼行為で、破壊した土器を棺の周囲や蓋板上に置く行為をさす。」としている。

註3 『布勢鶴指奥墳墓群』財団法人 鳥取県教育文化財団 1992

註4 『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1984

註5 『西谷墳墓群の調査』（1）渡辺貞幸他 1988

註6 『岩吉遺跡III』鳥取市教育委員会 1991

註7 松井廣「東の土器・南の土器」『古代吉備』19集 1997

註8 滑石の产地としては、兵庫県日高町付近・岡山県北部地域がある。赤木三郎氏御教示による。

## 新井三崎谷遺跡観察表

☆法量は①口径②器高③底径④脚部径および高台径⑤脚部厚さ⑥厚さ⑦脚部径をcmで示す。

☆法量の記載の中では\*は復元値を、△は残存値を示す。

☆色調は土器の地色を示し、赤色塗装の色とは區別する。

☆焼成は、良・やや不良・不良の三段階に分けた。

表1 新井三崎谷1号墳丘墓、第1主体出土遺物観察表（挿図13・14・15、図版45・46・47・48）

| 遺物番号<br>取上番号                            | 出<br>土<br>地<br>点 | 器<br>種<br>類 | 法<br>量<br>(cm)           | 形態上の特徴   | 手法上の特徴  | 胎<br>土                          | 焼<br>成   | 色<br>調     |
|---|------------------|-------------|--------------------------|--|---|---------------------------------|----------|------------|
| P o 1<br>2 0 3<br>2 0 4                 | 北 檜              | 弥 生<br>壺    | ①8.1*<br>②1.1△           | 口縁片。口縁端部を上下に<br>ややつまみ出す。壺部は丸<br>く納める。                  | (外) 3条の凹線を施す。<br>(内) ヨコナデ。                                | 1mm以下の<br>砂粒を少量<br>含む           | 良        | 褐色         |
| P o 2<br>2 0 4                          | 北 檜              | 弥 生<br>壺    | ②1.6△<br>③4.0*           | 平底の底部片。内湾気味に<br>たちあがる。P o 1と同一個<br>体か。                 | 内外面ナデ。  | 1mm以下の<br>砂粒を含む                 | 良        | 黄褐色        |
| P o 3<br>1 9 6                          | 北 檜              | 弥 生<br>壺    | ①9.0*<br>②1.6△           | 口縁片。口縁端部を上下に<br>ややつまみ出し、端部を丸<br>く納める。                  | (外) 4条の凹線を施す。<br>(内) ヨコナデ。                                | 1mm以下の<br>砂粒を含む                 | 良        | 黄褐色        |
| P o 4<br>3 3                            | 北 檜              | 弥 生<br>底部片  | ②1.2△<br>③5.2*           | 大きく外傾する平底の底部<br>片。                                     | (外) ナデ、黒斑あり。<br>(内) 刺離のため不明。                              | 1mm以下の<br>砂粒を含む                 | 良        | 褐色～黒褐<br>色 |
| P o 5<br>2 1 1                          | 北 檜              | 弥 生<br>底部片  | ②2.1△<br>③5.0*           | 平底の底部片。  | (外) 底部ハケメ、その他のナデ。<br>(内) 刺離のため不明。                         | 1mm以下の<br>砂粒を含む                 | 良        | 明褐色        |
| P o 6<br>2 0 9                          | 北 檜              | 弥 生<br>把手   | ②6.1△<br>③1.4            | 把手片。接合部残存。   | 内外面ヨコナデ。  | 1mm以下の<br>砂粒を含む                 | 良        | にぶい褐色      |
| P o 7<br>2 2                            | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②9.9△                    | 器台の脚部と考えられる。   | (外) クタハケメ後6条の凹線<br>を施す。<br>(内) ヨコハケメ後ナデ。                  | 1～5mm程<br>度の砂粒、<br>角閃石を含む       | やや<br>不良 | 褐色         |
| P o 8<br>2 3 3                          | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②6.5△                    | 器台の脚部片と考えられる。  | (外) 刺離著しく不明。<br>(内) 左方向へのハラケズリ。                           | 1mm程度の<br>砂粒を含む                 | やや<br>不良 | 黄褐色        |
| P o 9<br>3 3                            | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②1.6△<br>④16.0*          | 器台の脚部片と考えられる。<br>口縁端部を上下に拡張する。<br>壺部は丸く納める。刺離が<br>著しい。 | (外) 3条の凹線を施す。<br>(内) 不明。                                  | 1mm程度の<br>砂粒を含む                 | やや<br>不良 | にぶい黄褐<br>色 |
| P o 1 0<br>1 9 8<br>2 0 6               | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②3.0△<br>④15.1*          | 八の字形に開く脚で壺部を<br>やや上下に拡張する。                             | (外) 3条の凹線、他ヨコナデ。<br>(内) 刺離のため不明。                          | 1mm程度の<br>砂粒を含む                 | やや<br>不良 | 明褐色        |
| P o 1 1<br>2 0 3                        | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②2.5△<br>④16.5*<br>(上端部) | 八の字形に開く脚で壺部を<br>上下に拡張する                                | (外) ヨコナデ。<br>(内) ハラケズリか? 刺離のた<br>め不明瞭。                    | 1mm以下の<br>砂粒を含む                 | やや<br>不良 | にぶい褐色      |
| P o 1 2<br>2 0 4                        | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②8.4△<br>④14.8*          | 八の字形に開く脚で壺部は<br>直を持つ。                                  | (外) ヨコナデ。<br>(内) 左方向へのハラケズリ。                              | 1mm程度の<br>砂粒を多く<br>含む           | 良        | にぶい赤褐<br>色 |
| P o 1 3<br>2 3 2                        | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②8.2△<br>④14.0*          | 八の字形に開く脚で壺部は<br>直を持つ。                                  | (外) 壺部に2条の凹線を施す。<br>他ヨコナデ。<br>(内) 左方向へのハラケズリ。             | 1mm程度の<br>砂粒を多く<br>含む           | やや<br>不良 | 浅黄褐色       |
| P o 1 4<br>2 2 8                        | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②2.5△<br>④17.7*<br>(上端部) | 大きいく八の字形に開く脚で、<br>脚端部を上下に拡張する。                         | (外) 3条の凹線を施す。その他<br>ヨコナデ。<br>(内) 刺離のため<br>やや不明瞭。          | 1mm以下の<br>砂粒を微量<br>含む           | やや<br>不良 | にぶい黄褐<br>色 |
| P o 1 5<br>2 0 8                        | 北 檜              | 弥 生<br>器 台  | ②13.2△<br>④21.9*         | 大きいく八の字形に開く脚。<br>脚端部は粘土を貼り付けて<br>成形し、面を成す。             | (外) 3条の凹線を施す。他ヨ<br>コナデ。<br>(内) 壺部はハラケズリ脚はヨ<br>コナデ。        | 1～5mm程<br>度の石英と<br>角閃石を含む       | やや<br>不良 | 黄褐色        |
| P o 1 6<br>9<br>1 9 1<br>2 3 7<br>2 4 4 | 北 檜<br>3トレン<br>チ | 弥 生<br>器 台  | ①33.8*<br>②9.4△          | 大型器台の受部片。器部は<br>上下に拡張し、内輪する口<br>縁帯を形成する。               | (外) 口縁帯に浅い5条の凹線<br>を施す。他クタハケメ<br>後ナデ。<br>(内) ナデ。刺離のため不明瞭。 | 1～3mm程<br>度の砂粒と<br>角閃石を多<br>く含む | 良        | にぶい橙色      |

| 遺物番号<br>取上番号                     | 出土<br>地點      | 器種<br>種類    | 法<br>厘<br>(cm)            | 形態上の特徴  | 手法上の特徴   | 胎<br>土              | 焼<br>成 | 色<br>調       |
|----------------------------------|---------------|-------------|---------------------------|---|--|---------------------|--------|--------------|
| P o 1 7<br>1 9 0                 | 北 檜           | 弥 生<br>器 台  | ②11.0△<br>③29.4*          | 大型器台の脚部片。端部はやや肥厚させ面を持つ。                               | (外)ヨコナデ。<br>(内)ナナメ方向のハケメ後端いナデ。                               | 1~3mm程度の砂粒と角閃石を多く含む | 良      | 明赤褐色         |
| P o 1 8<br>2 2<br>1 6 1<br>2 4 3 | 北 檜<br>南 檜    | 弥 生<br>臺    | ①12.8*<br>②6.7△           | 肩部以下欠損。口縁端部は、上下につまみ出し断面三角形のやや内傾する口縁帯を形成する。            | (外)口縁部に3条の凹線を施した後、3mm幅の竹管文を6個押印する。頭部タテハケメ、後ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。 | 1mm程度の砂粒を含む         | 良      | 黄褐色          |
| P o 1 9<br>2 2 0                 | 南 檜           | 弥 生<br>底部片  | ②1.5△<br>③6.6*            | やや上げ底気味の底部片である。                                       | (外)ナデ。<br>(内)剥離のため不明瞭。                                       | 1mm程度の砂粒を少量含む       | やや不良   | 明赤褐色         |
| P o 2 0<br>9                     | 南 檜           | 弥 生<br>臺    | ①32.0*<br>②3.6△           | 大型の底の口縁部片。上下をやつまみ出し断面三角形の内傾する口縁帯を形成する。                | 内外面剥離のため不明。  | 1mm程度の砂粒を多量に含む      | やや不良   | にぶい黄褐色       |
| P o 2 1<br>2 0                   | 南 檜           | 弥 生<br>底部片  | ②5.2△<br>③8.4*            | 大型の底部片。<br>Po20と同一整体と考えられる。                           | (外)ナデ。<br>(内)剥離のため不明瞭。                                       | 1mm程度の砂粒を多量に含む      | やや不良   | にぶい黄褐色       |
| P o 2 2<br>1 8 0                 | 南 檜           | 弥 生<br>口縁部片 | ①13.0*<br>②1.5△           | 口縁はゆるやかに屈曲し、端部は平たい面を持つ。                               | 内外面ナデ。   | 1mm以下の砂粒を少量含む       | やや不良   | 明赤褐色         |
| P o 2 3<br>7<br>2 1 2<br>2 1 8   | 南 檜           | 弥 生<br>脚部片  | ②2.7△<br>④19.0*           | 脚部端は肥厚させ、面を持つ。  | (外)ナデ。<br>(内)剥離のため不明瞭。                                       | 1mm以下の砂粒を含む         | やや不良   | にぶい橙色        |
| P o 2 4<br>1 8 2<br>2 1 4        | 南 檜           | 弥 生<br>臺 ?  |                           | 剥離が著しく器形は不明だが、蓋の蓋ではないかと思われる。2mm程の孔が2ヶ所にみられる。          | 内外面剥離のため不明。  | 1mm程度の砂粒を含む         | 不良     | にぶい黄褐色       |
| P o 2 5<br>1 8 5                 | 南 檜           | 弥 生<br>器台?  |                           | 復元縦1cm程度の穿孔あり。  | (外)ハケスあり。<br>(内)ヘラケズリか?                                      | 1mm以下の砂粒を含む         | やや不良   | 橙色           |
| P o 2 6<br>1 8 3                 | 南 檜           | 弥 生<br>器 台  | ②25.8*<br>③2.3△           | 円筒形の器台。口縁端部は下方へやつまみ出し、内傾する口縁帯をつくる。                    | (外)1条の凹線を施し、その下方に屈筋文の痕跡あり。<br>(内)数条の凹線を施す。                   | 1~2mm程度の砂粒、角閃石を多く含む | やや不良   | 明赤褐色         |
| P o 2 7<br>9                     | 南 檜           | 弥 生<br>器 台  | ②4.6△<br>⑤12.6*           | 円筒形の器台の脚部片と考えられる。スカシの痕跡が2ヶ所に見られる。                     | (外)タテハケス優数条の凹線文を施す。<br>(内)不明瞭ではあるが横方向の強いナゲスみられる。             | 1~2mm程度の砂粒、角閃石を多く含む | やや不良   | 橙色           |
| P o 2 8<br>1 7 8<br>2 1 6        | 南 檜           | 弥 生<br>器 台  | ②5.2△<br>⑥22.5*           | 円筒形の器台の脚部片と考えられる。端部は指で軽く押さえ、面をなす。                     | (外)3条の凹線を施す。他ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。                               | 1~2mm程度の砂粒、角閃石を多く含む | やや不良   | にぶい褐色<br>~橙色 |
| P o 2 9<br>1 8 6                 | 南 檜           | 弥 生<br>器 台  | ②6.5△<br>④26.0*(<br>上端部)  | 円筒形の器台の脚部片と考えられる。端部は面をなす。                             | (外)にぶい凹線を数条施す。<br>端部にも2条以上の凹線を施す。<br>(内)ヘラケズリか? やや不明瞭。       | 1mm以下の砂粒を含む         | やや不良   | 橙色           |
| P o 3 0<br>3 4                   | 北 檜南西<br>側丘地区 | 弥 生<br>臺    | ①16.5*<br>③3.4△           | 口縁は、逆八の字形に属く頭部から水平に伸び、端部でやや肥厚させる。直径9mmほどの円形浮文を2ヶ所に付す。 | (外)4条の凹線を施す。他ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。                               | 1mm程度の砂粒を多く含む       | 良      | 浅黄褐色         |
| P o 3 1<br>9                     | II地区          | 弥 生<br>臺    | ①25.6*<br>(下端部)<br>②18.0△ | 口縁端部のみ残存。水平に伸び端部でやや肥厚させる。                             | (外)口縁部に浅い凹線を1条施す。他ヨコナデ。<br>(内)剥離のため不明。                       | 1~2mm程度の砂粒、角閃石を含む   | やや不良   | 黄褐色黒斑あり      |

| 遺物番号<br>取上番号   | 出土<br>地<br>点 | 器<br>種<br>類 | 法<br>量<br>(cm)   | 形態上の特徴                                 | 手法上の特徴  | 胎<br>土                           | 焼<br>成   | 色<br>調 |
|----------------|--------------|-------------|------------------|--|---|----------------------------------|----------|--------|
| P o 3 2<br>9   | II地区         | 弥生<br>高杯    | ②8.0△<br>⑦4.7*   | 高杯の柱部片。                                | (外)タテ方向のナデ。<br>(内)ヘラツ工具によるナデ。<br>絞り痕あり。                             | 1mm程度の<br>砂粒を含む                  | やや<br>不良 | 明褐色    |
| P o 3 3<br>2 0 | II地区         | 弥生<br>器台    | ①23.4*<br>②3.7△  | 逆八の字形に開く器台の受<br>部片。端部はやや肥厚せ<br>る。      | (外)口縁帯に1条の凹線を、<br>その下方に縦亜紋を施す。<br>受部はタテハケメ後、凹<br>線を施す。<br>(内)凹線を施す。 | 1~3mm程<br>度の砂粒、<br>角閃石を含<br>む    | やや<br>不良 | 明黄褐色   |
| P o 3 4<br>7   | II地区         | 弥生<br>器台    | ②5.6△<br>④20.8*  | 八の字形に開く脚で、端部<br>は指で押さえ、やや内湾す<br>る面を持つ。 | (外)数条の凹線を施す。<br>(内)剥離のため不明瞭。  | 1~3mm程<br>度の砂粒、<br>角閃石を含<br>む    | やや<br>不良 | 橙色     |
| P o 3 5<br>9   | 3トレン<br>チ    | 弥生<br>器台    | ②11.4△<br>⑤12.0* | 円筒形の器台の筒部片                             | (外)タテハケメ後数条の凹線<br>を施す。<br>(内)剥離のため不明瞭。                              | 1~3mm程<br>度の砂粒、<br>角閃石を多<br>量に含む | やや<br>不良 | 橙色     |
| P o 3 6<br>1 1 | III地区        | 弥生<br>器台    | ②6.6△<br>④30.0*  | 大型器台の脚部片。端部は<br>やや肥厚せ面を持つ。             | (外)ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ、若干ハケメ痕<br>が残る。                                  | 1~3mm程<br>度の砂粒と<br>角閃石を多<br>く含む  | 良        | にぶい橙色  |

表2 新井三崎谷1号墳丘墓、第3主体出土遺物観察表(挿図18、図版48)

| 遺物番号<br>取上番号     | 出土<br>地<br>点 | 器<br>種<br>類 | 法<br>量<br>(cm)   | 形態上の特徴                                   | 手法上の特徴   | 胎<br>土          | 焼<br>成 | 色<br>調 |
|------------------|--------------|-------------|------------------|--|--|-----------------|--------|--------|
| P o 3 7<br>3 6 4 | 第3主体         | 弥生<br>器台    | ②12.0△<br>④16.0* | 器台の脚部片で受部を欠く。<br>脚端部は下垂させ、断面三<br>角形を呈する。 | (外)脚部～脚部にかけてナデ。<br>脚端部は剥離のため不明<br>瞭。<br>(内)筒部左方向へヘラケズ<br>リ。脚部はハケメ、一部<br>ミガキ様の繊い筋が見ら<br>れる。 | 1mm程度の<br>砂粒を含む | 良      | にぶい橙色  |

表3 新井三崎谷遺跡、遺構外出土遺物観察表(1)(挿図33、図版49)

| 遺物番号<br>取上番号   | 出土<br>地<br>点 | 器<br>種<br>類 | 法<br>量<br>(cm) | 形態上の特徴                | 手法上の特徴                    | 胎<br>土                | 焼<br>成 | 色<br>調                |
|----------------|--------------|-------------|----------------|-----------------------|---------------------------|-----------------------|--------|-----------------------|
| P o 3 8<br>1 9 | III地区<br>表土中 | 弥生<br>底部片   | ②4.0△<br>④7.2* | 逆八の字形に直線的に伸び<br>る底部片。 | (外)ナデ。<br>(内)上方方向へのヘラケズリ。 | 1mm程度の<br>砂粒を多く<br>含む | 良      | 褐～黒褐色                 |
| 遺物番号<br>取上番号   | 出土<br>地<br>点 | 種<br>類      | 長<br>さ<br>(cm) | 幅<br>(cm)             | 厚<br>さ<br>(cm)            | 重<br>量<br>(g)         | 石<br>材 | 備<br>考                |
| S 1<br>2 6     | Ⅲ地区<br>表土中   | 敲石          | 8.2            | 6.4                   | 5.6                       | 385.0                 | 花崗岩    | 1力所敲打痕あり。全体に朱が<br>付着。 |
| S 2<br>5       | II地区         | 石鍬          | 4.71           | 4.28                  | 0.9                       | 35.0                  | 石英安山岩  |                       |

表4 新井三崎谷1号墳丘墓、東面裾部出土遺物観察表(挿図22、図版50)

| 遺物番号<br>取上番号              | 出<br>土<br>地<br>点 | 器<br>種<br>類   | 法<br>量<br>(cm)  | 形態上の特徴   | 手法上の特徴                            | 胎<br>土          | 焼<br>成 | 色<br>調 |
|---------------------------|------------------|---------------|-----------------|--|-----------------------------------|-----------------|--------|--------|
| P o 3 9<br>2 9 4          | 東側斜面             | 須恵器<br>杯<br>蓋 | ①12.0*<br>②2.1△ | 杯蓋の口縁部。丸い体部<br>へと統くと思われる。                          | 内外面ヨコナデ。                          | 1mm程度の<br>砂粒を含む | 良      | 灰褐色    |
| P o 4 0<br>2 9 7<br>3 4 1 | 東側斜面             | 須恵器<br>杯<br>蓋 | ①10.8*<br>②2.9△ | 天井部欠損。丸い体部から<br>内湾気味に口縁部へと統く。                      | 内外面ヨコナデ。                          | 1mm程度の<br>砂粒を含む | 良      | 灰褐色    |
| P o 4 1<br>3 3 5          | 東側斜面             | 須恵器<br>杯<br>蓋 | ①14.0*<br>②1.1△ | 体部～天井部にかけて欠損。<br>口縁はやや縦に屈曲させ<br>丸く納める1条の沈線を施<br>す。 | (外)ヨコナデ。<br>(内)左方向へのヘラケズリ後ナ<br>デ。 | 1mm程度の<br>砂粒を含む | 良      | 灰褐色    |

| 遺物番号<br>取上番号     | 出土地点 | 種類<br>種類   | 法量<br>(cm)     | 形態上の特徴   | 手法上の特徴   | 胎土            | 焼成 | 色調  |
|------------------|------|------------|----------------|--|----------|---------------|----|-----|
| P o 4 2<br>2 9 8 | 東側斜面 | 須恵器<br>杯身  | ①11.0<br>②3.7  | 逆八の字形に開く杯部に高台を付す。<br>(外)底部糸切り後末調整、他ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。 |          | 1mm程度の砂粒を含む   | 良  | 灰褐色 |
| P o 4 3<br>3 5 3 | 東側斜面 | 須恵器<br>杯身  | ②2.2△<br>④10.0 | 口縁部欠損、高台付の杯身。<br>(外)底部糸切り後ヨコナデ、他ヨコナデ<br>(内)ヨコナデ。     |          | 1~3mm程度の砂粒を含む | 良  | 灰色  |
| P o 4 4<br>2 6 2 | 東側斜面 | 須恵器<br>直口壺 | ①11.6<br>②5.9△ | 丸い体部から直口する短い口縁部へと続く。                                 | 内外面ヨコナデ。 | 1mm程度の砂粒を含む   | 良  | 灰色  |

表5 新井三嶋谷1号墳丘墓、東面裾部出土石製模造品(玉)観察表(挿図23・24、図版50・51)

| 遺物番号<br>取上番号   | 出土地点          | 種類 | 石材    | 法量(cm)<br>短辺×長辺 | 厚さ<br>(cm) | 穿孔 | 孔径<br>(cm) | 重量(g) | 形態    |
|----------------|---------------|----|-------|-----------------|------------|----|------------|-------|-------|
| S 3<br>2 7 3   | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.3×1.5         | 0.35       | 片面 | 0.18~0.19  | 1.12  | 円形    |
| S 4<br>2 7 4   | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.36            | 0.15~0.31  | 片面 | 0.19       | 0.83  | 円形    |
| S 5<br>2 7 0   | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.36            | 0.35       | 片面 | 0.19~0.22  | 1.31  | 円形    |
| S 6<br>2 7 7   | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.4×1.46        | 0.1~0.36   | 片面 | 0.11       | 1.01  | 円形    |
| S 7<br>3 3 3   | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.4             | 0.3~0.35   | 片面 | 0.18~0.19  | 1.25  | 円形    |
| S 8<br>3 2 1   | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.4×1.58        | 0.24~0.5   | 片面 | 0.2~0.23   | 1.6   | 円形    |
| S 9<br>2 6 0   | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.42            | 0.33       | 片面 | 0.2        | 0.78  | 1/2欠損 |
| S 1 0<br>2 6 4 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.3×1.4         | 0.55~0.6   | 片面 | 0.16~0.19  | 1.87  | 円形    |
| S 1 1<br>2 6 6 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.4×1.6         | 0.3~0.45   | 片面 | 0.16       | 1.75  | 円形    |
| S 1 2<br>2 7 8 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.05×1.2        | 0.24~0.3   | 片面 | 0.16       | 0.70  | 円形    |
| S 1 3<br>2 6 8 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.0×1.2         | 0.3~0.4    | 片面 | 0.12~0.13  | 0.78  | 円形    |
| S 1 4<br>3 1 9 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.1×1.16        | 0.19~0.25  | 片面 | 0.22~0.29  | 0.52  | 円形    |
| S 1 5<br>2 6 5 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 0.85×1.0        | 0.3        | 片面 | 0.12       | 0.42  | 円形    |
| S 1 6<br>2 6 9 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.2             | 0.2~0.45   | 片面 | 0.12       | 0.97  | 円形    |
| S 1 7<br>2 7 2 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.1             | 0.19~0.4   | 片面 | 0.15       | 0.61  | 円形    |
| S 1 8<br>2 5 1 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.3×1.7         | 0.4~0.6    | 片面 | 0.18       | 2.55  | 不整円形  |
| S 1 9<br>2 7 1 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.72            | 0.16~0.37  | 片面 | 0.09~0.16  | 1.19  | 不整円形  |
| S 2 0<br>3 3 1 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 1.1×1.48        | 0.17~0.68  | 両面 | 0.14~0.18  | 1.40  | 不整円形  |
| S 2 1<br>3 2 0 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 0.85×1.35       | 0.25~0.3   | 両面 | 0.18~0.26  | 0.54  | 不整円形  |
| S 2 2<br>2 7 6 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 0.55×0.8        | 0.25~0.3   | 片面 | 0.16       | 0.56  | 五角形   |
| S 2 3<br>2 7 5 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 0.8×0.9         | 0.3~0.35   | 片面 | 0.22       | 0.59  | 四角形   |
| S 2 4<br>2 5 3 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | 滑石    | 0.95×1.4        | 0.3~0.35   | 片面 | 0.17       | 1.22  | 長方形   |
| S 2 5<br>3 3 6 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉  | クロム雲母 | 1.7×1.8         | 0.3~0.6    | 両面 | 0.1        | 1.96  | 不定形   |

| 遺物番号<br>取上番号   | 出土地点          | 種類       | 石材         | 法量(cm)<br>短辺×長辺 | 厚さ<br>(cm) | 穿孔                                       | 孔径<br>(cm) | 量<br>(g) | 形態      |
|----------------|---------------|----------|------------|-----------------|------------|--|------------|----------|---------|
| S 2 6<br>2 8 8 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | クロ一<br>ム雲母 | 1.2×1.9         | 0.4~0.7    | 両面                                       | 0.18~0.19  | 1.04     | 不定形     |
| S 2 7<br>3 2 2 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | クロ一<br>ム雲母 | 1.4×1.9         | 0.3~0.4    | 両面                                       | 0.16       | 0.7      | 不定形     |
| S 2 8<br>2 6 7 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | 滑石         | 0.8             | 0.9        | 片面                                       |            | 0.51     | 方形か? 欠損 |
| S 2 9<br>3 3 9 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | 滑石         | 1.29            | 0.45       |  |            | 0.50     | 1/2 欠損  |
| S 3 0<br>2 9 9 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | 滑石         | 1.48            | 0.24~0.41  |  |            | 0.87     | 欠損      |
| S 3 1<br>3 3 0 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | 滑石         | 1.3×1.4         | 1.0        | 片面<br>?                                  | 0.22~0.24  | 1.83     | 欠損      |
| S 3 2<br>2 9 1 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | 滑石         | 1.42            | 0.26       |  |            | 0.45     | 1/2 欠損  |
| S 3 3<br>2 5 4 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉        | 滑石         | 0.55×1.3        | 0.2~0.3    |  |            | 0.31     | 欠損      |
| S 3 4<br>2 5 2 | 1号墳丘墓<br>東側斜面 | 玉或石<br>? |            | 5.6×7.3         | 1.8        | 幅0.6cm、長さ6cm、深さ0.25cmの溝状の使用痕あり。<br>玉或石か? |            |          |         |

表6 新井三崎谷1号墳出土遺物観察表(挿図32、図版52)

| 遺物番号<br>取上番号              | 出 土<br>地 点 | 器種<br>種類   | 法 量<br>(cm)     | 形態上の特徴  | 手法上の特徴   | 胎 土                   | 焼 成  | 色 調   |
|---------------------------|------------|------------|-----------------|---|--|-----------------------|------|-------|
| P o 4 5<br>2 5 5<br>3 4 6 | 玄室内        | 須恵器蓋       | ②6.6△<br>⑤13.3* | やや丸みを帯びた底部より<br>球形の体部へと続く直径1<br>cmほどの円形浮文を付す。           | (外)左底方向へのヘラケズ<br>リ、他ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。                            | 1mm以下の<br>砂粒を含む       | 良    | 灰褐色   |
| P o 4 6<br>3 4 3<br>3 4 8 | 玄室内        | 須恵器蓋       | ②9.8△<br>⑤21.7* | やや丸みを帯びた底部より<br>球形の体部へと続く。                              | (外)体部斜め方向のタクキ後<br>ナデ。底部左方向へ手持ちヘ<br>ラケズリ<br>(内)体部ヨコナデ、底部不整<br>ナデ。 | 1~3mm程<br>度の砂粒を<br>含む | 良    | 灰褐色   |
| P o 4 7<br>3 4 5          | 玄室内        | 須恵器低<br>脚杯 | ②6.5△<br>④9.8*  | 脚部片。内面に段をなす。  | 内外面ヨコナデ。   | 1~3mm程<br>度の砂粒を<br>含む | 良    | 灰~青灰色 |
| P o 4 8<br>2 5 4<br>3 4 2 | 玄室内        | 須恵器皿       | ②15.6*<br>③0.0△ | 偏平な底部より逆八の字形<br>に聞く且て、端部はやや外<br>反気形に伸び丸く納める。<br>ヘラ記号あり。 | (外)底部回転糸切り後未調整、<br>他ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。                            | 1~3mm程<br>度の砂粒を<br>含む | やや不良 | 灰色    |
| P o 4 9<br>3 5 9          | 玄室入口       | 土師器盤       | ①26.0*<br>②4.2△ | くの字形の口縁片。剥離が<br>著しい。                                    | 内外面ヨコナデ。   | 1~2mm程<br>度の砂粒を<br>含む | 良    | 淡黄褐色  |

表7 新井三崎谷遺跡、遺構外出土遺物観察表(2)(挿図34、図版53・54)

| 遺物番号<br>取上番号   | 出 土<br>地 点        | 器種<br>種類  | 法 量<br>(cm)     | 形態上の特徴   | 手法上の特徴                                      | 胎 土                   | 焼 成 | 色 調            |
|----------------|-------------------|-----------|-----------------|--|---|-----------------------|-----|----------------|
| P o 5 0<br>3 2 | 1号墳丘<br>墓北側斜<br>面 | 須恵器杯<br>蓋 | ①12.0*<br>②3.8△ | 天井部から丸く口縁部へと<br>続く。先端部で先鋒り、端<br>部は丸く崩れる。   | (外)天井部ヘラ切り後未調整、<br>工具痕あり。他ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。 | 1~3mm程<br>度の砂粒を<br>含む | 良   | 灰褐色~暗青<br>灰色   |
| P o 5 1<br>3 2 | 1号墳丘<br>墓北側斜<br>面 | 須恵器杯<br>身 | ①11.2*<br>②2.1△ | 底部欠損。たちあがりの比<br>較的若いもので上方へつま<br>みあげる。高さが低く、器<br>壁が薄い。                                | 内外面ヨコナデ。                                    | 1~3mm程<br>度の砂粒を<br>含む | やや軟 | オリーブ灰<br>~淡黄灰色 |
| P o 5 2<br>2 9 | 1号墳丘<br>墓北側斜<br>面 | 須恵器盤      | ②14.6△<br>⑩.8   | ラッパ状に聞く長い口縁を<br>有する。口縁部は欠損。体<br>部は球形を呈し、底部は平<br>坦である。体部中央に2条、<br>口頭部に3条の浅い沈線を<br>施す。 | (外)体部1/3以下左方向のヘ<br>ラケズリ。他ヨコナデ。<br>(内)ヨコナデ。  | 1~3mm程<br>度の砂粒を<br>含む | 良   | 灰色             |

| 遺物番号<br>取上番号                      | 出土<br>地<br>点                | 器<br>種<br>類 | 法<br>量<br>(cm)                      | 形態上の特徴  | 手法上の特徴   | 胎<br>土                  | 焼<br>成 | 色<br>調              |
|-----------------------------------|-----------------------------|-------------|-------------------------------------|---|--|-------------------------|--------|---------------------|
| P o 5 3<br>3 2                    | 1号墳丘<br>墓北側斜<br>面           | 須恵器<br>平 瓶  | ①8. 3<br>②20. 4△<br>⑤22. 1          | 口縁部はやや内湾気味に開<br>き、肩部は丸く納める。2<br>条の沈鈕を施す。体部は丸<br>く、中位で幅が最大となる。 | (外) 口縁部ヨコナデ体部右方<br>向のヘラケズリ後、上半<br>はカキメ、若干のナデ。<br>(内) ヨコナデ。                         | 1～4mm程<br>度の砂粒を<br>多く含む | 良      | 灰色～青灰<br>色          |
| P o 5 4<br>2<br>1 6<br>3 1<br>3 2 | 1号墳丘<br>墓北側斜<br>面および<br>墳頂部 | 須恵器<br>横 瓶  | ①11. 2<br>②25. 0<br>⑥29. 9<br>21. 8 | 小型の横瓶。口縁部は段を<br>なし、肩部はやや先鋒り氣<br>味に納める。                        | (外) 口縁部ヨコナデ体部平行<br>タク半後側面を中心に凹<br>凸カキメ調整<br>(内) 青海波タクキ。                            | 1～5mm程<br>度の砂粒を<br>多く含む | 良      | 灰褐色                 |
| P o 5 5<br>3 0                    | 1号墳丘<br>墓北側斜<br>面           | 土師器<br>甌    | 周長7. 5cm                            | 肩部削。腹本体に粘土を貼<br>り付け、肩部を作る。肩部<br>に粘土巻ぎ呈し痕あり。                   | (内外面) ハケ状工具による横<br>方向のナデ。<br>腹本体に荒いハケメあり。  | 1～8mm程<br>度の砂粒を<br>多く含む | 良      | 橙色                  |
| P o 5 6<br>1 5                    | 1号墳丘<br>墓墳頂部                | 須恵器<br>直口壺  | ②3. 8△                              | 口縁部、体部欠損。直口壺<br>の破片と考えられる。                                    | (外) 口縁部カキメ後若干のナ<br>デ。他ヨコナデ。<br>(内) ヨコナデ。   | 1～3mm程<br>度の砂粒を<br>含む   | 良      | 暗青灰～灰<br>黄色         |
| P o 5 7<br>1 3                    | 1号墳丘<br>墓墳頂部                | 須恵器<br>皿    | ①13. 4*<br>②1. 6△                   | 高台付の皿。口縁部は大き<br>く外反し、肩部を丸く納める。                                | 内外面ヨコナデ。   | 1mm以下の<br>細砂を含む         | やや不良   | 浅黄～灰白               |
| P o 5 8<br>1 3                    | 1号墳丘<br>墓南側テ<br>ラス面         | 須恵器<br>壺    | ②12. 5△<br>④10. 5<br>⑤19. 3         | 口縫部欠損。肩部が強る高<br>台付の壺。   | (外) 体部1/3以上ヨコナデ。<br>2/3以下右方向のヘラケ<br>ズリ、下半ヘルケズリ後<br>ナデ。底部ヘルケズリ後<br>ナデ。<br>(内) ヨコナデ。 | 1mm程度の<br>砂粒を含む         | 良      | 灰色～灰黃<br>色          |
| P o 5 9<br>1 3                    | 1号墳丘<br>墓南側テ<br>ラス面         | 須恵器<br>壺    | ②14. 5△<br>④11. 0<br>⑤20. 8         | 口縫部欠損。丸い体部で、<br>中位よりやや上に最大径が<br>ある。高台付の壺。                     | (外) 体部下方、高台部分はヨ<br>コナデ。他カキメ。<br>(内) 底部不整ナデ。他ヨコナ<br>デ。                              | 1mm程度の<br>砂粒を微量<br>含む   | 良      | 灰黃～褐灰<br>色<br>自然剥付着 |

表 8 鳥取県東部弥生時代遺跡一覧表

| 遺跡名 |          | 市町村         | 備考           | 時期    |
|-----|----------|-------------|--------------|-------|
| 1   | 新井三崎谷遺跡  | 岩美町新井       | 墳墓群、貼石墳丘墓    | 後期初頭  |
| 2   | 新井遺跡     | 新井          | 集落跡          | 中期～後期 |
| 3   | 上屋敷遺跡    | 新井          | 銅鐸出土地        | 中期    |
| 4   | 新井墳墓群    | 新井          | 墳墓群          | 後期    |
| 5   | 本庄墳墓群    | 本庄          | 貼石墳丘墓        | 〃     |
| 6   | 大谷遺跡     | 大谷          | 遺物散布地、祭祀遺跡   | 後期    |
| 7   | 福石遺跡     | 岩常          | 〃            | 〃     |
| 8   | 上ミツ工遺跡   | 岩常          | 住居跡          | 〃     |
| 9   | 上太夫谷遺跡   | 岩常          | 住居跡、木棺墓群     | 〃     |
| 10  | 直浪遺跡     | 福部村西海土      | 集落跡          | 中期～後期 |
| 11  | 栗谷遺跡     | 栗谷          | 遺物散布地        | 〃     |
| 12  | 上野遺跡     | 上野          | 集落跡、遺物散布地    | 〃     |
| 13  | 龍山猿懸平墳墓群 | 鳥取市瀧山       | 墳墓群          | 後期    |
| 14  | 津ノ井宇彌遺跡  | 余戸          | 住居跡          | 〃     |
| 15  | 余戸遺跡     | 余戸          | 小銅鐸出土地       | 〃     |
| 16  | 津ノ井生山池遺跡 | 生山、紙子谷、香取他  | 住居跡          | 〃     |
| 17  | 門上谷墳墓群   | 香取          | 墳丘墓群         | 〃     |
| 18  | 越路遺跡     | 越路          | 銅鐸出土地        | 中期    |
| 19  | 久末・古郡家遺跡 | 伊勢谷、加納林、六部山 | 住居跡          | 中期～後期 |
| 20  | 立川遺跡     | 立川          | 集落跡          | 中期    |
| 21  | 東品治遺跡    | 東品治         | 〃            | 後期    |
| 22  | 富安遺跡     | 富安          | 〃            | 〃     |
| 23  | 古市遺跡     | 古市          | 〃            | 中期～後期 |
| 24  | 追後遺跡     | 浜坂鳥取丘丘      | 遺物散布地、集落跡    | 後期    |
| 25  | 長者ヶ庭遺跡   | 〃           | 〃            | 〃     |
| 26  | 柄木山遺跡    | 浜坂          | 〃            | 〃     |
| 27  | 秋里遺跡     | 秋里          | 集落跡、祭祀遺跡、玉作  | 後期    |
| 28  | 古海遺跡     | 古海          | 遺物散布地        | 〃     |
| 29  | 山ヶ鼻遺跡    | 古海          | 〃            | 中期～後期 |
| 30  | 服部遺跡     | 服部          | 〃            | 〃     |
| 31  | 服部墳墓群    | 服部          | 墳丘墓          | 後期    |
| 32  | 西大路遺跡    | 西大路         | 集落跡          | 前期～後期 |
| 33  | 岩吉遺跡     | 岩吉          | 〃、玉作         | 中期～後期 |
| 34  | 湖山第2遺跡   | 湖山、鳥取大学構内   | 〃            | 中期～後期 |
| 35  | 布勢天神山遺跡  | 布勢          | 遺物散布地、銅鏡他    | 後期    |
| 36  | 柄城遺跡     | 布勢          | 集落跡、銅鏡片、玉作工房 | 後期    |
| 37  | 布勢第2遺跡   | 布勢          | 集落跡、玉作工房     | 中期～後期 |
| 38  | 布勢鶴指吳遺跡  | 布勢          | 墳丘墓          | 後期    |
| 39  | 東桂見遺跡    | 桂見          | 住居跡          | 〃     |
| 40  | 桂見墳墓群    | 鳥取市桂見       | 墳墓群          | 後期    |
| 41  | 桂見遺跡     | 桂見          | 遺物散布地        | 前期～後期 |
| 42  | 西桂見遺跡    | 西桂見         | 墳墓群、四隅突出型墳丘墓 | 後期    |
| 43  | 大塙遺跡     | 大塙          | 集落跡、木棺墓群     | 〃     |
| 44  | 野坂遺跡     | 野坂          | 遺物散布地        | 〃     |

| 遺跡名              | 市町村     | 備考       | 時期    |
|------------------|---------|----------|-------|
| 45 下段遺跡          | 鳥取市下段   | 遺物散布地    | 後期    |
| 46 高住遺跡          | 〃 高住    | 銅鐸出土地    | 中期    |
| 47 塞ノ谷遺跡         | 〃 良田    | 祭祀遺跡     | 中期～後期 |
| 48 青島遺跡          | 〃 青島    | 遺物散布地    | 前期～後期 |
| 49 岩本第2遺跡        | 〃 金沢    | 住居跡      | 後期    |
| 50 松原谷田遺跡        | 〃 松原    | 〃        | 〃     |
| 51 身千山遺跡         | 〃 白兔    | 遺物散布地    | 〃     |
| 52 安田遺跡          | 国府町中郷   | 住居跡      | 中期～後期 |
| 53 国分寺遺跡         | 〃 国分寺   | 〃        | 〃     |
| 54 法華寺遺跡         | 〃 法花寺   | 遺物散布地    | 〃     |
| 55 前田遺跡          | 〃 糸谷    | 〃        | 〃     |
| 56 糸谷墳墓群         | 〃 糸谷    | 墳丘墓      | 終末期   |
| 57 地蔵前遺跡         | 〃 玉鉢    | 遺物散布地    | 後期    |
| 58 峰寺遺跡          | 都家町峰寺   | 遺物散布地    | 〃     |
| 59 花原遺跡          | 〃 花原    | 〃        | 〃     |
| 60 井毛墳墓群         | 〃 市場    | 墳墓群、墳丘墓  | 〃     |
| 61 東塊平遺跡         | 〃 下坂    | 銅鐸出土地    | 中期    |
| 62 下坂墳墓群         | 〃 下坂    | 墳丘墓      | 後期    |
| 63 万代寺遺跡         | 〃 万代寺   | 住居跡、木棺墓群 | 〃     |
| 64 破岩遺跡          | 船洞町破岩   | 銅鐸出土地    | 中期    |
| 65 丸山遺跡          | 〃 坂田    | 住居跡、木棺墓群 | 後期    |
| 66 奈免羅・西の前遺跡     | 〃 下瀧    | 遺物散布地    | 〃     |
| 67 八東中学校遺跡       | 八東町富松   | 〃        | 〃     |
| 68 前田遺跡          | 河原町郷原   | 〃        | 〃     |
| 69 上土居遺跡         | 〃 今在家   | 〃        | 〃     |
| 70 麻狩遺跡          | 用瀬町麻狩   | 〃        | 〃     |
| 71 余井・美成<br>余井遺跡 | 〃 余井、美成 | 〃        | 〃     |
| 72 別府字小谷所在遺跡     | 〃 別府    | 弥生墳墓     | 〃     |
| 73 美沢見第1・2遺跡     | 氣高町奥沢見  | 遺物散布地    | 〃     |
| 74 宝木高紙遺跡        | 〃 宝木    | 〃        | 〃     |
| 75 短尾遺跡          | 〃 浜村    | 〃        | 中期～後期 |
| 76 八束水遺跡         | 〃 八束水   | 〃        | 後期    |
| 77 会下郡家遺跡        | 〃 会下、郡家 | 集落跡      | 〃     |
| 78 上原南遺跡         | 〃 上原    | 〃        | 〃     |
| 79 下光元第1・2遺跡     | 氣高町下光元  | 遺物散布地    | 後期    |
| 80 梶約目遺跡         | 鹿野町鹿野   | 住居跡      | 〃     |
| 81 寺内京南遺跡        | 〃 今市    | 〃        | 〃     |
| 82 寺内癪遺跡         | 〃 今市    | 住居跡      | 後期    |
| 83 青谷上寺地遺跡       | 青谷町青谷   | 祭祀・集落    | 中期～後期 |
| 84 青谷第1遺跡        | 〃 青谷    | 遺物散布地    | 後期    |
| 85 カヤマ遺跡         | 〃 大坪    | 住居跡      | 〃     |
| 86 大口遺跡          | 〃 大坪    | 〃        | 〃     |
| 87 藏内遺跡          | 〃 蔵内    | 〃        | 〃     |
| 88 早牛遺跡          | 〃 早牛    | 〃        | 〃     |

報 告 書 抄 錄

| ふりがな          | にいみしまだにふんきゅうばはっくつちょうさほうこくしょ           |      |   |  |                                 |                      |   |               |
|---------------|---------------------------------------|------|---|--|---------------------------------|----------------------|---|---------------|
| 書名            | 新井三鷗谷墳丘墓発掘調査報告書                       |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| 副書名           |                                       |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| 卷次            |                                       |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| シリーズ名         | 岩美町文化財発掘調査報告書                         |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| シリーズ番号        | 第22集                                  |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| 編著者名          | 中野 知照、松本 美佐子                          |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| 編集機関          | 岩美町教育委員会                              |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| 所在地           | 〒681-0003 島取県岩美郡岩美町大字浦富675番地1         |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| 発行年月日         | 2001.3.26                             |      |   |  |                                 |                      |   |               |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地                           | コード  |   | 北緯   | 東経                              | 調査期間                 | 調査面積<br>m <sup>2</sup>  | 調査原因          |
|               |                                       | 市町村  | 遺跡番号  | °' "   | °' "                            |                      |   |               |
| 新井三鷗谷<br>墳丘墓  | 鳥取県岩美郡岩美<br>町新井字長道路41<br>8-1、三鷗谷419-2 |      |   | 35°<br>33°<br>38°  | 134°<br>20°<br>19°              | 20000601<br>20010228 | 350m <sup>2</sup>   | 復元整備事業に伴う発掘調査 |
|               |                                       |      |   | 第2調<br>査区<br>35度<br>30分<br>36秒   | 第2調<br>査区<br>134度<br>18分<br>23秒 |                      |   |               |
| 所収遺跡名         | 種別                                    | 主な時代 | 主な遺構  | 主な遺物   |                                 | 特記事項                 |   |               |
| 新井三鷗谷<br>墳丘墓  | 墳丘墓                                   | 弥生時代 | 貼石墳丘墓<br>墳丘墓<br>横穴式石室<br>ピット群<br>玉作工房<br>墓道状遺構<br>岩盤露呈部 | 弥生土器・器台<br>高杯<br>壺<br>須恵器・杯蓋<br>杯身<br>直口壺<br>高杯<br>皿<br>壺<br>土師器・甕<br>石製品・玉<br>未製品<br>石材 |                                 |                      | 1号墳丘墓は、弥生時代後期初頭の築造で、その規模は当時としては最大の規模を持つものであることが知られた。貼石には、石列や目地を有する部分が認められた。墓壙も大きく、第1主体は2棺同時埋葬である。 |               |

---

# 図 版 編

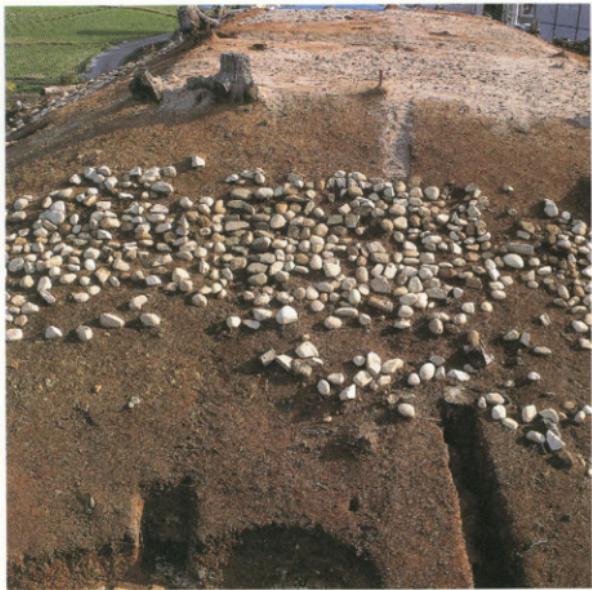
---



新井三崎谷地区全景（北西より）



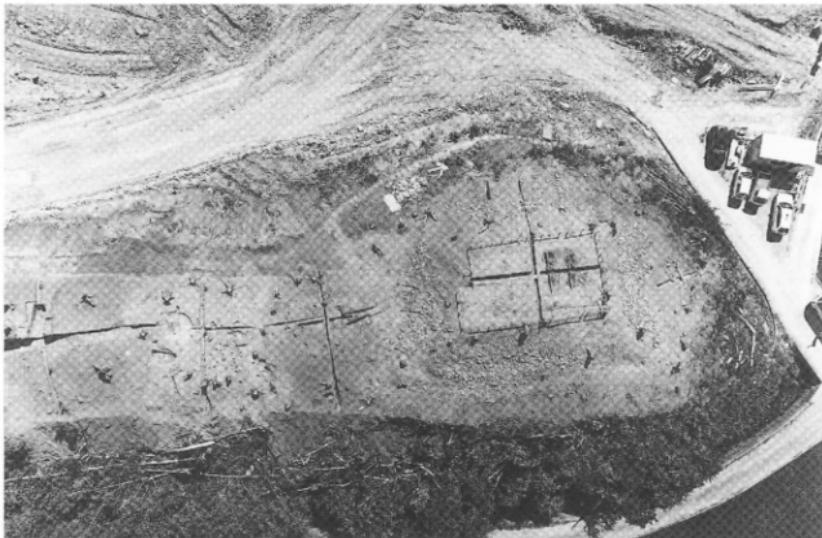
1号墳丘墓  
(南東上空より)



1号墳丘墓  
北面貼石状況  
(北西より)

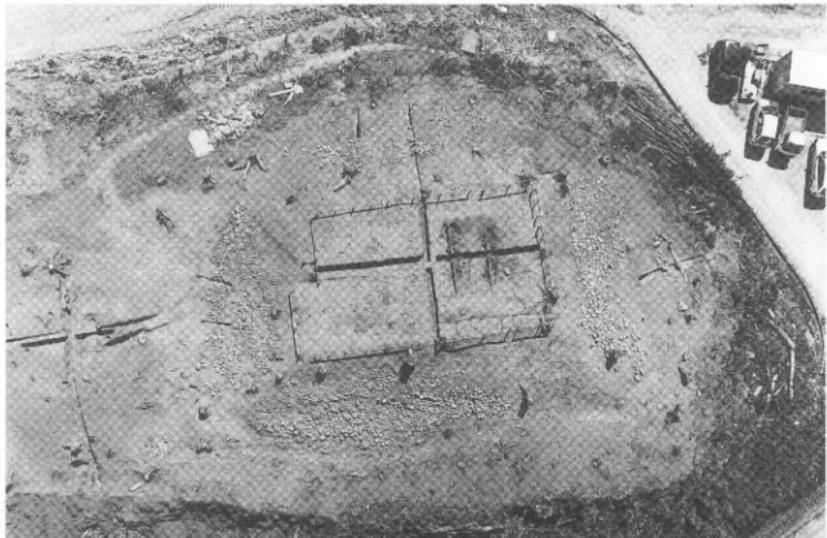


1号墳丘墓（北東より）



新井三嶋谷地区全景（北東上空より）

図版 2



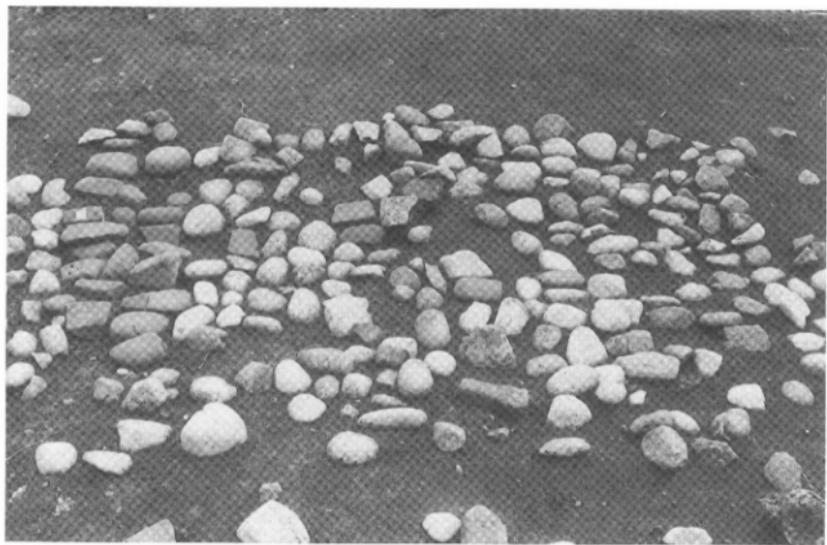
1号墳丘墓（北東上空より）



1号墳丘墓（東面）

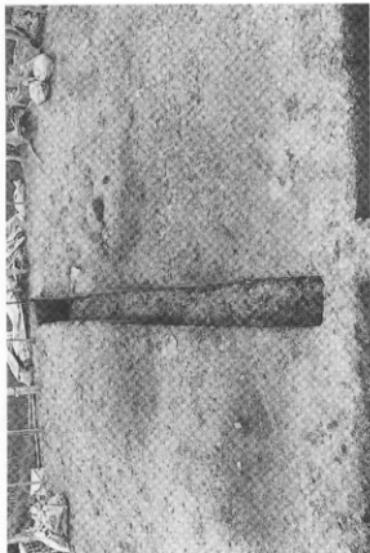


1号填丘墓（北面）

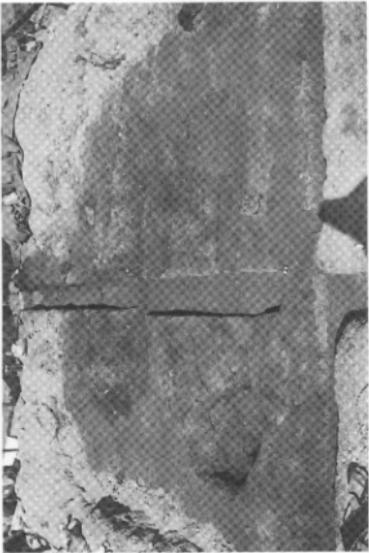


1号填丘墓（北面贴石）

図版 4



②北棺・南棺黒褐色土検出状況（南東より）



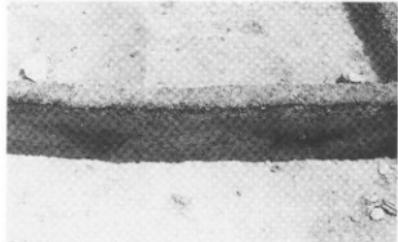
④北棺・南棺黒褐色土完掘状況（南東より）



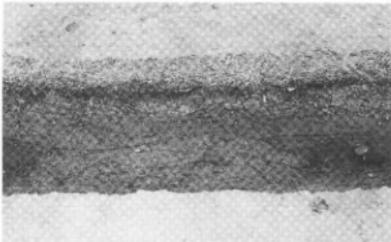
①北棺・南棺黒褐色土層断面（西より）



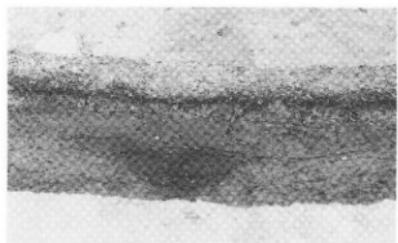
③北棺・南棺黒褐色土完掘状況（東より）



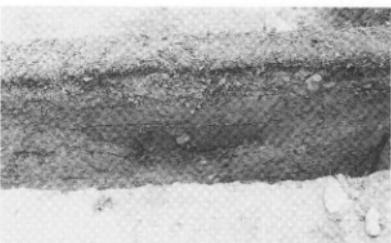
①北棺·南棺黑褐色土土层断面



②北棺·南棺黑褐色土土层断面



③北棺·南棺黑褐色土土层断面



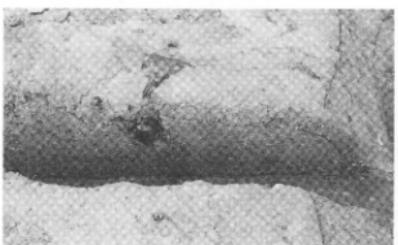
④北棺·南棺黑褐色土土层断面



⑤北棺·南棺黑褐色土完掘状况



⑥第1主体掘り形土層断面

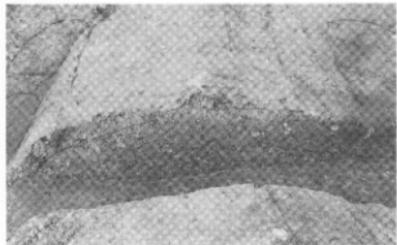


⑦第1主体土層断面



⑧北棺黑褐色土完掘状况

图版 6



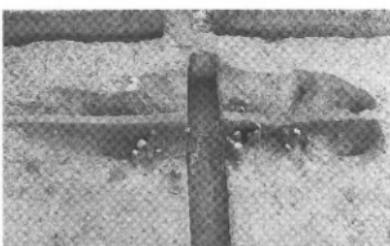
①第1主体土层断面



②第1主体土层断面



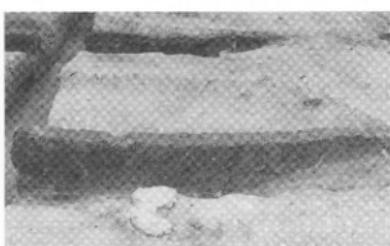
③第1主体土层断面



④南棺遗物检出状况



⑤南棺黑褐色土土层断面



⑥南棺黑褐色土土层断面

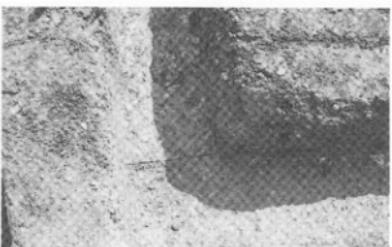
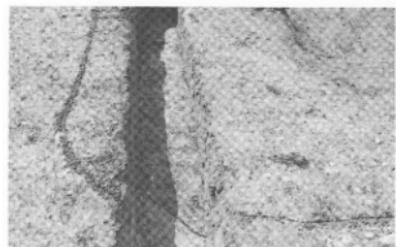
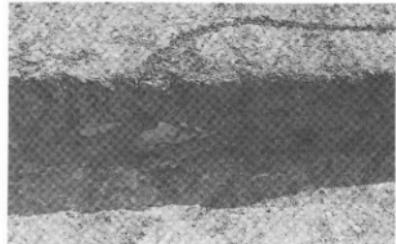


⑦北棺遗物出土状况



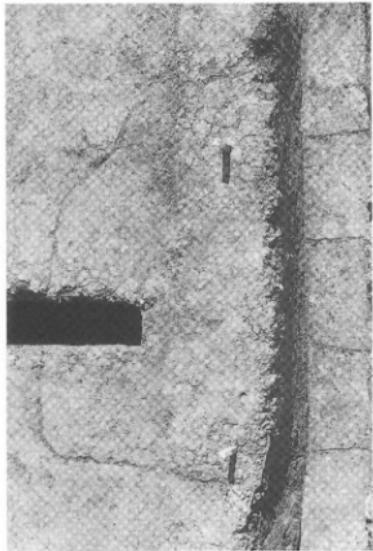
⑧北棺遗物出土状况

図版 7

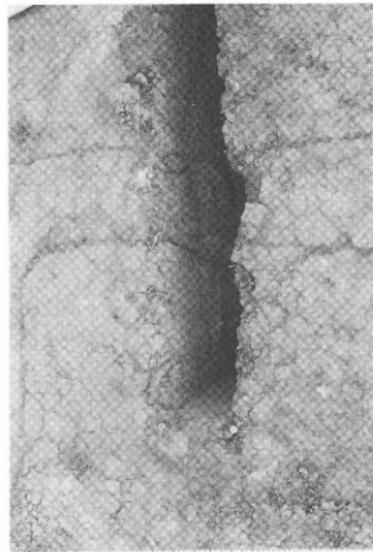


第 1 主体掘り形検出状況

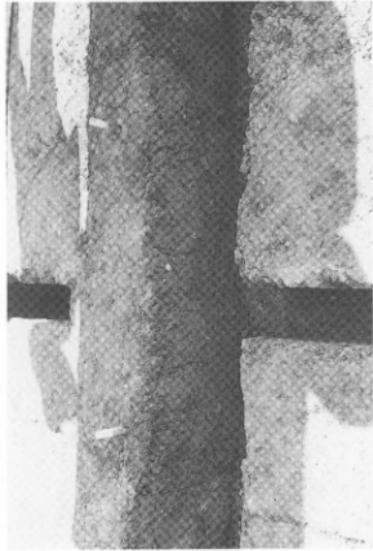
図版 8



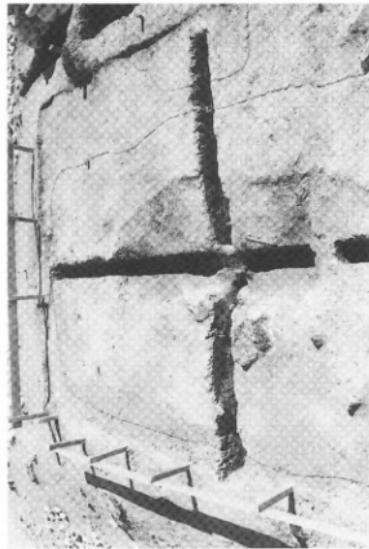
①第2主体検出状況（北西より）



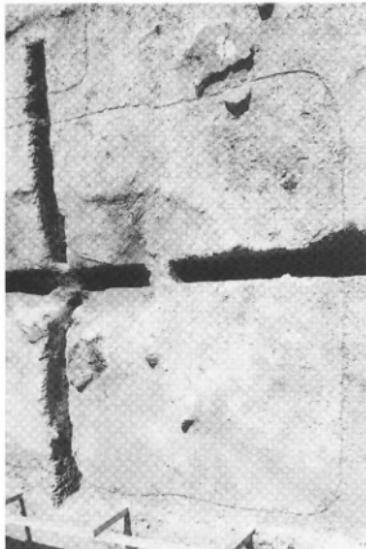
③第2主体・第3主体検出状況（南東より）



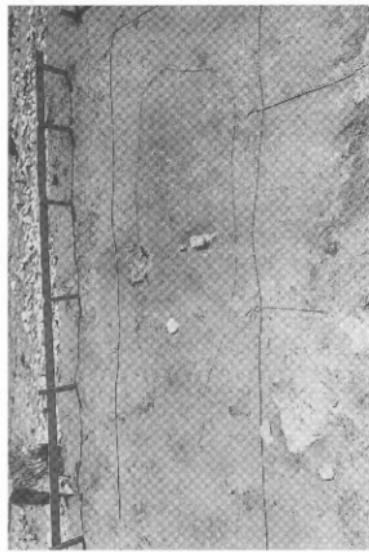
④第2主体土層断面（南西より）



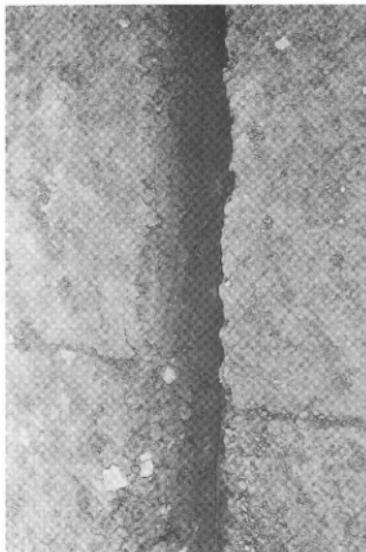
②第3主体黒褐色土完掘状況（北西より）



④第3主体黒褐色土完掘状況（北西より）

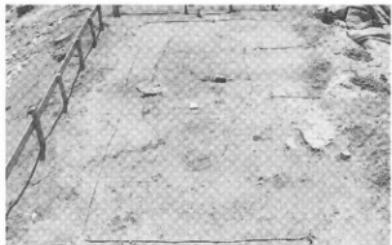


①第3主体黒褐色土検出状況（南西より）

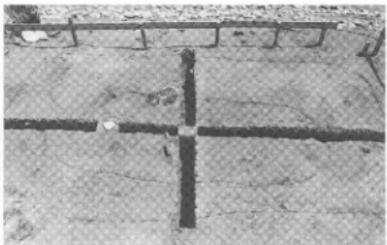


③第3主体土層断面（南西より）

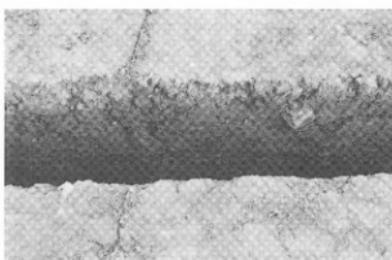
図版10



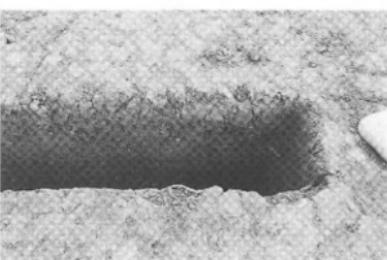
①第3主体検出状況（北東より）



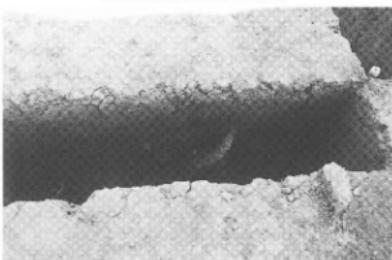
②第3主体検出状況（南西より）



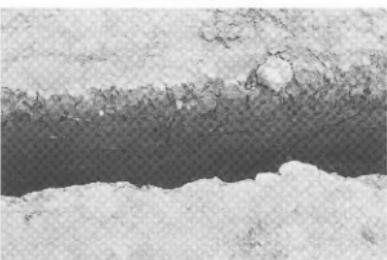
墓壙掘り形断面（北側）



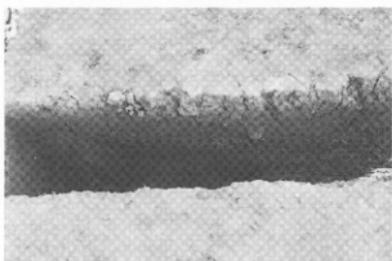
黒褐色土落ち込み



黒褐色土落ち込み（中心部分）



黒褐色土落ち込み

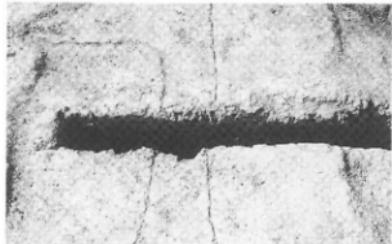


墓壙埋土堆積状況

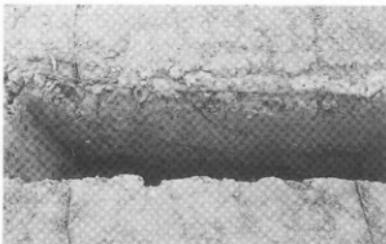


③第3主体土層断面

墓壙掘り形断面（南側）



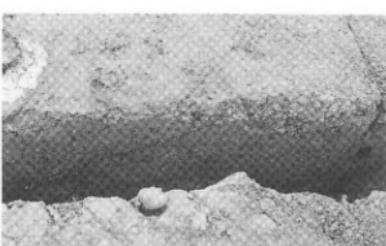
①第2・第3主体検出状況



②第3主体土層断面



③第3主体土層断面



④第3主体土層断面



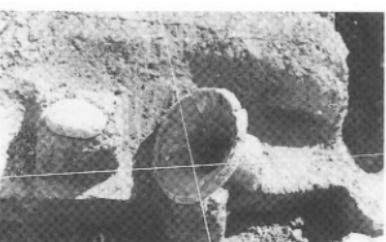
⑤第2・第3主体検出状況（南東より）



⑥第3主体検出状況（南東より）



⑦第3主体遺物出土状況（北西より）



⑧第3主体遺物出土状況（南西より）

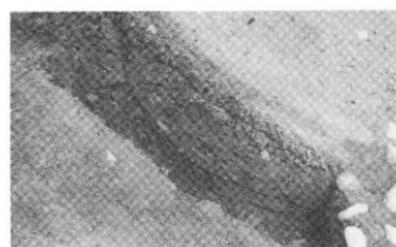
図版12



① 2 トレンチ



② 1 トレンチ



③ 3 トレンチ



④ 1 トレンチ



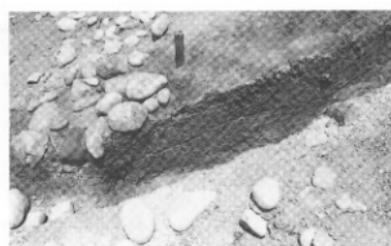
⑤ 1 トレンチ



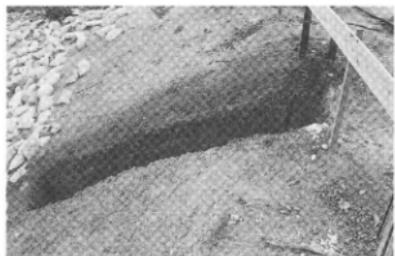
⑥ 19 トレンチ



⑦ 1 トレンチ



⑧ 1 トレンチ



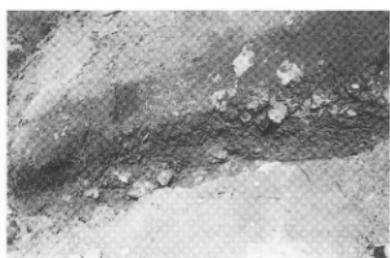
①2 トレンチ



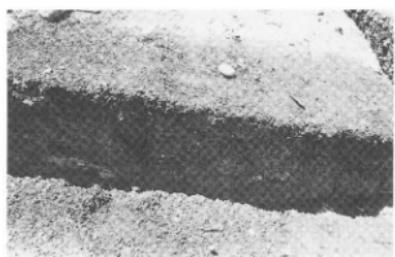
②19 トレンチ



③18・21 トレンチ



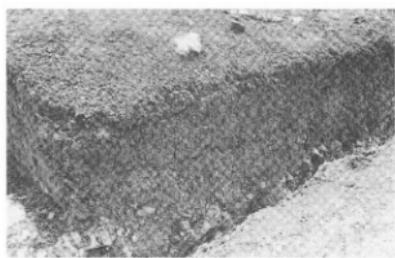
④19 トレンチ



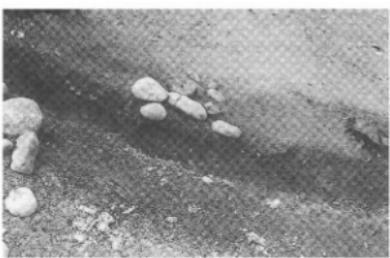
⑤18 トレンチ



⑥15 トレンチ

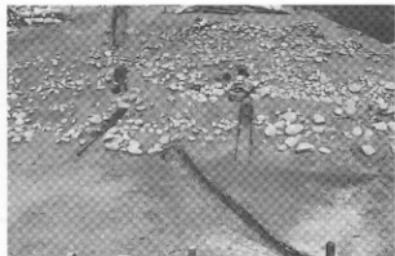


⑦20 トレンチ



⑧15 トレンチ

図版14



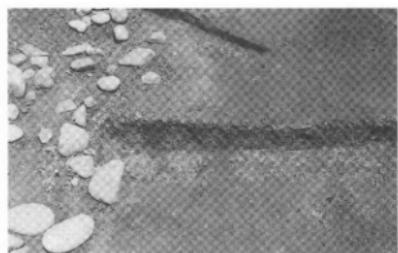
①南面貼石状況（南東より）



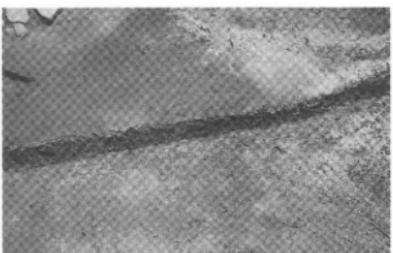
② 5 トレンチ



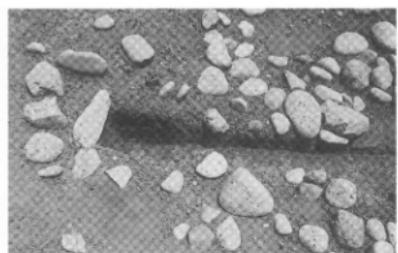
③ 6 トレンチ



④ 8 トレンチ



⑤ 8 トレンチ



⑥ 7 トレンチ



⑦ 9 トレンチ



①10トレンチ



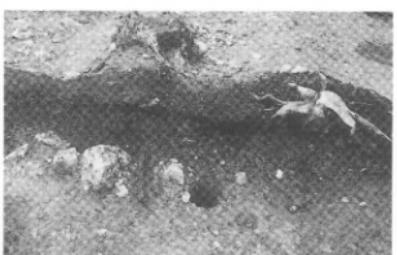
②12トレンチ



③IIベルト・東面ピット群



④Iベルト周辺



⑤IIベルト



⑥II・IIIベルト周辺

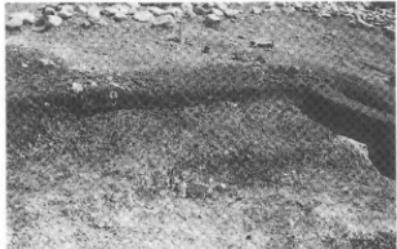


⑦IVベルト周辺



⑧IVベルト周辺

図版16



① 1号墳丘墓北東隅部



② 17トレンチ周辺



③ Vベルト周辺



④ 16トレンチ



⑤ Vベルト周辺



⑥ Vベルト周辺



⑦ Vベルト周辺



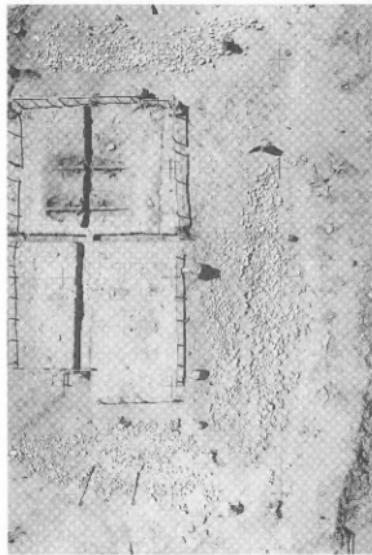
⑧ 1号墳墓道か？



② 1号墳丘墓北東隅（北より）



④ ①・2号墳丘墓（南東より）



① 1号墳丘墓（上空より）



③ 1号墳丘墓南東隅（東より）

図版18



①東面貼石状況



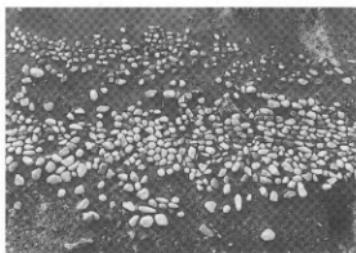
②東面隅部貼石状況



③東面隅部貼石状況



④東面貼石状況



⑤東面貼石状況



⑥東面貼石状況



⑦東面貼石状況



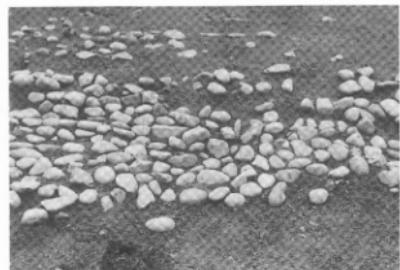
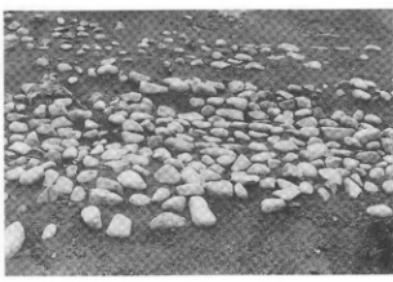
⑧東面貼石状況

图版19



東面貼石狀況

図版20



東面貼石状況



東面貼石状況

図版22



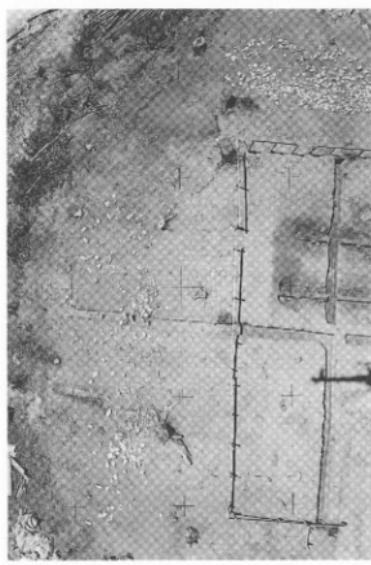
② 西面貼石状況



④ 西面貼石状況



① 西面貼石状況



③ 西面貼石状況（上空より）



①西面貼石状況（西より）



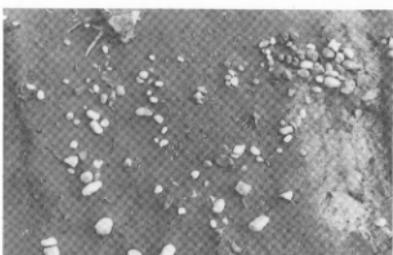
②西面貼石状況



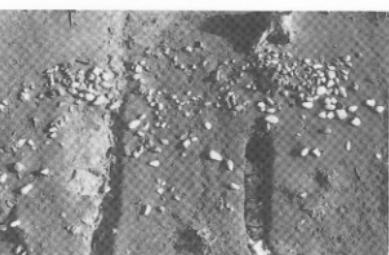
③1号墳丘墓（南上空より）



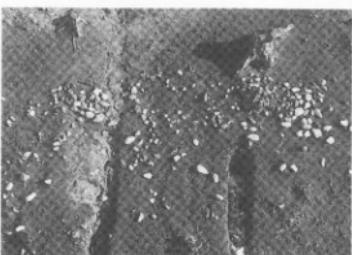
④1号墳丘墓（南上空より）



⑤西面貼石状況



⑥西面貼石状況

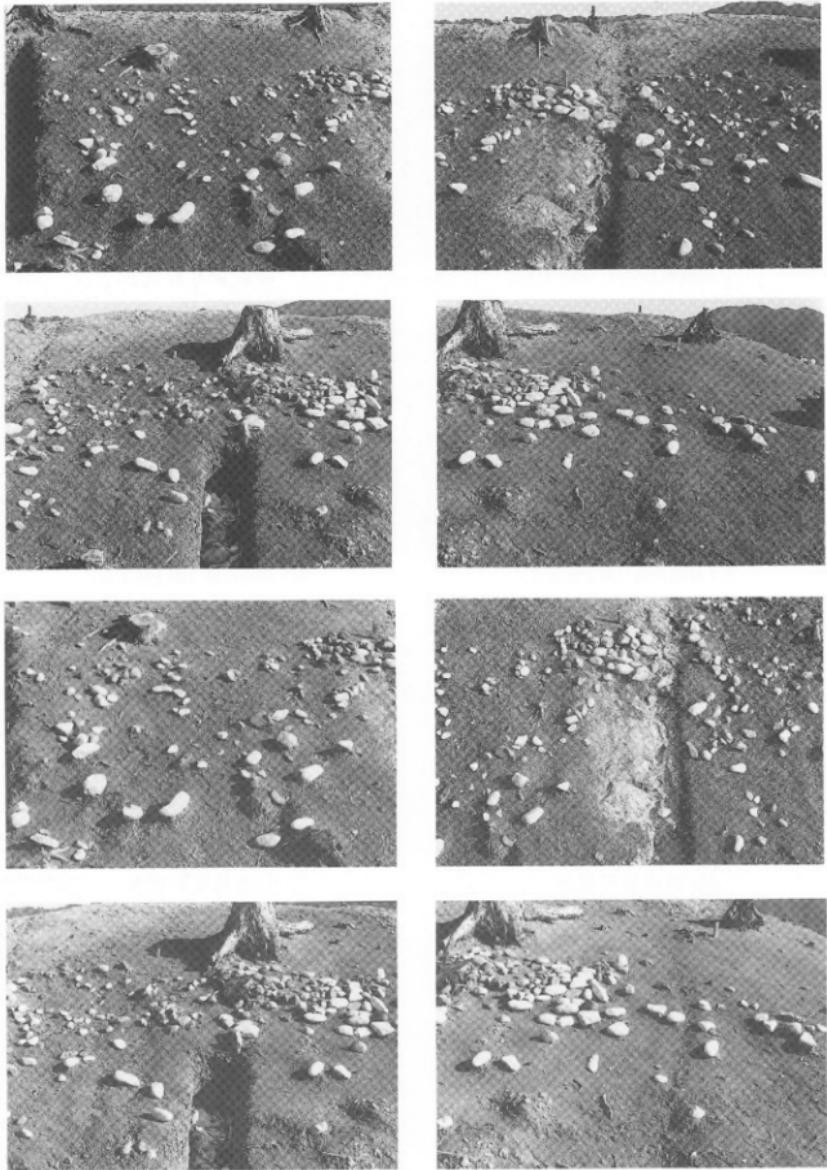


⑦西面貼石状況

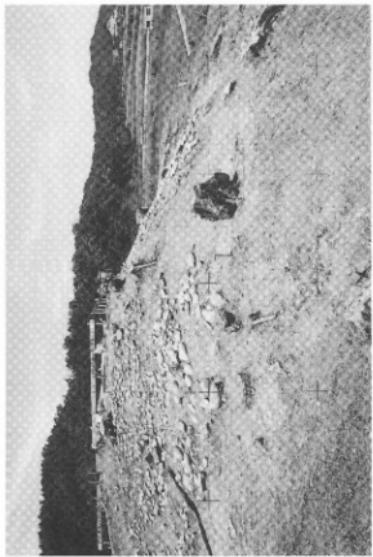


⑧西面貼石状況

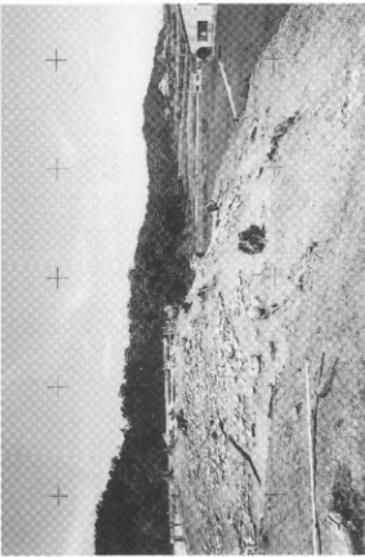
図版24



西面貼石状況



② 南面貼石状況（南より）



④ 南東隅部貼石状況（南東より）

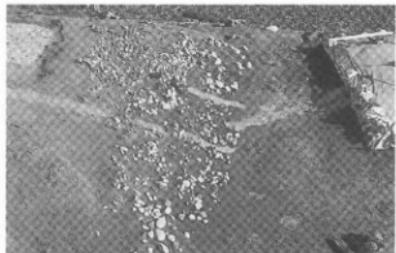


① 南面貼石状況（南より）



③ 南・東面貼石状況（上空より）

図版26



①南面貼石状況（南より）



②南面貼石状況（南より）



③南面貼石状況（南東より）



④南面貼石状況（南東より）



⑤南面貼石状況（南東より）



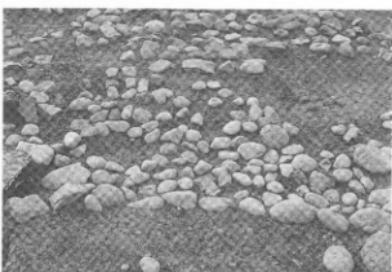
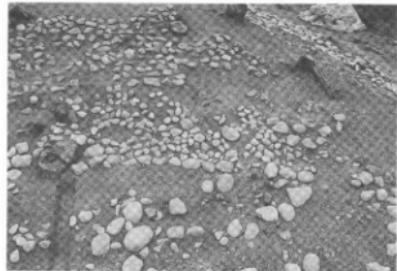
⑥南面貼石状況（南東より）



⑦南面貼石状況（南より）

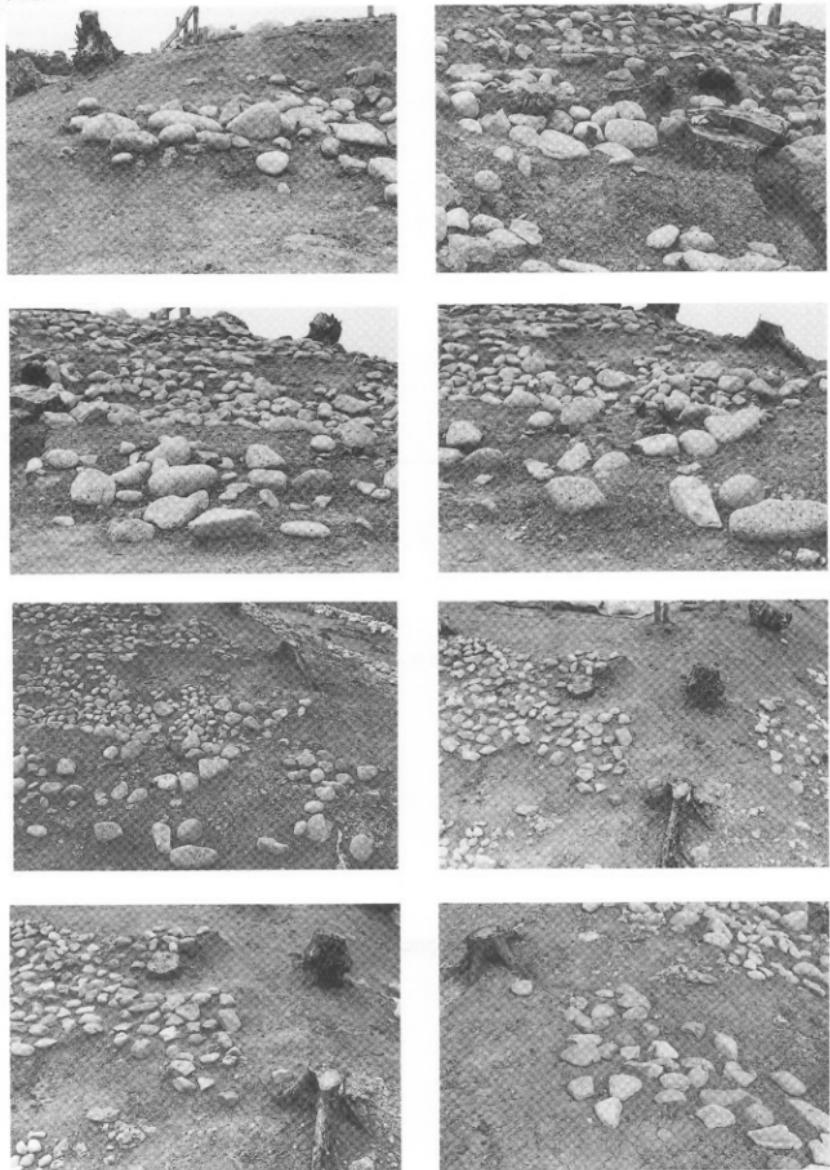


⑧南面貼石状況（東より）

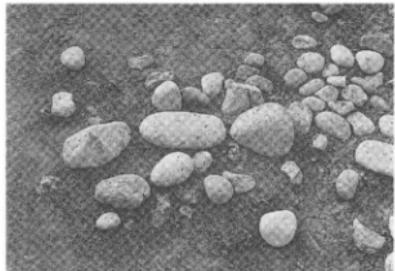


南面貼石状況

図版28



南面貼石状況



南面貼石状況

図版30



① 1号墳丘墓（上空より）



③ 北面貼石状況



④ 北面貼石状況



① 1号墳丘墓北西隅（上空より）



② 北面貼石状況



③ 北面貼石状況



④ 1号墳丘墓北東隅（北より）



⑤ 北面貼石状況



⑥ 北面貼石状況



⑦ 北面貼石状況



⑧ 北面貼石状況

図版32



① 北面貼石状況



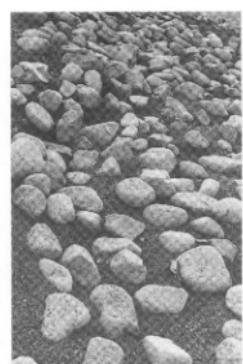
② 北面貼石状況



③ 16トレンチ



⑤ 北面貼石状況



④ 北面貼石状況  
(北東より)



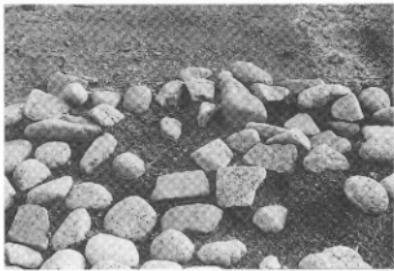
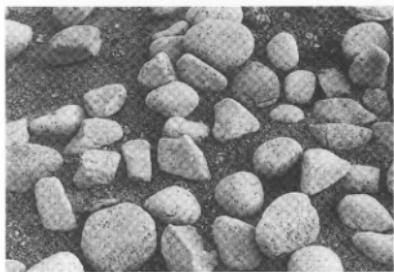
⑥ 北面貼石状況



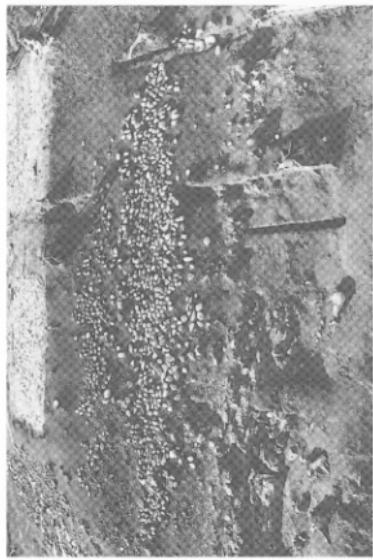
⑦ 北面貼石状況



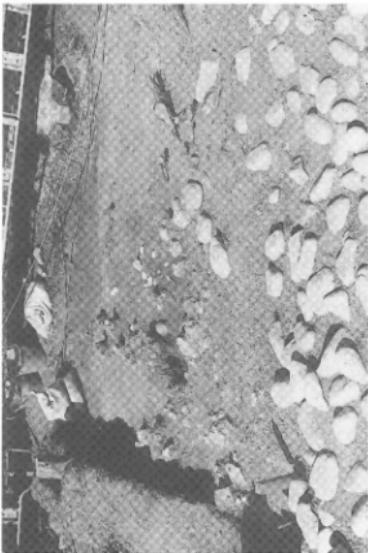
⑧ 北面貼石状況



北面貼石状況



① 東面貼石・岩盤露出状況

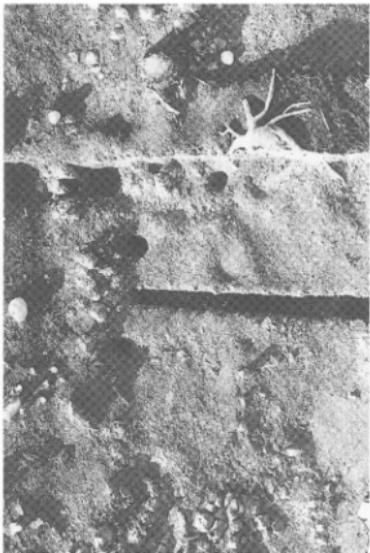


② 1号墳丘墓東側裾部、玉・石材チップ出土状況（南西より）



③ 1号墳丘墓東側裾部、玉・石材チップ出土状況（東より）

④ 1号墳丘墓東側裾部ビット完掘状況（東より）





① 1号墳丘墓東側据部、石材出土状況



② 1号墳丘墓東側据部、玉出土状況



③ 1号墳丘墓東側据部、玉出土状況



④ 1号墳丘墓東側据部、石材出土状況



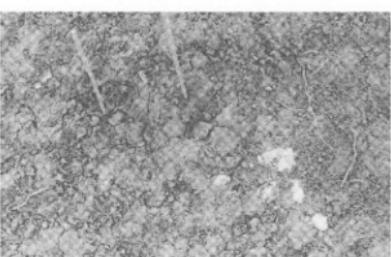
⑤ 1号墳丘墓東側据部、玉出土状況



⑥ 玉出土状況

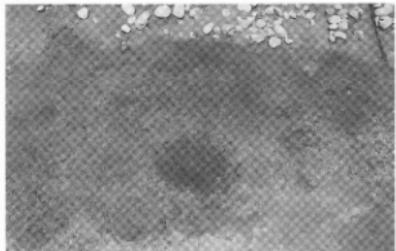


⑦ 1号墳丘墓東側据部、ピット完掘状況



⑧ 玉出土状況

図版36



①ピット検出状況



②南側据部ピット半截状況



③ピット 3



④ピット 1



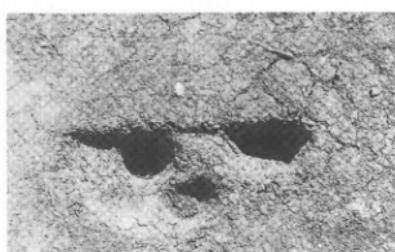
⑤ピット 4



⑥ピット 8



⑦ピット 2



⑧ピット 6 · 5



① 墓丘東側裾部岩盤露出状況（東より）



② 墓丘東側裾部岩盤露出状況（東より）



③ 墓丘東側裾部岩盤露出状況（東より）

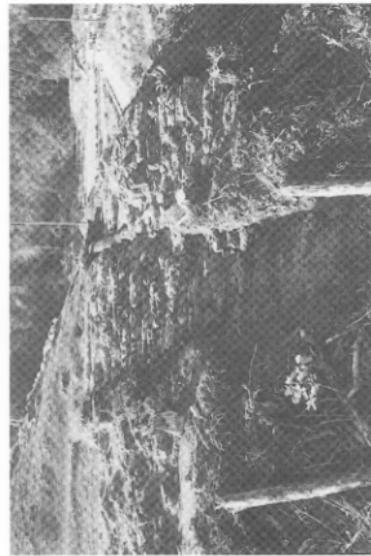


④ 墓丘東側裾部岩盤露出状況（東より）

図版38



①東面岩盤露出状況



③1号堤壩道状遺構（右中央はVベルト）



②1号堤壩道状遺構（右中央はVベルト）

④Vベルト



①東面岩盤露出状況



②東面岩盤露出状況



③東面岩盤露出状況



④東面岩盤露出状況



⑤東面岩盤露出状況



⑥東面岩盤露出状況

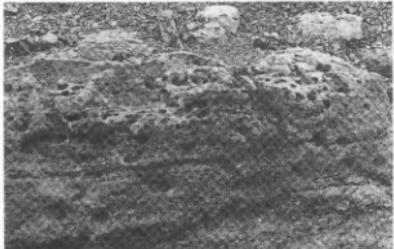


⑦東面裾部遺物出土状況



⑧東面裾部状況

図版40



①穿孔貝生息痕



②穿孔貝生息痕



③穿孔貝生息痕



④穿孔貝生息痕のある貼石



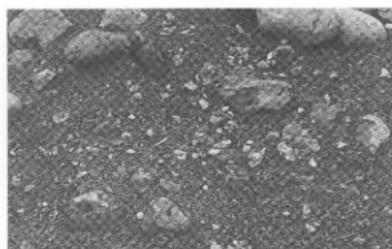
⑤穿孔貝生息痕のある貼石



⑥穿孔貝生息痕のある貼石



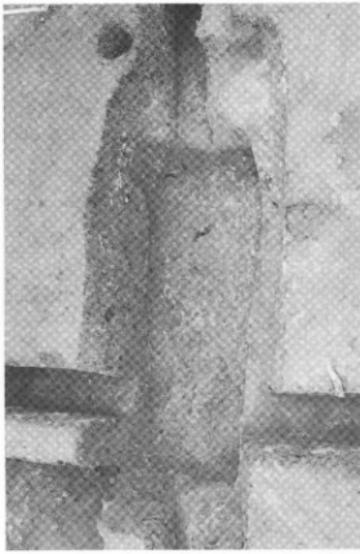
⑦穿孔貝生息痕のある貼石



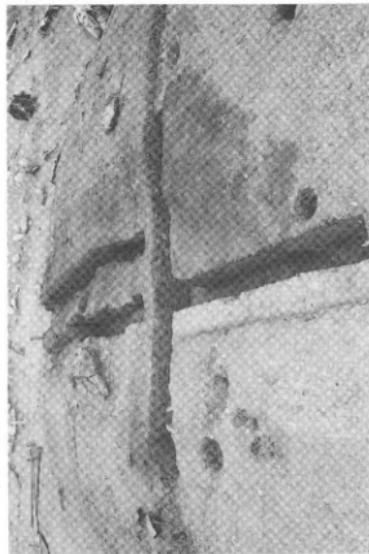
⑧穿孔貝生息痕のある貼石



② 2号墳丘墓完掘状況（北西より）



④第2主体完掘状況（南東より）



① 2号墳丘墓完掘状況（南東より）



③第1主体完掘状況（北西より）

図版42



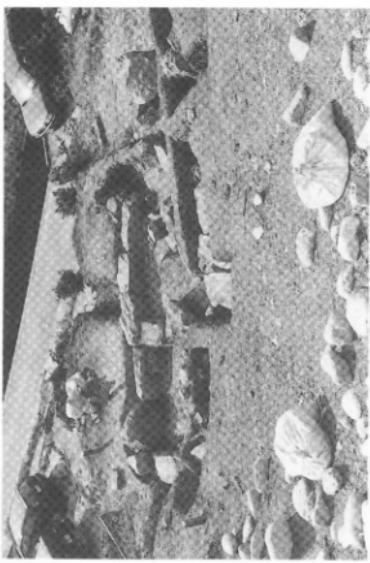
② 1号墳先端状況（東より）



④ 1号墳先端状況（北西より）



① 1号墳検出状況



③ 1号墳ベルト除去前（南東より）



① 1号填検出後、ベルト設定



② 1号填ベルト



③ 20トレンチ



④ 1号填縦断面土層検出状況



⑤ 1号填縫・横断ベルト



⑥ 1号填縫・横断ベルト



⑦ 1号填縦断面土層検出状況



⑧ 1号填横断面土層検出状況

図版44



① 1号墳横断面土層検出状況



② 1号墳横断トレンチ



③ 1号墳横断トレンチ



④ 1号墳玄門付近土師器出土状況



⑤ 1号墳遺物出土状況



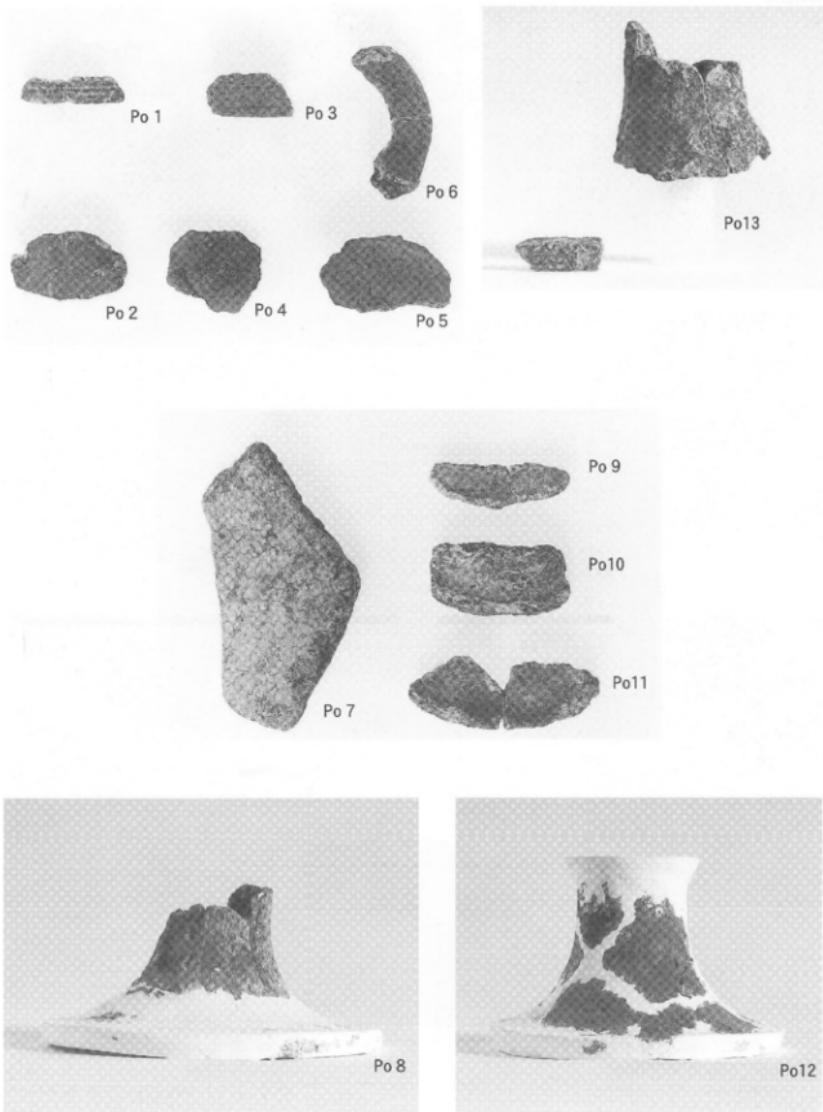
⑥ 1号墳遺物出土状況



⑦ 1号墳遺物出土状況

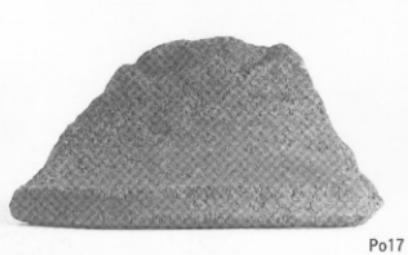


⑧ 1号墳丘墓と1号墳（北より）

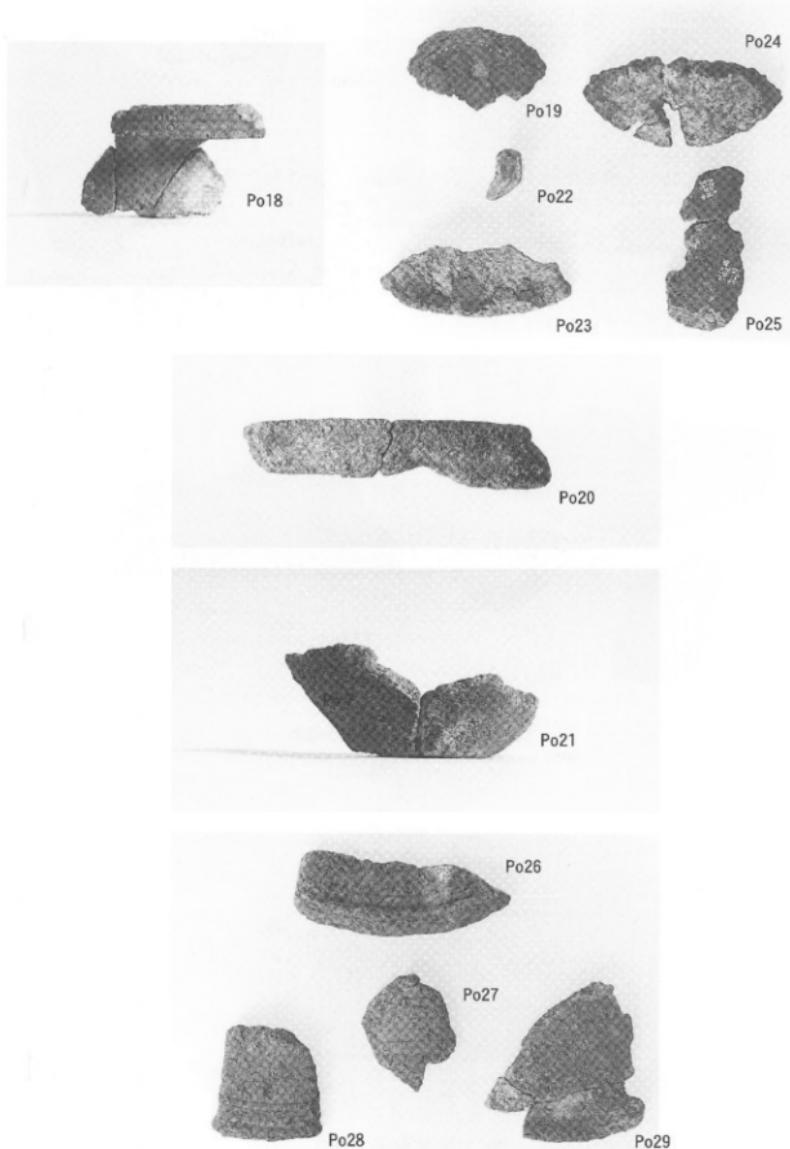


第1主体、北棺出土遗物

図版46

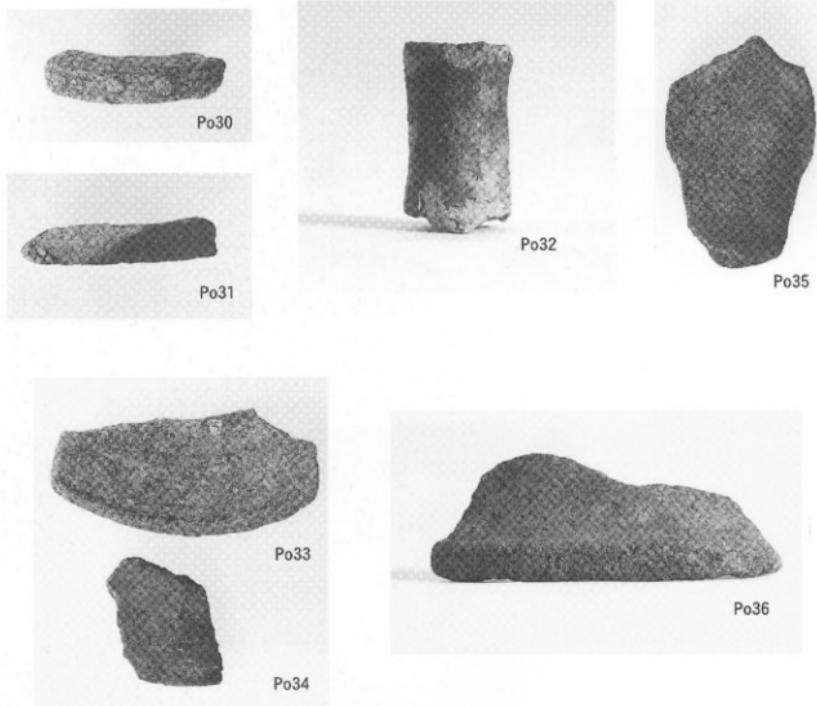


第1主体、北棺出土遺物



第1主体、南棺出土遗物

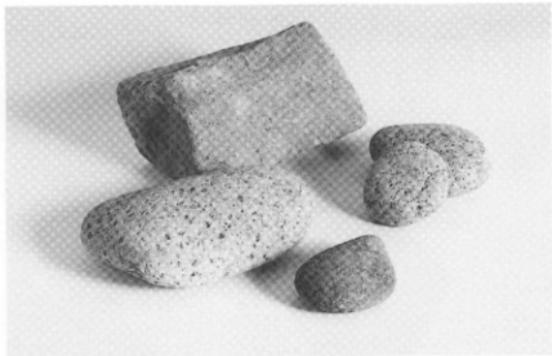
图版48



第1主体、北棺·南棺出土遗物



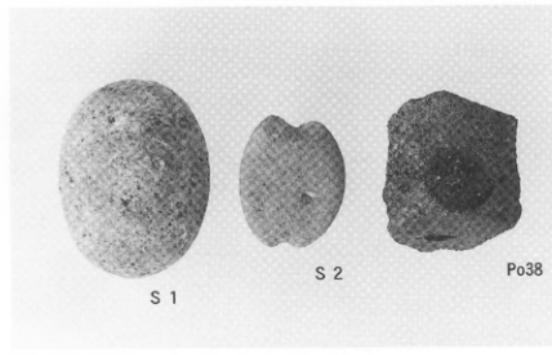
第3主体出土遗物



1号墳丘墓貼石石材

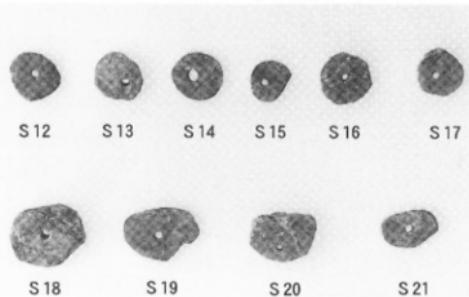
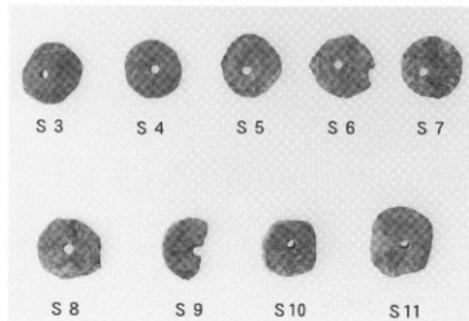
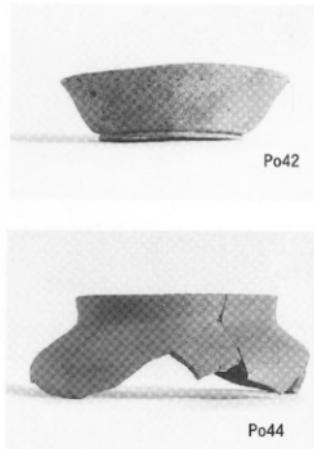
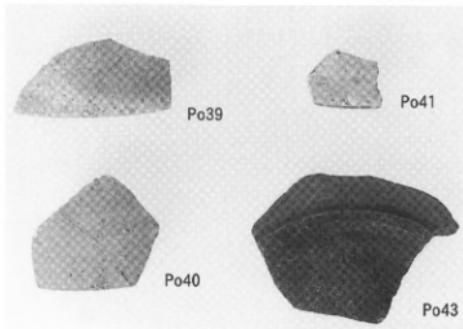


北棺出土円礫・玉砂利

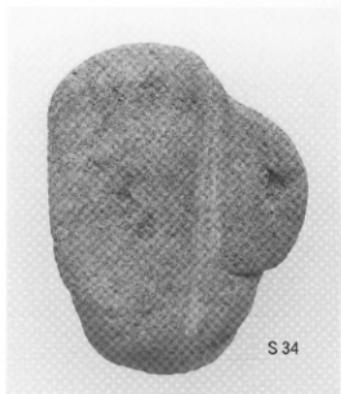
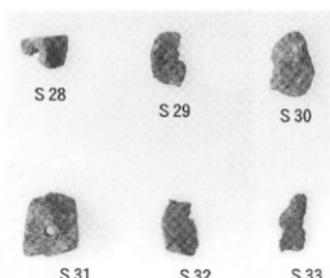
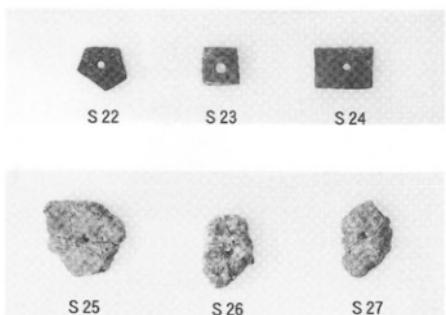


遺構外出土遺物 1

図版50



1号墳丘墓東側裾部出土遺物



滑石石材



クローム雲母石材

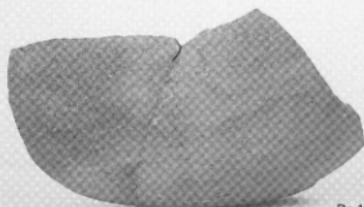
図版52



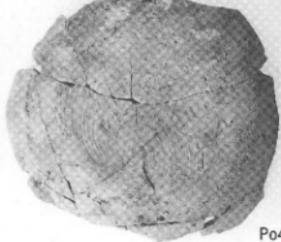
Po45



Po47



Po46

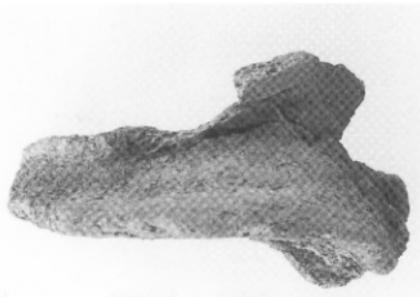
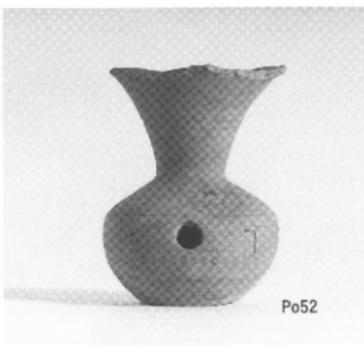
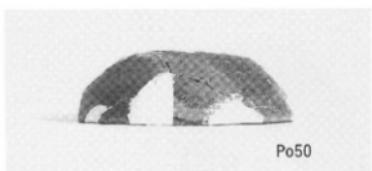


Po48



Po49

1号墳出土遺物



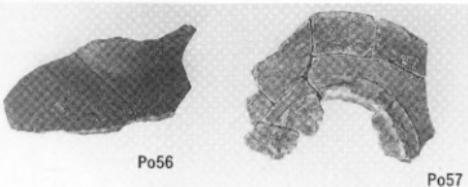
Po55



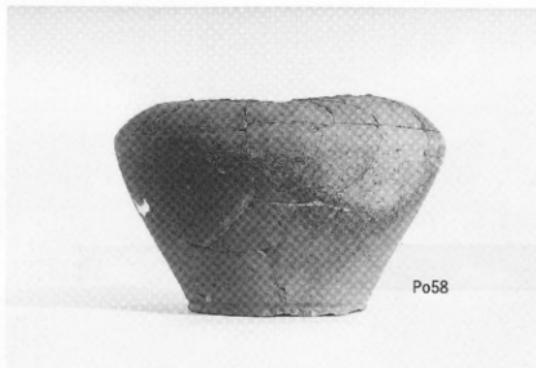
Po55

遺構外出土遺物2（1号墳丘墓北側斜面）

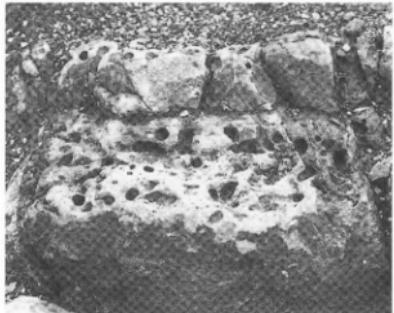
圖版54



遺構外出土遺物 2 (1号墳丘墓墳頂部)



遺構外出土遺物 2 (1号墳丘墓南側据部)



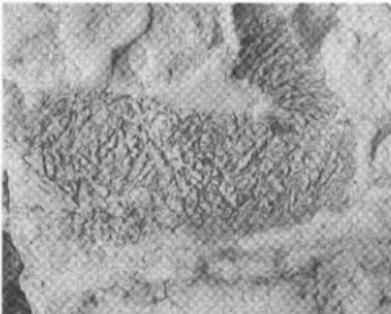
(1) 墓丘基の基盤岩平坦面にほぼ垂直に穿孔したニオガイ科の生痕。



(2) 同左。やや斜めの破断面に見られるニオガイ科の貝がつくった生痕。



(3) 墓丘のある丘陵の側面に見られる生痕。ほぼ水平な地層である。



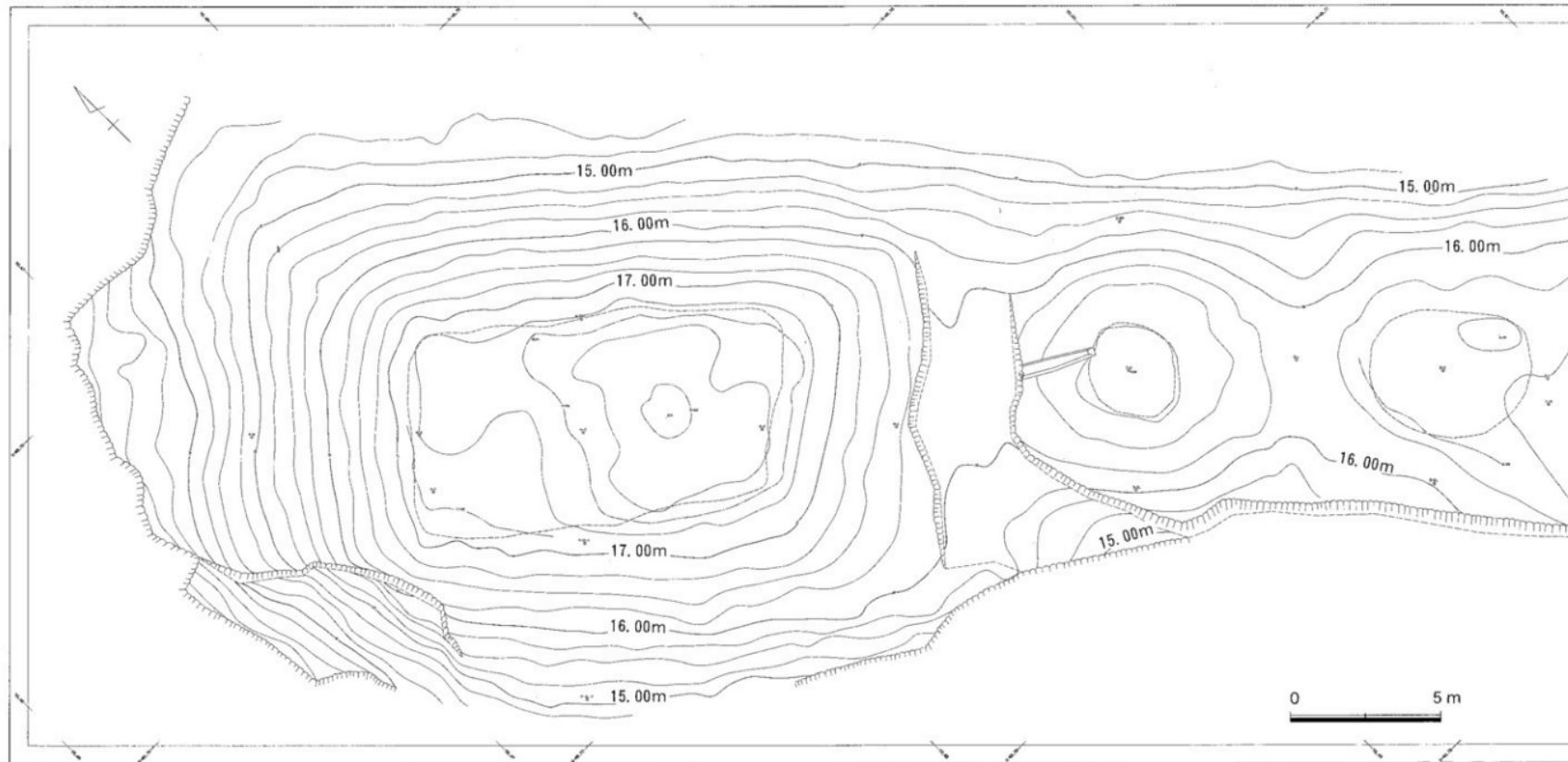
(4) 生痕の内表面に残るニオガイ科の貝が作った切削痕。



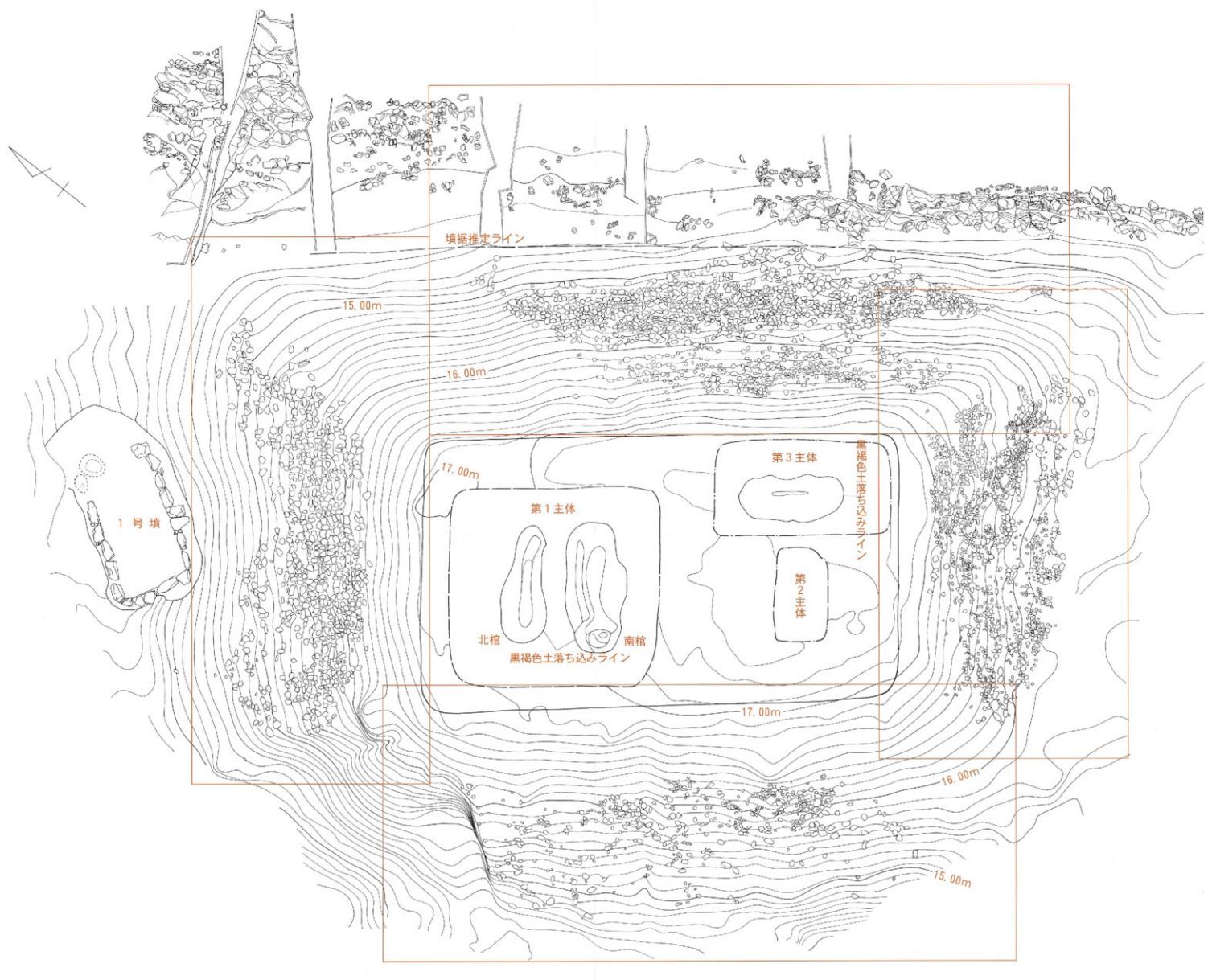
(5) 東側より見た墓丘と基盤岩の成層状態を示す写真。

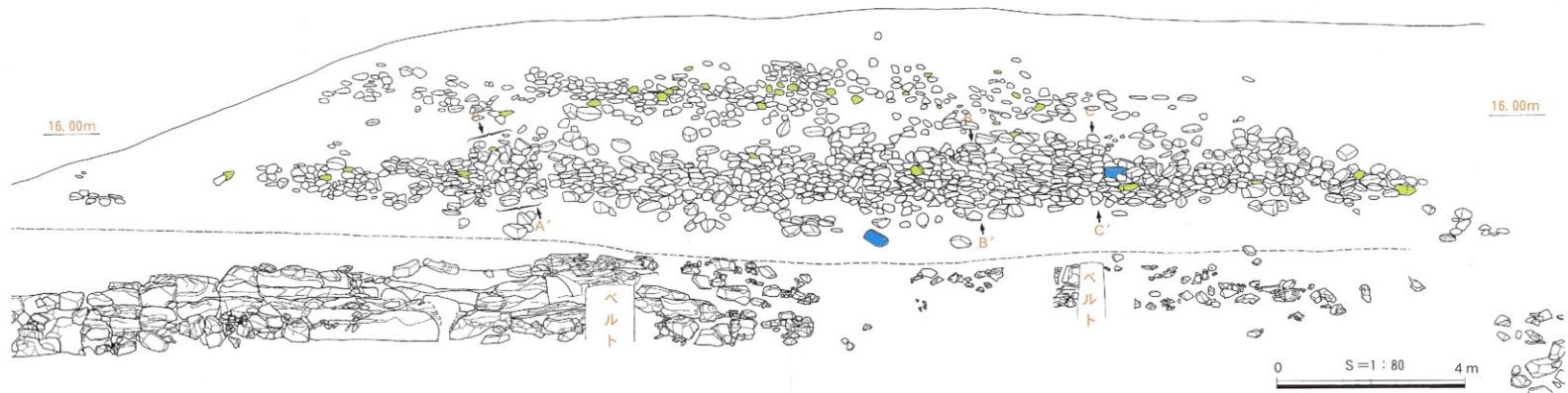
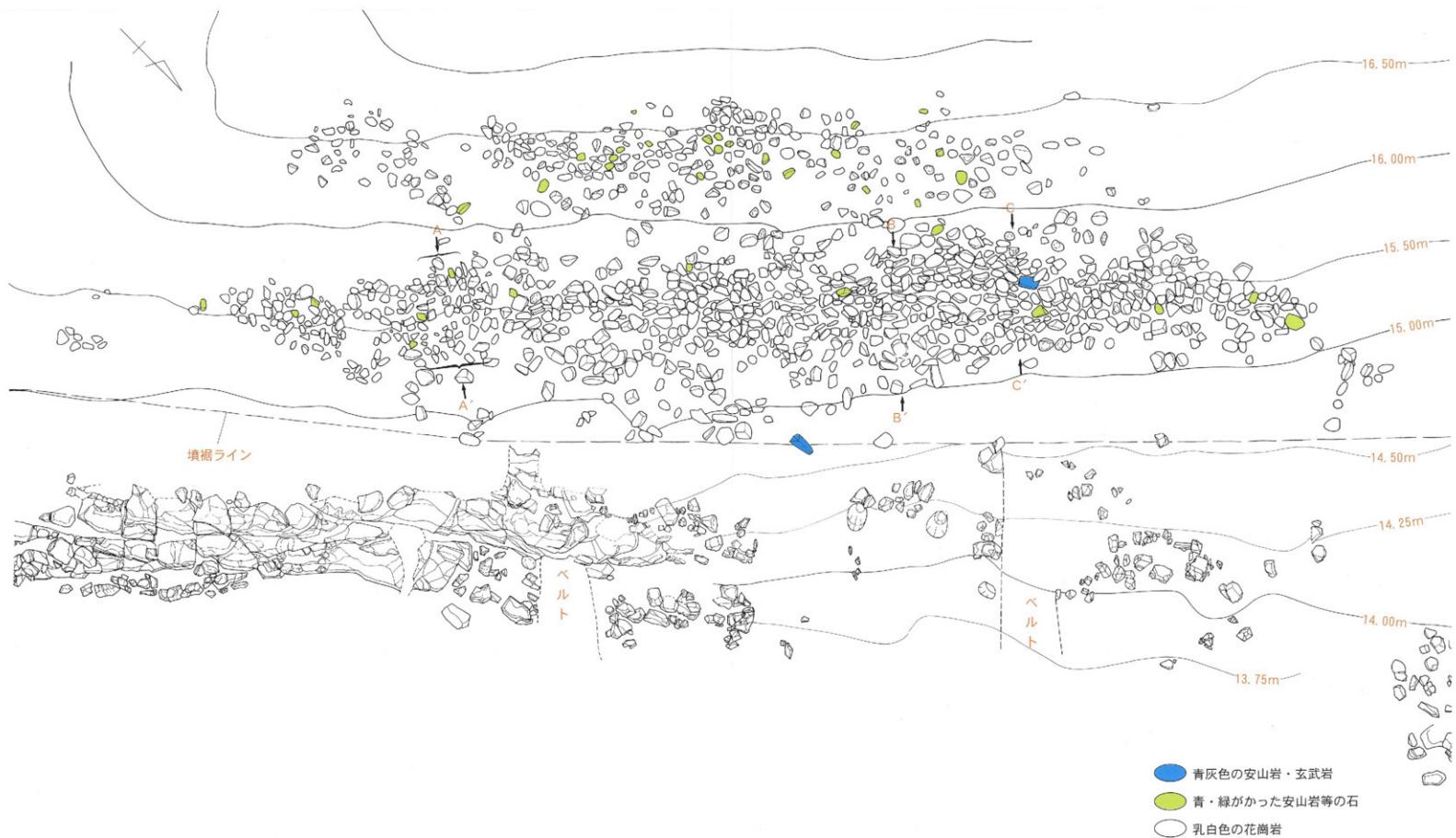


附図1 烏取県東部、弥生時代遺跡分布図

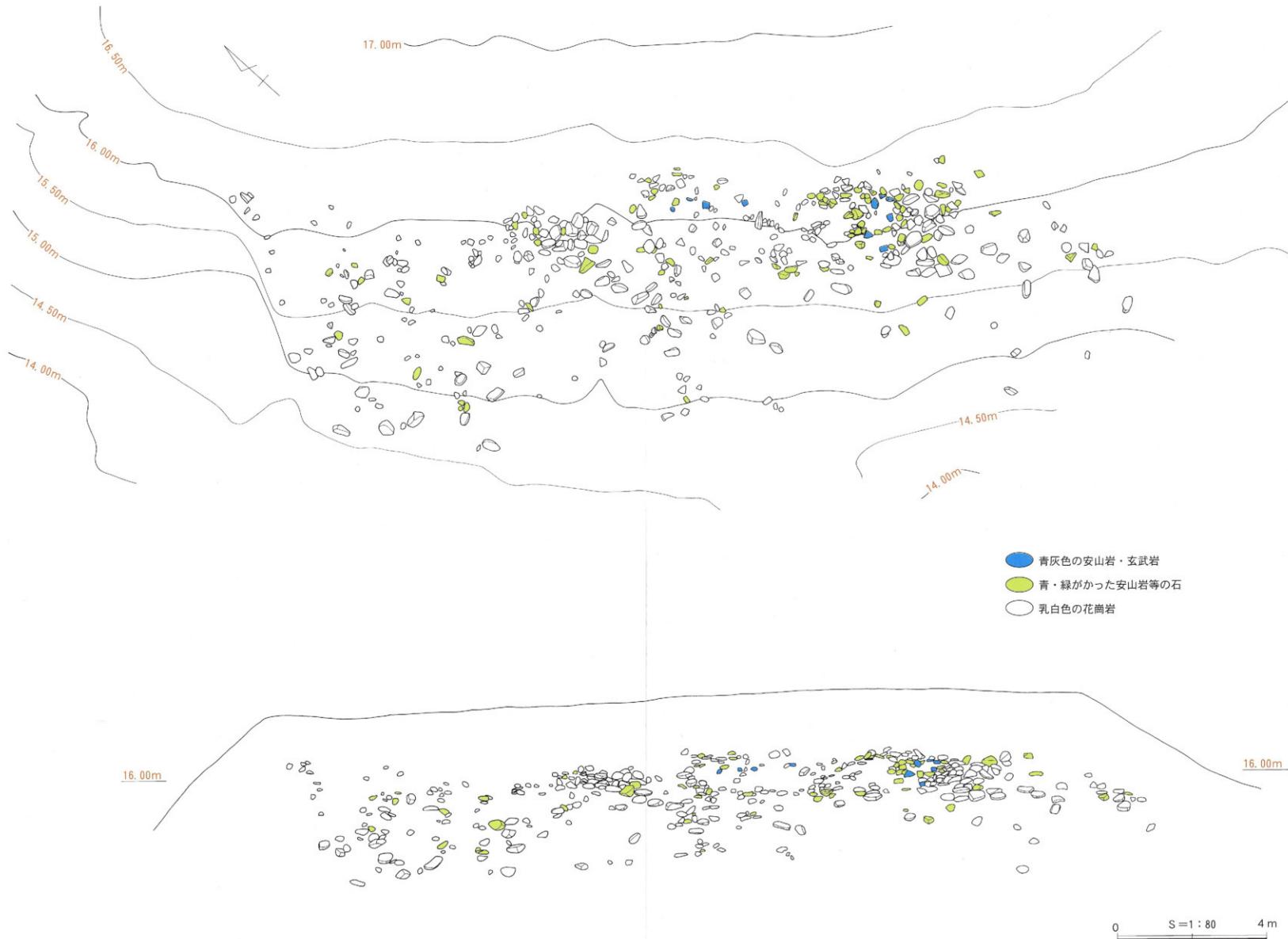


附図2 新井三嶋谷1号墳丘墓、調査前全体図

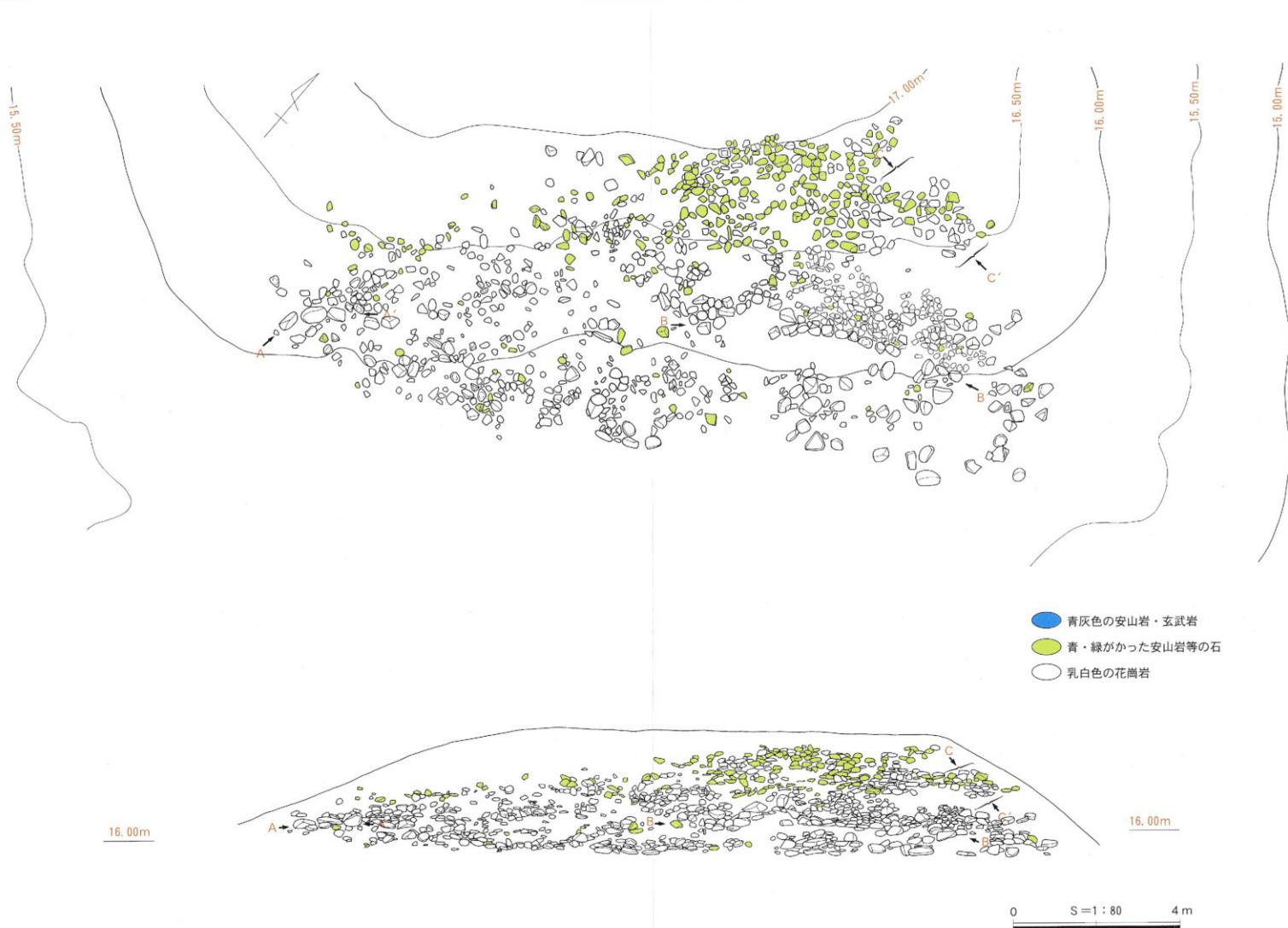




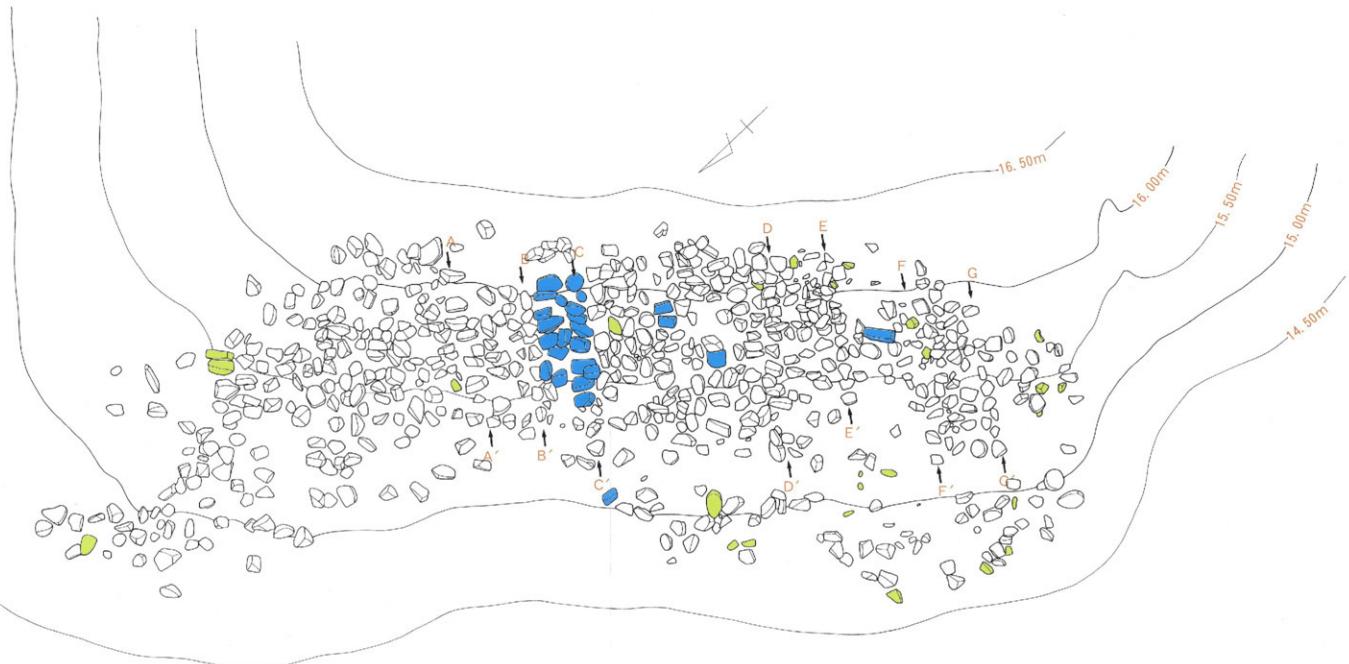
附図4 新井三嶋谷1号墳丘墓、東面貼石実測図（平面図・立面図）



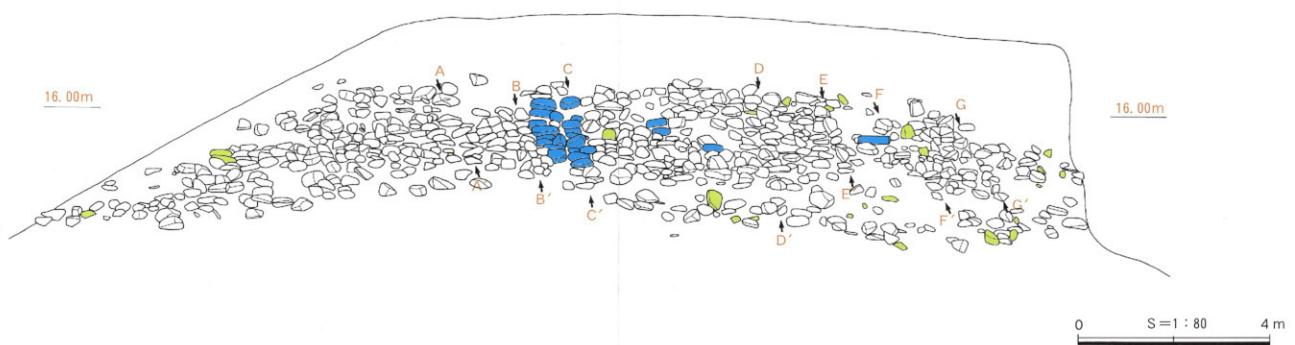
附図5 新井三嶋谷1号墳丘墓、西面貼石実測図（平面図・立面図）



附図6 新井三嶋谷1号墳丘墓、南面貼石実測図（平面図・立面図）



- 青灰色の安山岩・玄武岩
- 青・緑がかった安山岩等の石
- 乳白色の花崗岩



附図7 新井三嶋谷1号墳丘墓、北面貼石実測図（平面図・立面図）

---

岩美町文化財調査報告書 第22集

新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書

平成13年3月発行

編集 岩美町教育委員会

発行 〒681-0003 烏取県岩美郡岩美町蒲富675番地

TEL (0857) 73-1302

印刷 総合印刷出版株式会社

〒680-0022 烏取市西町1丁目215番地

TEL (0857) 25-0031

---